

# 西朋28

50周年記念号

西朋登高会

2004年4月





0007 夕張：芦別岳北尾根



0010 飯豊連峰/WC：  
大石川大熊沢



0013 奥秩父/WC：笛吹川東沢鷄冠谷右俣



0102 越後/VR：越後駒ヶ岳 - 荒沢岳を望む -





0105 北アルプス/ST : 室堂平 剣沢 タンボ沢



0114 和賀山塊/WC : マンダノ沢 - 朝日岳の頂上草原で -



0301 海谷山塊/VR : 取水口高地～阿弥陀山・昼闇山 - 鉾ヶ岳をバックに -

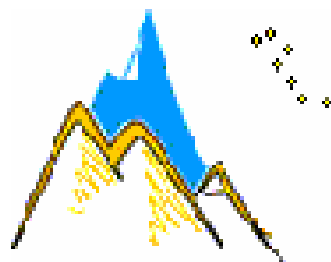
# 西朋 28

50 周年記念号

## 西朋登高会

### 目次

巻頭言	・・・・・・・・6
山行総覧	・・・・・・・・7
50周年記念特集	
福田さんと関谷さんのこと	・・・・・・・・11
「滝谷行き」報告	・・・・・・・・21
超OBの記録	・・・・・・・・22
当然の判断をした‘95初冬の尾瀬行	・・24
山行記録	
2000年度	・・・・27
2001年度	・・・・49
2002年度	・・・・69
2003年度	・・・・93
西高WV部活動報告	・・・・110
西朋登高会会則	・・・・112



## 巻頭言

西朋 27/28 をお届けします。1999 年 4 月に西朋 26 を出してから、5 年が過ぎました。間が開いてしまったのは会長の怠慢でしたが、何とか活動をまとめることができました。この間の活動はリーダーの上野君、学生リーダーの尾崎君を中心に日本的な沢登りを中心に、岩登り、冬山を含めて日本の中でのオールラウンドな活動ができました。

西朋登高会が昭和 28 年 4 月にできて 50 年が過ぎました。東京都立西高等学校の山岳部、ワンダーフォーゲル部と一緒に登った仲間が卒業後もスポーツアルピニズムの追求と西高生の指導を 2 つの大きな柱として活動を続けてきました。最近は大学生の活動人数が減ったり、西高から生徒の冬山の禁止や OB の付き添いの禁止など会の将来への不安要素はありますが、超 OB の活躍もあり、山があり山を愛する人がいる限り活動は続いていくものと思います。

**会長 山野 裕**

## 2000年度(平成12年度)山行総覧

No.	日程	山域/山行形式：山行名	参加者
0001	4/2	信越/ST：四阿山～根子岳	尾崎
0002	4/7-9	頸城/VR,ST：雨飾山南稜	山田,尾崎
0003	5/3-4	越後/VR【春山合宿】：郡界尾根～越後駒ヶ岳 (敗退)	加藤,上野,内田,尾崎, 灘吉
0004	5/6-7	上越：天神尾根～谷川岳～西黒尾根 /VR：芝倉沢雪訓	尾崎,灘吉
0005	5/21	奥武蔵/RCT：日和田山	山野,尾崎,灘吉,佐藤
	6/3-4	池袋 都岳連レスキューリーダー養成講座	尾崎
0006	6/10	北アルプス/ST：針ノ木雪渓	山田,尾崎
0007	6/23-24	夕張：北尾根～芦別岳	高橋,尾崎
0008	7/8-9	上越：谷川岳都岳連レスキューリーダー養成講座	尾崎
0009	7/30-31	奥秩父/WC：笛吹川東沢釜ノ沢西俣	加藤,尾崎,灘吉,佐藤
0010	8/12-14	飯豊/WC：【夏山合宿】大石川大熊沢～杵差岳	山野,加藤,上野,高橋,
	8/15-16	飯豊：杵差岳～飯豊本山	尾崎,佐藤
0011	8/26	Yosemite Valley, CA, USA：Half Dome	灘吉
0012	8/26-27	西朋祭：丹沢大石キャンプ場	
0013	9/15	奥秩父/WC：笛吹川東沢鶏冠谷右俣	高橋,尾崎,灘吉
0014	10/7-8	上州武尊山/WC：薄根川川場谷	尾崎,灘吉
0015	11/18-19	八ヶ岳/VR：石尊稜	尾崎,灘吉,佐藤
0016	3/12	南大菩薩：滝子山南稜	尾崎
0017	3/20	霧ヶ峰/ST	尾崎,他1

## 山行形式

ST	山スキー
VR	バリエーションルート
WC	沢登り
RC(T)	ロッククライミング(トレーニング)
FC(T)	フリークライミング(トレーニング)
IC	アイスクライミング



## 2001年度(平成13年度)山行総覧

No.	日程	山域/山行形式：山行名	参加者
0101	4/9	信越/ST：四阿山	尾崎
0102	5/3-5	越後/VR【春山合宿】：中尾ツルネ～越後駒ヶ岳	高橋，尾崎，上野利
0103	5/3-5	北アルプス：白馬三山	加藤，他2
0104	5/13	奥武蔵/RCT：日和田山	吉田慎，山野，尾崎，灘吉， 佐藤，田中，松長，西高生3名
0105	5/26-28	北アルプス/ST：立山雷鳥沢周辺，剣沢，タンボ沢	吉田慎，山野，尾崎
0106	6/23	奥多摩/WC：志田倉沢	尾崎，他4
0107	7/6	奥多摩/WC：秋川 盆堀川ユズリ葉窪	青谷
0108	7/8	奥多摩/WC：小坂志川ウルシヶ谷沢右俣～左俣	山野，青谷，尾崎
0109	7/15	上越/WC：谷川岳ヒツゴー沢	加藤，他2
0110	7/21	御坂/RCT：三つ峠	尾崎，他
	7/22	三つ峠～鶴ヶ鳥屋山	尾崎
0111	8/5-7	北アルプス/WC：双六谷～黒部五郎岳	加藤，他1
0112	8/10-13	北アルプス/VR：ハシゴ谷乗越～八ッ峰，源治郎 尾根～剣岳，立山三山～黒部湖	尾崎，他1
0113	8/14	奥多摩/WC：秋川 盆堀川三郎ノ岩道窪	青谷
0114	8/17-19	和賀/WC【夏山合宿】：マンダノ沢～羽後朝日岳	山野，加藤，上野，尾崎
0115	8/25-26	奥多摩/西朋祭：氷川キャンプ場	
0116	8/26	奥多摩/RCT：つづら岩	尾崎，他1
0117	9/7-8	奥秩父/WC：笛吹川 東沢釜の沢(西高9月山行)	尾崎，星野，灘吉， 西高生：森園，伊豆川，福村
0118	9/9	奥秩父/WC：笛吹川 東沢鶏冠谷左俣一の沢	尾崎，灘吉，福村(西高生)
0119	9/24	丹沢/WC：セドの沢	加藤，他1
0120	10/2	奥秩父/WC：南秋川 矢沢熊倉沢左俣東沢	青谷
0121	10/6-7	奥秩父/FC：小川山	尾崎，他4
0122	11/4	表妙義/WC：中木川小山沢	高橋，尾崎
0123	11/11	御坂/RCT：三つ峠	尾崎，他
0124	12/8	裏妙義/VR：谷急山北稜	加藤，他2
0125	12/15-16	八ヶ岳/IC：ジョウゴ沢，裏同心ルンゼ	尾崎，他3
0126	12/29-1/3	南アルプス/VR【冬山合宿】：小赤石岳東尾根(敗退)	加藤，上野，高橋，尾崎
0127	1/12-13	八ヶ岳/VR：赤岳南峰リッジ～横岳	尾崎，他4
0128	1/26	日光：奥白根山(日光白根山)	加藤，他1
0129	2/9-11	南アルプス/VR：富士川源流～鋸岳三角点ピーク	尾崎，他3
0130	2/24	上越/ST：天神尾根～谷川岳	尾崎，他2
0131	3/21-23	南アルプス：戸台～甲斐駒ヶ岳，仙丈岳	加藤，他1
0132	3/23	上越/石打丸山，ガーラ湯沢：山スキー練習	吉田慎，山野，尾崎，上野利
0133	3/24	上越/ST：巻機山ヘリスキー	吉田慎，大石，山野，青谷，尾崎
0134	3/28-29	奥秩父：雲取山	灘吉
0135	3/31	丹沢/RCT：広沢寺	尾崎，他1

## 2002年度(平成14年度)山行総覧

No .	日程	山域/山行形式：山行名	参加者
0201	4/13-14	八ヶ岳/VR：天狗尾根～真教寺尾根下降	尾崎，他1
0202	5/4-6	北アルプス/ST：槍沢～槍ヶ岳	加藤，他1
0203	5/5	奥武蔵/RCT：日和田山	尾崎，島田
0204	5/19	奥多摩/WC：北秋川惣岳沢	尾崎，他4
0205	5/22	北アルプス/ST：針ノ木雪渓	加藤
0206	5/26	北アルプス/ST：針ノ木雪渓	尾崎
0207	6/16	奥多摩/RCT：鳩ノ巣渓谷 セルフレスキュー	尾崎，他
0208	7/20-21	足尾・日光/WC：片品川平川三俣沢大岩沢， ネギト沢下降～日光	加藤，高橋，尾崎
0209	7/27-28	南アルプス/RC：北岳バットレスDガリー奥壁	尾崎，他3
0210	8/15-18	朝日連峰/WC：【夏山合宿】荒川角檜沢 下の沢～祝瓶山～大朝日岳～竜門山	山野，加藤，上野，尾崎，島田， 鈴木
0211	8/24	奥多摩/WC：川苔谷逆川	山野，尾崎，灘吉， 福村，岡島，服部(西高生)
0212	8/24-25	西朋祭：奥多摩 氷川キャンプ場	林，山野，渡辺，中村， 松本，上野午，尾崎，灘吉， 福村(西高生)
0213	8/25	奥多摩/WC：水根沢谷	渡辺，中村
0214	9/8	奥多摩/RCT：岳嶺岩・ビレイテスト	尾崎，他4
0215	9/15	奥武蔵/RCT：日和田山	山野，尾崎，灘吉，島田，鈴木， 石塚
0216	9/22	奥秩父/WC：笛吹川東沢鶏冠谷左俣本谷	尾崎，他1
0217	10/12-14	北アルプス/VR：貧乏沢下降～北鎌尾根	尾崎，他1
0218	11/2-4	南アルプス/VR：転付峠～大井川西俣～ 悪沢岳北尾根偵察	尾崎，他1
0219	12/7-8	上州：武尊山	山野，尾崎，島田，石塚
0220	12/28-29	上越/ST：宝台樹スキー場	上遠野，山野，青谷，岡田
0221	1/11-13	八ヶ岳/VR【冬山合宿】：権現岳～赤岳， 阿弥陀北稜	上野，尾崎，島田，石塚
0222	3/14-15	上越/ST：宝台樹スキー場	山野，青谷，西高生4名
0223	3/21-23	上越/VR：俎嶺山稜～谷川岳～茂倉岳	岡田，尾崎，灘吉

## 2003 年度（平成 15 年度）山行総覧

No .	日程	山行名	参加者
0301	4/26-29	海谷/VR：<春山合宿> 取水口高地～阿弥陀山・昼間山	上野午，尾崎，灘吉
0302	4/13	奥多摩：浅間嶺	島田，他
0303	4/26-27	南ア前衛：入笠山	島田，他
0304	5/25	北アルプス/ST：白馬大雪渓	尾崎
0305	6/7	奥武蔵/RCT：日和田山	山野，岡田，尾崎，灘吉，島田
0306	6/15	湯河原/RCT：幕岩 レスキュートレーニング	尾崎，他
0307	6/21-22	南アルプス：鳳凰三山	島田，他 2
0308	7/20	奥多摩/WC：峰谷川長久保沢	山野，青谷，岡田，尾崎，田中
0309	7/27	奥多摩/WC：日原川犬麦谷	尾崎，他 3
0310	8/1-5	南アルプス：仙丈ヶ岳～白峰三山	島田，他 6
0311	8/9-12	和賀山塊/WC：<夏山合宿> 和賀岳 ～マンダノ沢～羽後朝日岳	山野，青谷，松本，加藤，上野， 尾崎，島田
0312	8/24	奥多摩/WC：丹波川小常木谷	加藤，尾崎，灘吉，島田
0313	8/24-25	奥多摩/西朋祭：氷川キャンプ場	
0314	10/18-19	越後：苗場山	島田，他 3
0315	10/25	中央沿線：高尾山	島田，他
0316	11/23-24	北アルプス：八方尾根～唐松岳	松本，島田，石塚
0317	12/13	天子山塊：毛無山～本栖湖	尾崎
0318	12/20-21	上越：谷川岳登山指導センター周辺 雪訓 谷川岳西黒尾根	尾崎，他 4
0319	12/27-28	上越：宝台樹スキー場	上遠野，山野，青谷
0320	12/28-30	南アルプス：<冬山合宿>三伏峠～塩見岳	加藤，尾崎，灘吉，島田
0321	1/31-2/1	八ヶ岳/VR：赤岳東稜	尾崎，他 3
0322	2/28～29	八ヶ岳/VR：赤岳シヨルダ右リッジ敗退	上野午，尾崎
0323	3/14	上越/VR：足拍子岳南尾根	尾崎，他 2
0324	3/20-21	上越：タカマタギ	島田，他
0325	3/21	日光/ST：戦場ヶ原	尾崎，他 1
0326	3/28	上越/ST：宝川温泉～雨ヶ立	青谷，尾崎

## 50 周年記念特集

## (1) 追悼・福田さん、関谷さんを偲ぶ

## ・黒澤 隆さんより

1959 年 10 月 18 日、穂高岳滝谷第一尾根で関谷 徹さん、福田 宏二郎さんが遭難された山行を、黒澤 隆さんに回想していただきました。

## 福田さんと関谷さんのこと

### [1]

福田さんに初めて会ったのは、昭和30年(1955年)5月、入部して最初の山行の丹沢沢登りだった。土曜の午後、小田急新宿駅のホームに集合したわれわれの前に、がっしりした小柄な男が「OBの福田です」と名乗って現れた。小柄で骨太、色黒、無口が初対面の印象だった。渋沢駅から夕暮れの麓道を歩き二股にテントを張り、翌朝、わらじを履いて勘七の沢を登った。すべてが初体験のこの山行は、今でも昨日のように思い出される。絶えることの無い沢の水音が、初めての山の夜の不安をかきたてたこと、福田さんに確保してもらって登ったF5の岩の、今も残る両手の感触、大倉尾根を走って下って泣いた膝のこと。

この年、福田さんは大学2年で、西朋のエースとして活躍しておられた。関谷さんはまだ二浪中だったようで、会合でお見かけする程度だった。小柄、色白で目鼻立ちのはっきりしたハンサムな青年という印象だった。

二人そろって会ったのは、翌夏の横尾だった。塩出の事故の時だ。肺炎の塩出を槍の診療所にあずけ、横尾に下りた。烏帽子からの縦走を同行したOBの小田さんと飯塚さんは塩出に付き添い、かわって、福田さんと関谷さんがわれわれと蝶、穂高へ同行した。その時、松本から都筑先生も来られたようで、福田さんたちとの写真が残っている。私の手元に残る唯一の二人の写真である。

翌年、昭和32年(1957年)の8月末、私は二人と槍から穂高へ歩く機会を得た。二人は北鎌を登り、槍で私と落ち合うというものだった。私のこの記憶ははなはだ曖昧だったが、先日、目沢さんのところで京田守弘さんの遺稿集を見つけ、京田さんが私を新宿駅に見送りに来てくれた事を知った。

槍の肩で、前夜雨に降られたらしく、ツェルトを干している二人に会った。「黒澤、北鎌はつまんないぜ」というのが二人の言葉だった。私は気持ちがふっきれた感じだった。というのは、前年の塩出の死と北鎌とに、私なりにあるこだわりを持っていたからだった。3人で晩夏の午後を穂高へ歩いた。初めて見る滝谷に私は圧倒された。夕日に赤く照り輝くその岩肌に言葉もなく、ただ黙って見つめていた。「鳥のとまるところもねえずら」という言葉が、しきりに思い出された。二人は「あれがクラック尾根、あれが第一尾根」としきりに品定めをしていた。

その夜は北穂の頂上に3人でツェルトをかぶって寝た。満天の星空は、白鳥座を見つけることすら一苦労だった。翌朝、滝谷を登る二人と別れて山を下りた。

### [2]

一年の浪人を経て、昭和34年(1959年)ようやく大学に入ったものの、その春にスキーで膝を捻挫などして、山に行くでもない無気力な日々を送っていた。秋になって、関谷さんから滝谷へ行こうと誘われた。関谷さんは石川島に就職が決まって喜んでおられた。私と松田稔さん、中村乙丙君と4人で10月の秋休みを利用して涸沢に入り、後から福田さんも参加するということがあった。

福田さんは建設省へ就職して2年目で、自ら希望して焼岳の砂防工事事務所に勤務されていた。「実は」と切り出す関谷さんの話はこうだった。「今年の冬に滝谷クラック尾根を福田、関谷でやる。」

お前らボッカせい」。私は二つ返事でオーケーした。福田、関谷の二人なら、と信頼していたし、冬の岩登りは当時誰しもが抱いていた目標で、それに関われることは願っても無い機会だった。初めての冬の穂高で、チラッと北穂沢の雪崩の不安が頭をかすめたが。後で知ったことだが、その年の暮れ正月の滝谷は大変なブームだったらしい。成城、同志会、JCC、その他大勢が冬の滝谷に集まった。その数年前から一の倉を起点として岩登りが賑やかになってきて、「先鋭的アルピニズム」なる言葉がしきりに唱えられていた。福田、関谷の二人もその時代の申し子であり、私もまた末端で憧れ、声援を送る一人であった。

10月13日、二年ぶりの上高地ではもう紅葉が始まっていた。徳沢と横尾のあいだの梓川は荒れ、川筋が変わっていた。その直前の伊勢湾台風の被害だったのだろうか。涸沢は紅葉の真っ盛りだった。われわれの後から法政の大部隊、更にいくつかの大学が入り、テント村も賑やかになってきた。翌14日は雪で停滞。15日は快晴。二尾根で関谷さんから岩登りのテクニックを教わった。16日は再びみぞれ気味となり、北穂まで登ったが滝谷はあきらめて引き返した。

17日は快晴となった。松田さんと中村君は授業の都合で一足先に下りなければならなかった。吊り尾根を通過して岳沢を下ることとした。朝出がけに関谷さんは松田さんに、「おい、これ下ろしてくれ」と40mザイルを預けた。残りは30m一本となった。「二人だからいいよな」と関谷さんは言っていた。17日は私と二人、18日は福田さんと二人で第一尾根の予定だった。関谷さんと二人となったその日は、第三尾根、中央稜を登った。10月の滝谷の岩は冷たく、悪名高いC沢のガレも浅い積雪の下で安定していて危なげなく下ることができた。私は穂高の秋のすばらしさと岩登りの快感を満喫しゴキゲンだった。関谷さんからは「黒澤、思ったより早いな」とおだてられ、おおいに気を良くしていた。関谷さんが北穂小屋の小山さんに冬にクラックをやると話した。小山さんは、「クラックもワリイぞ、氷がびっしり詰まってるからな」と答えていた。

夕方涸沢に下りてから、ずっと関谷さんは福田さんが上がって来るのを待ち望んでいた。やっと夜8時ごろ福田さんが到着した。夕方まで働いて、上高地から夜道を飛ばして来たのだ。たちまちテントのなかは二人の談笑に沸き返った。久しぶりの親友同士二人の邂逅だった。話題は尽きることなく次々と続いた。就職のこと、「石川島だって、良かったな、関谷」、山の仲間のこと、過去の山行のこと、今冬の滝谷のこと、「松田たちがボッカに来る」「おう、そりゃあいい」「おれたち、冬の滝谷でオッチンだら誰が来てくれるかな」と悪い冗談まで飛び交い、二人で笑い転げていた。

10時の気象通報で天気図を書いた。台風18号はまだ沖縄あたりでノロノロしていた。「まあ、明日も未だ台風は大丈夫そうですね」と二人に話すと「大丈夫、大丈夫」。私はこのあと、お先にと寝袋にもぐりこんだ。二人はそのあとも遅くまで話し込んでいたようだった。

18日の朝はどんよりと曇っていた。風はなく、それほど寒くなかった。7時頃二人は出て行った。空を見上げて「まあ、なんとか持つだろう」と二人で言葉を交わしていた。私も「このくらい大丈夫」と元気付けたような気もする。なにしろ、少々雨や雪でへこたれる二人ではないと信じていたから。2時か3時には北穂の小屋で会うこととし、私はその前に北穂へ上ってP2から二人の登攀をながめるつもりだった。昼飯に何を持たせたか覚えていない。ただ、アメと梨、この梨は私が担ぎ上げたので覚えているのだが、それを渡そうとしたら、どうせ上で会うのだからお前が持って来いということだった。この朝の天候はというと記録も無く記憶も不確かだ。奥穂は見えていたかどうか覚えていない。東大の記録によれば、早朝は「高曇り、穂高の稜線がはっきりと



みえた」、「北穂沢のトラバースを了え、南稜に取り付く頃、空は雪模様となり、間もなく雪が舞い始めた」とある。二人は東大より1時間後の7時頃出たから、半分ぐらい迄雲のたれこめた北穂沢に登る二人の後姿を見送ったという私の記憶に合っている。

私はその後10時頃テントを出た。涸沢は小雨がバラついていた。風は無く寒くもなかった。南稜に登るにつれ、みぞれから雪に変わり、北穂頂上付近ではくるぶしまでの積雪だった。第二尾根 P2 に着いたのは12時過ぎだったろう。滝谷は吹雪の中だった。B 沢側のガス、雪、風が途切れることは無かった。しきりに叫び声が聞こえる。こちらも「セイホーツ」と叫ぶが届きようも無い。風は強い北風だった。B 沢側には福田、関谷の他に数パーティ入っているらしいことはわかった。C 沢側は吹雪の中に時折ドームの姿がうっすら見えた。2時ぐらいまで P2 に立ち尽くしていたが、一向に吹雪も収まらず二人の姿も見えず、もう二人はあがったか、引き返したかと思い始めた。B 沢側からの声が聞こえなくなったこともある。寒さが耐えがたかったという記憶は無い。引き返す時、積雪はもう膝までであった。

北穂の頂上も吹雪いていたが、小屋だけは妙な静けさの中であって、中から低い音の響きが漏れ聞こえていた。戸を開けると中には誰もおらず、チェロの音だけが溢れていた。それは偶々私の知っていた曲、バッハの無伴奏チェロソナタだった。外のごうごうたる吹雪と中のチェロ。この異様なコントラストに、四次元の世界へ迷い込んだような気に陥った。後で知ったが、小山さんは当時で言う大のハイファイマニアであったようだ。

何度も叫ぶと、小山さんが出てこられた。西朋の二人が立ち寄ったかと聞いたが、誰も来てないと。「東大もたくさん入っているから、メッタなことはないだろう」と言う小山さんの言葉に少し安心し、また B 沢に入っているのは東大と知った。二人が立ち寄ったら渡してくれとおやつ、アメと梨、を小山さんに預けた。その時、ぬれねずみの縦走者が3-4人転げ込んできた。寒さに青くなっていた。小山さんも忙しくなりそうで、お邪魔になってはと小屋を出た。また、もしかしたら小屋に寄らずに下りたかもしれないという希望的観測も働いた。

涸沢側は風は無かった。ガスと雪で視界は悪かった。膝下のラッセルで、雪崩の危険を感じつつ慎重に下った。踏跡は何処にも無かった。何処まで下ったときか、南稜から沢へ移ってからか定かではないが、ガスの切れ目に下を4,5人の黒い人影が泳ぐように下っているのが見えた。「なんだ、やっぱり小屋へ寄らずに先に下りたんだ」そう思って声をかけ飛ばした。彼らは止まった。直ぐそこだった。そこには雷鳥たちが横目でじっと見ていた。まだ冬羽に生え変わる前の黒い羽毛だった。私は愕然とした。ガスで距離感を誤っただけなのだが、それ以上に、この奇妙な錯誤で、それまでの楽観気分が一拳に砕けて急に不安を感じた。

涸沢のテントにもぐりこんだ頃はもう暗くなっていた。涸沢はみぞれに近くテントの中もぬれていた。誰か下りてくる者はないか、聞き耳を立て時々外を見た。二人は必ず下りてくるという確信が、時とともに北穂小屋に泊まったという推測にかわってきた。涸沢も小雪が降り続き冷え込んできた。それがいっそう不安をつのらせた。東大が帰ってきたらつかまえて話を聞こうと見張っていたが、誰も帰った様子は無く、明かりがついているのはキーパーのテント一つだけであった。東京へ電報を打つべきではないかとも迷いはじめた。9時頃、東大のテントを訪ねた。「うちも10人も入ってますよ、メッタなことは無いでしょう」という楽観的な返事に、明日を待とうという気になった。その夜は冷え込み、テントの中はぬれて寒く、不安を抱えてよく眠れぬまま朝を待った。

翌19日朝、雪は小降りだった。7時過ぎ、東大の2人と出た。雪は膝までであった。南稜に登る

うちに晴れ間が出てきた。3人共ただ黙々と登った。私は当然、西朋の二人が下りてくるのに出会うものと期待していた。南稜を上りきったあたりで、突然上に人影が一つ現れた。福田さんでも関谷さんでもなかった。東大の一人が「おーっ、沼田さん」と叫ぶと、男は「渡辺は死んだ、みんな死んだ」と叫んでそこにへたりこんだ。東大の二人は駆け上りその男と抱き合っただけで泣いた。わたしは「一尾根の西朋は」と聞くと「一尾根もだめだ」と言う返事だった。私はまさかそんなことはあるまい、とにかく北穂小屋へと三人をそこに残し先を急いだ。東大はだめでもあの二人は必ず帰ってくる「おーっ、黒澤、ひでえめにあったよ」と笑って現れる、という確信をもって雪の中をがむしゃらに登った。「そんなことはない、そんなことはない、あの二人だ」とつぶやきながら。

北穂小屋に着いたのは10時頃だった。小屋の前に小山さんがいた。「西朋は」と聞くと「二人共だめだ。」という意外な返事だった。B沢でピヴァーク中に死んだ、一緒にいた東大は生還した、遺体はそのままそこにあるということで、お前はとにかく急ぎ東京へ知らせろという小山さんの言で、直ぐ引き返した。虚脱した足をひきずり、ただ「チクショウ、クソッ」と叫びながら南稜を駆け下りた。涸沢小屋に電文を託した。親父さんはただ黙って受け取った。「フクダセキヤピーサワデシス。キュウエンタノム」中野区大和町180田中将利殿宛であった。

## [3]

20日は快晴となった。新雪に覆われた穂高、涸沢は秋晴れの下にまぶしく輝いていた。静かだった。他のテントでもあわただしい動きは見られなかった。

夕方救援隊が着いた。町田さんと川口さんと3人で夜の南稜を登った。北穂小屋に着き小山さんから話を聞いた。二人の遺体は成城大学の手で稜線まで上げられていた。最大の問題は小山さんや成城のおかげで解決したわけだ。その夜は何故か寝袋が二つしかなくそれを町田さんが丹念につなぎ合わせ、三人でもぐりこんだ。

翌21日北穂の稜線は風があった。二人の遺体はB沢下り口にシートに包まれて安置されていた。法政の皆さんが遺体を北穂頂上まで上げるのを手伝ってくれた。頂上からは北穂沢を涸沢まで下るし、その日のうちに徳沢まで下った。

翌22日は快晴だった。上高地から仰ぐ穂高は真っ白に雪をまとい、下の紅葉とのコントラストが目染みだ。二人の遺体は上高地の砂防工事事務所に安置され、ご遺族が対面された。棺におさめられた二人に遺体は、上高地からは工事事務所のトラックで松本へ下りた。私と松田さんがそのトラックの荷台に棺と同乗した。釜トンの中ではむき出しの岩の凸凹と滴り落ちる水に驚いた。遺体は松本の正麟寺で、お待ちになっていたご遺族、友人の方々に届けられた。「黒澤さんが無事で良かった」とのお二人のご両親の言葉に胸が詰まった。

その後東京で、笹田さんや町田さんとお世話になった方々にお礼に伺った。その中で関谷さんが入っていた、青山学院大学のESSの皆さんをお訪ねしたことがある。その時、関谷さんの英語の朗読テープを聞かせてもらった。滝谷の岩登りをテーマにした英文だった。滝谷の静けさを破る落石の音を語る、関谷さんの澄んだ声が今でも耳に残っている。

その年の冬の滝谷は大騒ぎだった。それらの記録を複雑な気持ちで読み漁った。もしあの事故がなく、二人の意図どおりその暮れに穂高へ入れていけば、と思う一方、二人といえども他のそうそうたる連中に伍してどこまでできたかという疑問もあった。福田さん関谷さんの衣鉢を継いで

冬の滝谷を、とまなじりを決してその後しばらくがんばった。

二年後、昭和 36 年(1961 年)の秋、滝谷へ入った。あの時と同じように、秋晴れと紅葉、新雪と冷たい岩肌でわれわれを迎えてくれた。元気な若い連中と一緒にだった。楽しい岩登りだった。しかし、もう冬の滝谷は遠くなっていた。とうてい、福田さん関谷さんのレベルに達することの無理を悟りあきらめた。

昭和 40 年だったろうか、二人のレリーフがご遺族により滝谷に設けられたと聞いた。初秋に一人でそこへ行った。B 沢下り口の岩にそれは埋められていた。ちょっと高い位置で背伸びしてタッチした。

[4]

北穂小屋の小山義治さんには、あの時大変お世話になったのだが、18 日当日朝、二人が小屋へ立ち寄り、小山さんに会っていた事が後でわかった。小山さんの著書、「穂高を愛して 20 年」、中公文庫、P. 146 に次のように書かれてある。

「さて、十月十八日は台風が日本本土の南方海上に在ることは明白で、私の記憶に誤りがなければ、台風が長野県下にもたらす影響はほとんどない、とラジオは報じていた。東大生の一部が北穂小屋へ立ち寄ったのは早朝で、私はまだ私室にいて逢わなかったが、他の都立西高 0.B(西朋山岳会)の二名には逢った。ちょうど親友伊藤英治さんが居合せ、かつてこの二人を連れて穂高へ登ったことがある由で、非常になつかしさがっていた。伊藤さんも私も、天気が怪しいので無理をしないように忠告した。

天気は思わしくなく、彼らが岩場に取り付いた頃は既に風と曇になっていた。私のところの屈強の若者は冬囲いの木材を上げに山を下り、小屋には決して屈強とはいえない N 君と、前日から泊り込んでいた東京の K 嬢と私の三人だけになった。嵐はますます強くなり、正午頃、びしょ濡れになった登山者が七名、槍ヶ岳から縦走して来た。相当疲れているようだがまだ去就に迷っていたので、私は頼むように危険を説いて泊まって貰った。午後は本格的な風雪になって、三時には積雪十五センチを越えた。滝谷へ入ったうち、クラック尾根と第一尾根へ向かったパーティーは当然小屋へ寄って行くはずであった。東大生のうち一組は第一尾根、他の組はクラック尾根、西高の 0.B は第一尾根で共に登り上げれば小屋は指呼のうちにある。それにこれまでの習慣から判断しても、小屋へ寄らずに涸沢へ下ることはとうてい考えられなかった。北穂高頂上付近では風はたいてい飛驒側から吹き付けるのが常識だが、十八日は涸沢から吹き上げて、滝谷は風下であった。これは長い経験からみて明らかに台風の影響であった。

四時になったが一人も現れない。積雪は二十センチを越えた。私はいろいろな場合を考えてみたが、いずれにしても、どこか適当な処へ避難していると思った。もうやがて夕闇が迫ろうとする時、クラック尾根へ行った沼田君がようやく小屋へたどり着いた。.....」

ここに出てくる、伊藤英治さんのことは、林武志さんもお存知で、若い福田さん達に涸沢で氷雪技術や岩登りを教えてくれた人だそうだ。「嵐はますます強くなり、正午頃、びしょ濡れになった登山者が七名、槍ヶ岳から縦走して来た。」とあるが、それは私が立ち寄った時だと思う。ただし、私の記憶ではそれは午後二時から三時の間だったと思う。

[5]

この遭難については東京大学スキー山岳部が詳細な記録を残している。翌年、昭和 35 年 1960

年)6月に出した「滝谷」である。この中から二人に関する部分を抜粋してみよう。

この日、東大は4隊11名が滝谷に入った。クラック尾根は2名、第一尾根は3名である。先ず、クラック尾根の沼田氏の記録である。

涸沢6;10 - B 沢下り口8;30 - クラック尾根取付9;20

北穂沢のトラバースを了え、南稜に取付く頃、空は雪模様となり、間もなく雪が舞い始めたが、……。トラバース点に到着。……この頃の天候は、無風状態で雪、気温は不明だが、零度附近であろう。従って雪は湿って、雪片も大きかった。……、二人パーティ(西朋パーティと後で知った)がトラバースして来た。クラックですか、ときくと、いや第一ですとの返事だった。……、大テラスに出ると第一の二パーティがよくみえる。……、彼等はCフェースのトラバースバンドの途中だ、西朋パーティに先を譲っているらしかった。……、この頃、第一パーティはCフェース下の凹角を登り切っていた。西朋パーティはどうやら引き返し始めているようだった。東大の三人は集まって何やらしているようだったが、間もなく柴田が、「今一時十分前で、時間がないから引き返す」と連絡した来た。渡辺(クラック)と釜江(第一)もしきりにコールを交換している。我々と第一パーティとは直線距離にして五十米位であろう。降雪は相当程度になっていたが、視界は充分利き、相手を一人一人見分けることが出来た。風は相変わらず強くなく、話も細部を除けば、通じることが出来た。……、

小屋へ着いたのは六時頃ときかされた。……、その晩、第一尾根からは二パーティとも帰らなかった、恐らく、雪崩にやられたのだろう、三人共、ほぼ絶望と考えた。

[6]

福田さん関谷さんと同じ第一尾根に向かい、引き返す途中B沢の岩穴で二人とともにビヴァークし、二人の死を看取った東大隊が詳細な記録を残している。東大第一尾根隊は、毛利、柴田、釜江の三氏で記録者は柴田氏である。長くなるがその大部分を引用する。

B沢の降り口でアイゼンをつけ、沼田隊にしばらく遅れてB沢を下る。三人共アイゼンを着用した。雪はかなり降り出していた。

B沢よりクラック尾根へのトラバースのところで、沼田隊に追いついた。

雪は激しくなるようではあったが、無風状態で、前途に特に不安は感じなかった。かなり時間はかかるかも知れないが、今日中にはなんとか稜線へ出られるという自信はあった。

十時三十分頃、毛利、柴田、釜江のオーダーで(柴田はスライディングミドル)岩場に取り付いた。この頃我々の後より西朋登高会のパーティが追いついて来られ、Cフェースの斜めバンドの途中で追いついた。そこで我々は西朋の二人の方に先を譲った。

十二時三十分ごろ、バンドで時間を費やし、凹角下のテラスにつく。西朋パーティはこのころから引き返し始めた。西朋の方はアイゼンをつけてない為引き返すと言う事だった。

凹角を同じく毛利トップで、チョックストーンの下まで登り、次に柴田が登ったとき、時間を見た。十二時五十分であった。意外に時間がかかっているの二人共信じられなかったが、やはり、たしかに十二時五十分だった。「引き返すか」と毛利が言った。これから上のチョックストーンを越え、Bフェースを何とか登っても、まだ稜線へ出るにはAフェースがある、今日中に果たして出られるかどうか危うい。風雪はますます激しくなる様子であった。風は涸沢側から吹いて来る為にそれほど感じなかったが、雪はかなり激しく、時々シャワーとなって壁の上から落

ちて来る為、まともに顔を上に向けていられない程であった。殆ど厳冬期の風雪の状態と言っても良いくらいだった。(しかし気温はかなり高く、毛の手袋一枚でもそれほど冷たくはなかった。)、、、、、、、、、、十三時三十分、引き返し始めた。アップ・ザイレンで下降したが、案外時間がかかり、C フェースの下まで降るのに二時間を費やした。取付点に戻ったのは十五時三十分だった。

この時まで私達はナダレの危険は全然考えていなかったが、第一尾根とクラック尾根との間の小さな沢を渡った直後に、小さなナダレが起こり、初めてB沢でのナダレの危険を感じた。クラック尾根よりB沢へのトラヴァースは、トレースが雪に埋まり完全に消えてしまった為に状態は悪く、B沢へ出るまでに二時間を要した。毛利 釜江 柴田のオーダーでトラヴァースをした。釜江はアイゼンを脱いでいた為か、二度ほど軽いスリップをした。

トップの毛利がB沢についた時、ナダレが起こり、毛利は十米ほど流されたが、岩の角にした釜江のビレイで止まった。毛利は上りながら岩穴を見つけたので、三人共、とにかく一休みするつもりでそこに入った。十七時三十分であった。未だビバークする事は考えていなかった。

その時先に行った西朋登高会の方がB沢を下から上って来た。今の毛利が会ったナダレに流されたのだという事だった。西朋の方はそのまま再びB沢を上へ登って行った。

私達は中食をとるつもりで岩穴に残ったが、五分ほどして再び西朋の二人の方が、岩穴のところへ来た。またも小さなナダレに会い、流されたという。この状態ではB沢をこのまま登るのは不可能だから、この岩穴でビバークするつもりであるという事だった。

私達もたしかにこの状態でB沢を登る事は不可能であると考え、ビバークする事にした。しかし私達のこの装備で、雪の中に一晚過ごす事は非常に不安を感じたが、又再びこのナダレの続発するB沢を登る事も出来ず、結局ビバークする事に決定した。

この時私達は特に空腹を感じてはいなかったが、とにかく何かを食おうという事で、ビスケットを食べた。

最初毛利がこの岩穴を発見した時は、入口が雪に埋もれていた為、高さ五十糎ほどに見えたが実際は一米、横幅も一米ぐらいであった。ビニールを入口に垂らそうとしたが、うまくいかず、むしろかぶっていたという状態。西朋山岳会の福田さんと関谷さんはビニールの所持なく、私達のビニールを一枚貸してあげた。結局西朋の二人で一枚のビニール、私達三人で一枚のビニールをかぶっていた。

私達三人はぬれた木綿の下着を脱ぎ、セーターを直かに着た。ぬれてしまった木綿は全く無能で、柴田、釜江は使用しなかったが、毛利は足にかけた。さすがに毛のものは暖かく、セーターを直かにきたとたんに、上半身は暖くなり、なんとか今晚ぐらいはしのげそうな気がしてきた。このとき私は初めて毛の有難味を知った。

ところが下半身は依然として、激しく冷たく、ひざのふるえがどうしてもなく止まらないほどだった。今更ながら毛のズボン下をはいて来なかった事がくやまれてならなかった。西朋の方は特に着替えはしてなかったようだった。持っているものを全て上から着ていたようだった。

最初雪の吹きこみが激しく、入口にブロックを積もうとしたが、粉雪のため不可能だった。岩のすき間に、雪、ビニール等をつめ、岩のすき間からの吹きこみはいくらか弱まったが、福田氏の側はまだ相当強く吹きこんだようであった。

初め西朋の方々は非常に元気であった。むしろ私達の方が意気消沈していたような感じだった。特に福田さんは元気で、福田さんの提唱で、お互いに自己紹介等をした。歌でも歌いましょうと



いう事になったが、結局歌は歌わなかった。これからほんの数時間後に、福田さんがあのような結果になってしまったという事は、この時の状態からは、夢にも想像出来なかった。

西朋の方は食料を持って居られないようだったので、当時私達はビスケットとクラッカーを各二袋づつ持っていたが、この内の一袋を西朋の方にわけてあげた。

福田さんは眠っても大丈夫だろう等と言っていたようで、少し眠ったようであった。

八時ごろ、私達が気づいた時には、福田さんはビニールの上から半身雪に埋まっていた。このころから福田さんの意識はおかしくなっていたようであった。そこで福田さんの位置を変える事にした。岩穴の奥は高さ四十糎ほどで、かなり深くなっていた。そこに柴田が寝転ぶような形で入り、福田さんはその横に坐った。福田さんは眠り始め、いくら起こしてもすぐ眠り遂に完全に眠ってしまった。十時半ごろ、福田さんは突然発作を起こしたのち死亡した。けいれんを起こし、柴田に抱きつくような形であった。

福田さんの死が私達に与えたショックは非常に大きかった。特に関谷さんに与えた影響は大きかった。「これからすぐ北穂に帰りましょう。」等と口走ったりした。

九時ごろから非常食のヒットB、チーズ等を少量づつ取った。

午前二時ごろから、関谷さんと私達三人は眠らぬように互いに名前を呼び合っていた。

関谷さんは三時ごろには、すでに意識がおかしくなっており、いくら呼んでもまともな返事をしなくなった。ついにいくら起こしても寝てしまうような状態になってしまった。

.....、(19日)六時三十分。とにかく入口を開ける事にした。まず釜江がハンマーで入口を掘り始め、三人で交代に掘った。身動きもろくに出来ないこの狭い岩穴の中で、この作業はかなりの苦労だった。

七時三十分、毛利が最後に穴を開けて入口を作った。その時に関谷さんの死亡を確認した。釜江が外の様子を見ると、気温は下がり吹雪いてはいたが、雪は比較的しまっていた。

.....、十時四十分、北穂小屋につき、無事三人共脱出に成功する事が出来た。

#### [7]

私は就職を決めた頃から山登りをやめてしまった。山の本も写真も山日記も、徹底して処分してしまったらしく、当時のものはほとんど何も残っていない。そぞろに山を懐かしく思い出し始めたのは、40歳の頃、ヨセミテを見てからのようだ。それからぼちぼち、また山の本を見たり、ハイキングをしたりし始めた。しかし、ずっと福田さん関谷さんのことは、ふっきれないまま、いつも何処か心の片隅にひきずっていた。

私にとっては二人は先輩なので、大きな心の負担と言うほどのものではないかもしれないが、ただエピソードとして、なにかせにゃという気持ちをずっと持ち続けてきた。最近たまたま、再び手にした東大の記録を見て、とりあえず、私の40年前の記憶をなぞってみようと思った。わかったことは、記憶も殆ど消えうせ、残っているものも、はなはだ曖昧になってしまっているということだった。書いてみると、私の記憶は小山さんや東大の記録とだいぶ違うところもあるが、あえてそのままにした。なにぶん40年ひきずってきたやつだから。

最初の草稿を松田稔さんに見てもらったら、松田さんが手持ちの当時のアルバムを探し出してくれた。そこには、10月15日の4人の写真や21日の北穂沢の遺体下ろしの写真などがあつた。また、10月12日から23日までの行程のメモも見つかった。これらの貴重な記録を使わせてもらって私の記憶を補完した。

しがない作文だが、福田さん関谷さんを偲ぶよすがになればと思う。

2003年夏 黒澤 隆



1959年10月15日 北穂頂上にて  
関谷 黒澤 松田 中村



1959年10月21日 二人の遺体を下ろす 北穂沢



1957年夏

## ・林 武志さんより

関谷 徹さん、福田 宏二郎さんの追悼山行が、2003年9月16～19日、6期の林 武さんを中心に行われました。林さんに追悼山行の報告を書いていただきました。

## 「滝谷行き」報告

6期 林 武志

会員の多くの皆さんは記憶にないかと思いますが、西朋登高会の公式山行で遭難事故を起こしたのが滝谷でした。昭和34年(1959年)10月18日第一尾根登攀を試みたが、天候の急変で撤退し、B沢でピバーク中凍死した。6期の福田宏二郎と関谷徹の2人だった。

同期の小生は、1年生の時から友人であり、ライバルであり、喧嘩仲間であった。小生は岩登りが不得手で、重い荷物を担いで歩くのが好きだったところもあって、この山行には参加しなかった。(実は社会人1年生で休暇が取れなかった。)その後、西朋登高会の慰霊山行に参加したことがあったが、そろそろ古希に近くなって来たので、体力の有る内にもう一度行って来たいとの思いから「滝谷行き」を計画した。

上記のような意図であるので、福田、関谷を知っている仲間が、50年前を回想しながら「のんびり歩こう」と超OBの仲間に声を掛けた。期日は10月にしたかったが無理な話なので、夏山の終わった閑散期と推測して、9月16日～19日の週日とした。

期日 9月16日～19日

参加者：5期鈴木潤、6期飯塚、川口、桑田夫妻、林武志、10期黒沢、  
19期山野(9/17・18)

行程：9/16 上高地 横尾山荘

9/17 横尾山荘 涸沢 北穂高小屋

9/18 北穂 涸沢 パノラマコース 上高地 中の湯温泉旅館

北穂 奥穂 前穂 上高地 中の湯温泉旅館(川口、山野)

9/19 解散

飯塚は先行して9/15中の湯に車を置いて横尾山荘、涸沢小屋で泊まって北穂で合流した。山野は9/16の夜行バスで上高地に入り、北穂南稜で合流し、9/17川口と前穂を経て上高地に下り、そのまま帰京した。

好天に恵まれ、予定通りに50年前を回想しながらのんびり歩きだした。また小屋泊まりに慣れていない連中の集団なので、それも楽しみにしていた。

横尾山荘は、薄暗い小屋の印象しかなかったが、今は明るく近代的(?)な旅館になって、宿代を前納すると「お風呂へどうぞ」とタオルを渡された。驚いた。

山は変わっていないが、道は整備されて歩き易い。最も荷物が軽いから歩き易いと感じたのかもしれない。涸沢は流石にテントが数張りしかない。トイレも水場も完備している。キジウチに茂みに潜り込んだ昔が懐かしい。流石に北穂南稜は荷物が軽くても厳しい。今回来たのは正解である、と自画自賛した。

北穂が近くなったな、という頃山野が追いついて来た。

北穂小屋では飯塚が待っていた。早速、B 沢下降点まで行く。嘗て設置されていたレリーフは、剥落していた。その痕跡だけが認められた。福田、関谷の冥福を祈って、ささやかな慰霊祭を行った。ガスが吹き上がって来て、北穂は隠れてしまった。

9/18 は朝から雲一つ無く、滝谷にしっかりお別れの挨拶が出来た。元気のいい川口、山野は奥穂に向かい、本隊は北穂南稜を下りる。上りも厳しいが、下りは膝に来るので更に厳しい。何とか涸沢小屋へ辿り着き、ゆっくりカールを鑑賞する。上高地への下りは未知のパノラマコースにする。天気が悪かったらとても歩けないだろうが、痛む膝をだましだましゆっくりと下る。17:30 日差しの無くなった上高地に到着。タクシーで中の湯温泉旅館へ。ゆっくり温泉に浸かって、酷使した身体を労わる。無事予定通りに計画が終了できた事を祝って乾杯。福田、関谷の二人も喜んでくれただろう。

9/19 天気が崩れてきたが、車に分乗して帰途についた。

以上

## (2) 超 OB の記録

超 OB 係の林武志さんに、記録を執筆していただきました。

長かった「仕事人間」を卒業して、幼馴染の仲間と、のんびり山歩きでもしたいなあ、と思って 6 期以上の仲間に連絡したのがスタートです。声を掛けても、誰もが「一寸自信ないから、遠慮するよ」という答えだった。「歩けなくなったら戻ってくれば良い。気楽に参加して。」と誘ったが、ほとんど信用されなかった。如何に若い頃苦しかったのか、しみじみと分かった。

集合場所、時間に集まった人で行く、という気楽な山行を計画して、平成 9 年(1997)から始めて現在に至っている。都心を通って来る人もいるので、集合時間は立川 8 時ごろ。参加者は会員の家族、友人誰でも良し。

### 平成 9 年 (1997)

- |              |                           |     |
|--------------|---------------------------|-----|
| 4/8 (火) 晴    | 高尾山                       | 8 名 |
|              | 林 晴彦、田中 実、飯塚、稲田、岩崎、林 武志、他 |     |
| 5/28(水)      | 高水三山                      |     |
|              | 林 晴彦、田中 実、米野、他            |     |
| 10/2 (木)晴のち雨 | 御岳山ロックガーデン                | 7 名 |
|              | 林 晴彦、田中 実、岩崎、林 武志、他       |     |
| 11/18(木) 晴   | 高尾山                       | 5 名 |
|              | 林 晴彦、田中 実、林 武志、他          |     |



平成 10 年 (1998)

- 4/8 (水) 晴 高尾山 8名  
林 晴彦、田中 実、林 武志、他
- 10/13(火)曇のち雨 三頭山 (都民の森) 8名  
林 晴彦、田中 実、稲田、林 武志、他
- 11/11(火)晴 石老山

平成 11 年 (1999)

- 5/11(火)雨のち曇のち雨 大塚山、御岳山 8名  
林 晴彦、田中 実、飯塚、林 武志、他
- 6/7 (月)雨のち曇 川苔谷より川苔山 2名  
南波、林 武志
- 10/5(火)曇 三頭山 (都民の森) 2名  
川口、林 武志
- 12/7(火)晴 影信山から高尾山 8名  
南波、田中 実、飯塚、川口、林 武志、他

平成 12 年 (2000)

- 4/12(水)晴 梅澤探勝路から大岳山 3名  
林 春彦、林 武志、他
- 5/18(木)小雨のち晴 ヤビツ峠から大山 5名  
林 春彦、桑田、林 武志、他
- 6/19(月)~21(水) 菅平、根子岳 6名  
目沢、鈴木潤、稲田、林武志、他
- 9/12(火)雨(台風) 御岳山 (川苔山を変更) 2名  
林 武志、他
- 11/9(木)曇 扇山 3名  
林 武志、他

平成 13 年 (2001)

- 4/26(木)曇 扇山 3名  
田中実、林武志、他

### (3) 佐藤 満 先生より

1987年4月より1996年3月まで西高ワンダーフォーゲル部の顧問をしていただいた佐藤満先生に、心に残る出来事をひとつ選んでいただきました。佐藤満先生は、日々の活動や登山計画から、部員の悩みやメンタルな部分にわたるまで、親身になってわたくしたちをご指導いただきました。本当に西高ワンゲル部を愛してくださった先生の一人です。

### 当然の判断をした '95 初冬の尾瀬行

1995(H7)年11/24~26の「尾瀬・燧ヶ岳」山行は翌(H8)年、定年退職になる私には顧問として最後の山行だった。

参加者：CL 細田(2年, 49期)、SL 牧野(1年, 50期)

メンバー 天野(1年, 50期)、帆刈(1年, 50期)、橋本(1年, 50期)

OB 土田君(46期)

#### 11/24(金)

八高線で高崎に出、ワンゲル部のパーティと合流。19:28の水上行きに乗る。20:18沼田着。タクシー2台で今夜のテン場大清水に向かう。21時過ぎテン場着。1台17700円。おみやげ屋の軒下に8人テントを一張り。夜空にいっぱい大きな星が競うように輝いている。冷え込んできた。中に入ってひとしきりバカ話。土田君は笑い転げている。私は入口。いっぱい着込み、ホカロン2ヶ腰に貼り、羽毛のシュラフに潜りこみ、21時半、「グッナイ」。

#### 11/25(土)

4時起き、外を見てビックリ、雪が15~20センチ積もり、更に降りしきっている。今日の三平峠~尾瀬沼~長蔵小屋~燧ヶ岳~見晴らし十字路(泊)のコースは難渋になると確信する。

テントを撤収し大清水を予定通り6時に発つ。

一の瀬まで遠かった。一の瀬休憩所のかなり手前で1P、アイゼンをつける。橋を渡って木の階段と木道に苦労する。アイゼンで確認して歩くように指示した。三平峠あたりは60センチ余の雪、風も強くなる。中年のペアが追い越していく。トップは牧野君、後で天野君に替わる。何回か雪の深みにはまり何人がドーンとひっくり返されたりしていた。

尾瀬沼のほとりに着いた時は11:40。すでに2時間遅れている。小屋の庇を利用して昼食、菓子パン。みんなに高崎で求めたシャケのトバをあげる。喜んでいて。この昼食時、さっきのペアが引き返していく。この状態では燧ヶ岳には行けない。登らずコースを変え、沼のほとりを歩き、白砂峠を越えていっても今夕のテン場の見晴らし十字路には18時過ぎになろう。心の中で大清水に引き返すことを決め、OBの土田、CL細田、SL牧野の三君と相談。

私：コースも恐いし、降雪と強い風、パーティに疲労もある。このまま進みたいか？

三人：無言。ほかの部員はじっと聞いている。

私：白砂峠を越え、田代十字路についてもそれから先、見晴らしまであちこちに池塘がある。それらがまだ結氷していないと思う。もしそこに落ちたり遭難したとき、ほかにパーティが入った形跡がないので、救援を乞うことは不可能と考える。このまま続行したら遭難の恐れがある。大清水へ戻るのがベストと思う。

三人：ハイ、わかりました。他の部員、ほっとした表情。

そのかわり、ザックをおいて長蔵小屋～沼山峠を輪カンをつけて往復することにした。時間がかかった。しかし沼の寒々とした景色とまわりの淋しく孤高の風景が胸にしみた。

14 時ごろザックを背に下山にかかる。登ってきた道を大清水に向かう。雪が 40～50 センチになっている。みんな無口で歩く。17 時 40 分すぎ、ようやくおみやげ屋のの木の下に着く。テントに入りラジウスをつけ、ようやく人ごちになった。夕食のマーボーナス実によくできていた。

11/26(日)

8 時 40 分、大清水をあとにし、バスの出る戸倉に向かう。左手ははるか下に片品川が見えた。険しい景観なり。約 9k の道、遠いが飽きなかった。11 時少し前バス停に着く。無事、戻れてよかった。

公衆デンワから片品村で旅館を継いだ新井新吉さんに Tel。彼とは 13 年来スキーで親しくしている。地元でスキー指導員、山岳遭難救助隊員をしている。東京から伝えてあった西高ワングル部の山行のこと、きのう沼から撤退したことを知らせた。

新吉氏：先生、沼から戻ったことは実に良い判断でした。先にすすんで行ったらキケンだった。怖い所です。

このことはみんなに伝える。缶ビール 2 本求め 1 本土田君に。

土田君：先生に来て頂いてよかったです。撤退ということ考えていませんでした。

牧野君：きのう先生が大きく見えました。

11:20 沼田行の東武バスに乗る。まもなく土田君がバス停に財布を忘れたという。運転士に頼み戻ってもらう。財布はあり土田君の手に。織田澤さんという運転士、温かい人だった。

あれから 8 年半過ぎたが、この山行をよく思い出す。そのたび、私は自分のことを誉めている。

## 2000 年度

### 2000 年度役員

会長	山野 裕
チーフリーダー	上野 午良
学生リーダー	尾崎 宏和
会計	山田 裕久
記録・会報	高橋 寛和
	清野 尚史
装備	尾崎 宏和
	細田 学
西高係	細田 学
	清水 智子
	佐藤 正明
都岳連関係	上野 午良

## 0002 頸城・西海谷山塊/ST & VR : 雨飾山南稜

日程：2000.4.7～9 参加者：山田，尾崎

### 4/7 小谷温泉 17:01 - 17:40 幕営

とにかく雨飾は良かった。7日(金)，山田先輩の車で昼ごろ東京を出発し，夕方，小谷温泉から少し登ったところにベースを設営。さっそく前夜祭？が始まった。ステーキのリッチな夕飯を食す。

4/8 発 5:39 - 7:44 南尾根 - 9:05 P2 9:38 - 12:04

雨飾山 12:30 - 13:56 P2 14:30 - 16:13 幕営地

雨はやんだ。目指す方向は暗雲が立ち込め，4月とはいえ豪雪地帯の冬の厳しさを垣間見せている。

尾根に上がる頃には完全に晴れ上がり，風が強い。P2 まではシール登高で黙々と進む。部分的にクラストした斜面が増えてきて，だんだんスキーで登るのがつらくなるが，無事 P2 に到着。ここまでの山スキーヤーも多いようだが，我々が着いた時には誰も居なかった。若干の雲があるものの，海谷，妙高山塊が間近に見える。妙高山の中央火口丘がやけに大きく，野尻湖方面からの見慣れた山容とは異和感がある。

P2 でスキーをデポし，ハーネスをつけての登攀スタイルとなる。すぐに P1 直下の岩壁となる。ここは思ったより簡単だ。最初の雪の壁から岩場へ移り，左寄りに 2P で最後の雪稜に出る。

ここからは高度感満点のナイフリッジである。途中 1 本立つ灌木とスノーバーで中間を取りながら前進し，少し尾根が広がると傾斜が強まる。もう頂上は目と鼻の先だが，最後までスタックで行く。東西の海谷山塊は鋭い目立った峰が多いが，山名は全くわからない。

帰りは慎重にナイフリッジを下り，岩場は 2P の懸垂下降であっけなく通過する。P2 からは登攀用具で重いザック，もこもこの雪にすっ転びながらも春の頸城山塊を思う存分満喫する。すっきりと立ち上がる雄々しい双耳峰。雨飾は頸城の谷川岳というにふさわしい。標高はどちらも 1963m。この美しい雪の台地にもう 1 泊し，翌朝帰途に着く。



P2 から雨飾頂上



P1 からの雪稜



## 0003 越後/VR：越後駒ヶ岳郡界尾根 中退

日程：2000.5.3～4 参加者：加藤, 上野, 内田, 尾崎, 灘吉

昨年の荒沢岳に続き、陽光輝く雪稜歩きを胸いっぱい思い描いて、越後駒ヶ岳郡界尾根に向かった。登山体系によれば、それほどの難所もなく、上部はオツルミズ沢をすぐ下に見ての快適な尾根であるようだ。参加者の日程調整や行先の決定も最後の最後まで何度も打ち合わせ（悪く言えば決定がぎりぎりまで遅ってわけ・・・）GWを迎えた。

## 5/3 取付 10:37 -R-R-R- 15:33 1036m ピーク

水無川右岸の荒山集落の少し奥から、踏み跡も何も無い斜面に取付く。ときおり見つかる鈍目を追って強引に登り続けると、1Pで600m台地に出る。この辺は植林した杉が雪によって幹ごと折れている。やはり豪雪地帯に杉は適さないようだ。

さらに岩場を急登し、急なヤブ斜面の腕力登高を続ける。ガスガスの空から雨が降り、やぶこぎでどろどろになって、非常に憂うつである。2P強で尾根は広くなり、雪渓を拾いつつ高度を稼ぐ。さあここからは期待の雪稜が始まりそうだ。消えかかった先行者のトレースを見つけたが、よく見ると降りる向きなのが気になる。

残念なことに、この残雪はヨモギ山で終わり、そこからは再びヤブヤブの尾根となる。しかも急峻なやせ尾根で雪はすべて落ちてしまったようだ。行く先に不安がよぎる。気を取り直して出発するものの、直線距離にして500mほどの隣のピークに達するのにも1時間以上要し、15時半を回る。ガスの合間から次のピークのカネクリ山が見えたが、いったん大きく下り、そこから急登するようだ。急峻な尾根にまったく雪はない。あまりにも遠く感じる。ここで幕営を決定。気合が入らず、今日の行動を打ち切った安心感と明日への不安が入り交じる。ときおり強い雨が降り、天候は不安定だ。回復の兆しはなく、むしろ悪化する感じた。

## 5/4 発 6:01 -R-9:00 引き返し点 9:27 -R-R-16:00 林道

昨日より雲は高いが、相変わらず頂上方面は濃いガスに包まれている。断続的に降り続く雨に、この山域がもろに日本海側に位置し、日本海の寒気を伴った低気圧の支配下にあることを実感する。急な下りを終えると、最低鞍部はキレットとなっており、慎重に通過する。うっすらと踏み跡を確認できるものの、相変わらずのやぶこぎが続く。ヤブ泥壁の腕力登高を繰り返すうちに、雨あしは強くなる。松の木が生えるカネクリ山手前の小ピーク上で、正面にぼろぼろの岩壁を見る。このころにはすでに越後駒への到達は不可能であることが皆の暗黙の了解となりつつあった。その岩壁も登れたところで下れる保証はまったく無い。第一、左右切れ落ちたぼろ壁を見て、士気は決定的に萎えた。敗退決定（ちょっとうれしい）。まだ、越後駒まで1/4も来ただろうかとい

う所だ。

ああ、それにしてもこのヤブ尾根を引き返すのも一苦労だ。雪渓からのエスケープを考えるが、どこも急峻なスラブとなり、視界が悪いことも加わってダメ。

敗退。天候不順、激しいヤブ、そしてぼろぼろの岩壁。仕方ない。山をやっていたらそんなことの方が多いのかもしれない。しかも不確定要素の多い山行形式である。冷静に考えれば納得できるが、残念だ。でもこれをバネとして、焦らずマイペースで登ろう。次回はもうちょっと素直な計画にする方がいいかもしれない。

豪雪地帯の山は厳しい。日本アルプスに比べれば、標高こそ低いものの、その山肌は雪崩に磨かれたつるつるの大スラブに代表される。積雪に耐え抜くしなやかな木々は、低灌木となって地を這い、濃密なヤブをつくる。何しろ彼らは下に向かって生えていることへの驚き。常に不安定な天候。よそ者を安易には受け入れない。

#### GW 山行の反省

- : この時期この山域で 1000m 台の急峻な尾根は、雪は落ちてしまっていない。猛烈なヤブが待ち受けるのみ。
- : 行先決定をもう少し早くする。そうすれば事前の資料集めや地図読みを時間をかけることができる。悪天時の転進ルートを用意しておく。
- : 過去の報告がどうであれ、バリエーションなのだから 50m ザイルは持っていくべし。ボロ壁の下降が可能だったかもしれない。

というわけで、やっぱり悔しいので、7 日の芝倉沢雪訓を拡張して出かけることを帰りの電車内で決める（尾崎、灘吉）。5 日は片付け準備を兼ねて休養日。陽光が恨めしい。

---

## 0004 上越/VR：谷川岳 雪訓

日程：2000.5.3～4 参加者：山野，尾崎，灘吉，佐藤

---

5/6 天神平 10:06-10:57 熊穴沢避難小屋 11:16-12:24 トマの耳-オキの耳 13:25-16:14 土合

6日早朝一路土合へ。400何十段とやらの薄暗い階段を上って地上へ。

でも今日限りはお気楽山行なのだ。向かうは谷川ロープウェイである。一気に天神平まで（こうしないと夕方、帰って来れないかもしれないのだ。明日は雪訓が待っている。）そこから春風浴びての2Pで谷川岳山頂に達する。今回こそスキーを持って来るべきだった。肩の小屋付近の雪田はとても快適そうだ。

ホットカルピスを飲み、しばしばやーとした後、下山にかかる。西黒尾根へ入ると、今年の残雪量の多さが実感できた。いまにも全層雪崩が起きそうだ。尾根上にもかかわらず雪面に大きく割れ目が入っていたり、雪底が残っていたりする。

巖剛新道に入り一気にグリセードでマチガ沢へ滑り込む。マチガ沢スキー場だ。結局、超快適に1P強で土合駅前に達し、幕営。

5/7 登山センター6:31-7:40 一ノ倉沢出合-8:24 芝倉沢出合 9～15時雪訓 - 16:40 土合

雪訓（山野、尾崎、灘吉、佐藤）

未明、山野さんと佐藤君が合流した。

湯檜曾川沿いに2Pで芝倉沢である。ブロック雪崩には細心の注意を払いながら、雪に埋もれた谷を登っていく。旧道よりも少し上の斜面で雪訓をした。ピッケルストップの練習は、つるつるのICIヤッケでは止まらない。ピーコン練習、10分間で埋没者を掘り当てて気道確保をしなくてはならない。かなりハードだ。

その他、キックステップやザイルワークを行い、予想以上に充実した雪訓となった。

---

## 0006 北アルプス/ST：針ノ木雪渓

日程：2000.6.11 参加者：山田，尾崎

---

シーズンの締めということで、山田先輩と針ノ木雪渓に出かけた。

前夜2時ころ、扇沢の駐車場に着き、テントを張って仮眠。翌朝、明るくなると、稜線は大ガス状態である。何しろ降ってないだけでもいい。天気予報にはまるっきり期待持てないことを言っていたのだ。何はともあれ出発。6月も半ばにさしかかり、そろそろ梅雨入りかという時期だが、今年はけっこう残雪が多い感じだ。

大沢小屋直下まで川原の林道に行く。砂防工事で奥まで林道が伸びており、夏道は別にあるといっても、なんとも悲しい気分になる。小屋のすぐ上でスキーをつけ、颯爽とシール登行!! まったく降る気配もなく、順調に高度を稼ぐ。空もだんだん明るくなってきた。針ノ木谷の右俣左俣の出合では傾斜が緩み、上方に針ノ木峠が見えてくる。ここは右俣を詰める。とても急だ。かなりバテるがなんとか稜線に上がる。靴が合わなかったというのは言い訳だ。あんなにバテたのは、というか、力が出ないというか、スピードが出なかった(要するにバテそのものだが、、、)のは今までになかったと思う。

雲は多いながらも晴れている。稜線からは残雪の剣岳がまさに越中の守護神のように、我々に鋭い視線を浴びせている。ひと登りで針ノ木頂上だ。峠方向に少し下っていよいよ滑降開始となる。山田先輩は豪快に滑っていくが、自分はおっかなびっくりの斜滑降でかっこ悪い。そのうち山田先輩から斜滑降禁止令が出た。雪はほどよく締まっており、そのうちうまくターンできるようになった。会心の滑りだ。非常に面白い。だが、左ターンが右ターンに比べてうまくいかない。左足を右足に寄せるのが下手くそだからだ。しかしスキー場で滑るよりも10の数乗倍! も楽しく充実して、標高差約1300mを飛ばすことができた。

雪渓わきにはふきのとうが芽吹き、山麓の春はようやく来たようだった。

---

## 0007 夕張山地：芦別岳北尾根

日程：2000.6.23-24 参加者：高橋，尾崎

---

ライラック薫る6月の北海道へやってきた。尾崎はついで(!?)に学会に参加し、その後札幌駅で高橋先輩と落ち合う。さすがに北海道は地理的概念に乏しいし、ヒグマの恐さも手伝って、一般道の山歩きをしようということになった。吟味の結果、北海の槍こと芦別岳に白羽の矢が立った。

6/23 山部駅 9:33 - 10:34 登山口 10:55 - 13:26 ユーフレ小屋

ユーフレ川に沿って思った以上にアップダウンの多い道を高巻き2回に雪渓トラバースが1回、暑さに耐えて進む。なんせ6月の北海道は梅雨がないぶんもう真夏である。貝の化石が露出した岩は興味深い。そしてユーフレ本谷と夫婦沢を分けると左へほどなくユーフレ小屋となる。ユーフレ本谷の水は冷たいが、エキノコックスが気になり生水が飲めないのが玉に傷だ。

6/24 発 4:32 - 6:41 夫婦岩分岐 6:55 - 7:09 北尾根上 7:28 - 10:59 芦別岳山頂 - 13:43 半面山 - 16:00 登山口

気持ちよい青空は、さすがに北海道である。しかし頭の上に小虫の大群が飛び交うのもまた関東の山とはちがう。ところでユーフレとは勇振と書くらしい。そんなことを考えながら夫婦沢を詰め、夫婦岩の岩壁を左に見ると、やがて北尾根への登りとなる。思ったほど急でもなく、背後には大雪の山々が展望できた。

北尾根へ上がればもうひとがんばり残雪をこなし、ハイマツのピークでかっこいい芦別岳が初めて見える。ユーフレ本谷の雪渓は上部はかなり急そうだ。そこを一人の登山者が一步一步進んでいるのが見えた。

ガレたキレットをこなし、ハイマツピークから2時間で芦別岳の肩に着く。ここからは岩場混じりの急登で鋭峰に立つ。南には夕張山地が延々と続いていた。水不足で喉の乾ききった我々は、地元登山者からビールをご馳走になる。ビールがうまいのはやっぱり山頂かも。

新道コースを經由して、富良野の盆地を正面に見ながら下山した。



北尾根より芦別岳

---

## 0009 奥秩父/WC : 笛吹川東沢釜ノ沢西俣

日程 : 2000.7.30 ~ 31 参加者 : 加藤, 尾崎, 灘吉, 佐藤

---

7/30 西沢溪谷入口 9:34-13:38 釜ノ沢出合 13:52-14:47 両門ノ滝手前

歩き慣れた東沢のゴ-口道も釜ノ沢・信州沢出合までは長い。出合はなかなか快適そうな幕場でもあるようだ。でも増水が恐いかな... 釜ノ沢に入ればおなじみ魚留の滝は近い。かつてここは倒木が掛けられており、それを頼り登ったが、今回は倒木の代わりに石積みがされていた。滝の左壁を難なく越え、もうひとつ釜をもつゴルジュ状の滝を右岸から高巻く。続く両門の滝手前の川原で幕営。盛夏といえども沢の夜は冷える。

7/31 発 5:10 -R-R-R- 9:11 ミズシ 9:31-10:05 甲武信岳 10:45 14:14 西沢溪谷入口

いつもなら両門の滝は水流右を直登するが、今日めざすは西俣。西俣側の滝は東俣以上に急で落差があるので、右岸の樹林を巻いて流れに降り立つ。西俣も東俣と溪相は大きく変わらないが、ナメの美しさはこちらに軍配が上ろう。奥の二股からは甲武信岳に近い右俣に入るが、ここより上も左右ともにナメが続く。つめ上げた稜線から甲武信岳頂上までは、原生林の風が心地よい1時間ほどの縦走であった。

## 0010 飯豊/WC : 大石川西俣大熊沢 ~ 飯豊本山

日程 : 2000.8.12 ~ 16 参加者 : 山野、加藤、上野、高橋、尾崎、佐藤

8/12

**越後下関==タクシー==大石ダム 10:47 - - - 15:52 大熊小屋**

前日から学生 2 人は青春 18 で、あとは早朝の新幹線など、各自かってに米坂線越後下関駅へ集合する。8/12 10:00am.。

大石ダムからいよいよ 2000 年の夏合宿が始まった。初めての飯豊に、期待よりも不安が大きい。しばらくは舗装路を進むが、赤い立派なつり橋を過ぎると登山道へ入る。いつのまにか渓谷は深く、細道の危ういトラバースとなったり、ブナ林の中を行ったり、比較的变化に富んでいるものの、標高は 200m そこそこで何ととっても暑い!! アリガタ迷惑なことに、アブも僕らをいらっしやいと歓迎してくれるが、それほど熱烈な歓迎ではないのでまあよしとする。枝沢を横切るところで休憩しながら左岸を 5P、そして到着直前で右岸に渡って大熊小屋に着く。

標高は 500m まで上がったが、まだ暑く、アブ、カ、マムシに注意。それでも深山の趣きあり。同宿の地元の人が、きのこ汁ときのか炒めをご馳走してくれる。

出発直前に入手した資料(日本の渓谷 98/99)から、鉾立沢はかなり厳しそう。台風 9 号直撃の恐れがあり、明日中に稜線へ上ることを目指し、当初予定の大熊沢に転進を決める。天気にもみながら床に就くが、力がいつまでたってもうるさい。

8/13

**大熊小屋 5:04 - R - R - 9:20 天気図 R 9:44 - 10:50 二俣 11:11 - 13:52 上を行った雪溪の手前 - R - 17:10 ころ幕**

快晴だ。流れ星がいくつも飛んでいく。星空の下、納豆、味噌汁、ご飯を食い、沢装備の支度を整える。昨日の天気図からは、今日いっぱいもちそうだ。

明るくなりかけたころ出発する。4-5 分で道は下りとなり大熊沢出合いだ。しかしここは地元の人に教わったように、対岸の道をそのまま登り、平らになったところで左に入って沢に下降する。小尾根上を選んで下っていくが、途中から右下(上流側)へ懸垂下降(25m)し、深そうな釜を持つ滝の上に出た。小尾根はこの滝の流心に削られており、最後は古いシュリングが掛かっていた。

なぜか水は茶色に濁っている。上流に雪溪があるのかもしれない。平凡な川原を行くが、両岸は急な泥草付で、ゼンマイ類も茂っている。その上方に灌木が斜面下向きに生え、奥秩父の沢とは違って、豪雪地帯の風景だ。やがて滝が現れる。1 つ目は右から巻いたようだが、記憶が定か



でない。2 つ目は左のシダシダした斜面から巻き、距離こそ短い足場の悪い一枚岩状で沢床に戻るにはちょっと怖い。3 つ目は釜をもつ 20m 滝。左のルンゼを攀じ登り、斜面がゆるくなったところでやぶこぎトラバース。あまり大きく巻きすぎないように、小さな溝から下降を試みる。が、この滝は何段か連続していたらしく、すぐ下にはごうごうと水流の落下するのが見え始めた(10m 滝くらい)。そこからまたトラバースすべく、やぶに突っ込む。岩の上に出て、灌木にビレイをとって 5m ほど懸垂下降する。ここにはスズランテープの懸垂残置があった。

雲は多めながら、徐々に晴れ間が広がってくる。やがて、兩岸狭まってくるが、ゴロジュではなく「ゴロジュ」。ちょうど、9 時の気象通報の時間になり、休憩がてら台風情報に耳を傾ける。伊豆諸島近海にある台風 9 号は北東に毎時 15k で進んでおり、うまくすれば台風の影響はなさそうだ。

さて、ゴロジュの先に現れた 2 段 25m 滝は左の緩い草付リッジから巻く。すぐに降りられると思ったが意外とだめで、また 15m ほどの懸垂下降。ここにも残置支点があったらしく、みな同じような判断をするものだ。行く手は大きく二俣になり、支流の右俣に雪渓が見える。

標高 680m 地点で左俣に入る。入ってすぐの滝を右から越すのに少々てこずる。これを越すと、スノーブリッジが出現する。1 つ目はすでに落ちていて、兩岸が雪壁となっている。2 つ目は足早に下を抜ける。3 つ目、これは長い。先が見えるが 60m 以上ある。出口付近は大きな滝壺となっており、右のガラガラした枝沢に逃げる。間隔をおいて来る後続に、身振り手振りでルートを伝える。雪渓の下で大声を出すのは、崩壊を招きかねず、ご法度なのだ。ようやく雪渓の下から出て、どろどろ、ぼろぼろの急なルンゼを登る。標高は 950m ほど。地図でも等高線が混み合い、小さな二俣になっている地点だ。左の小リッジへ上がりたいのだが、兩岸とも泥草付でとても登れそうにない。リッジの向こうの本流には 50m 大滝が懸かる。右側の木の枝を頼りに強引に登っていく。こういうところは先頭ほど有利で、後になるほど足場が崩れて大変だ。一ヶ所、枝にプルーチックをかけ、シュリングを垂らす。ようやく枝を頼りに左へ行くことができる。うまい具合に懸垂せずに大滝の上に出た。

ほっとするのもつかの間、前方にはまたも雪渓が曇天の下で暗いトンネルをつくっている。今度こそ出口が見えず、やばそうだ。すでに時刻は 13:50。巻くならもう一度右だろう。しかし登り返しても、行く先兩岸は急な草付となっており、左岸には枝沢が急な切れ込みを刻んでいる。相当な大高巻きになりそうだ。場合によっては下降点が見つからずに、尾根上でビバークというものもあるかもしれない。目指す稜線はガスガスで、ときおり霧雨が舞ってくる。台風の影響で、上は降っているのだろうか。この先どうなるのだろうか。

山野さん、上野先輩が偵察してくる。一度雪渓をくぐり、すぐ左側の枝沢で雪渓の開いているところから上に上がる。ここからは 3 人ずつアンザイレンしながら進む。一ヶ所に数人がたまらないよう。雲が流れ、強い日差しが差し込んだ。照り返して眩しい雪の上を、ショックを極力小さく、そろりそろりと前進する。ザイル 2P 半ほど進むと、雪渓はぱっくりと口を開けており、沢床が見える。右側にかろうじてブリッジ状につながっているが、このまま進むことはでき



中流部の雪渓

ない。

雪渓の末端で、左斜面の隙間から、下に降りる。ザイルで確保しながらであるが、どろどろの斜面を滑り落ちれば、岩が剥き出しの急で冷たい流れにまっさかさまだ。緊張の連続である。下に降りると個人的に一安心。しかし、後続が無事来れるのか。あいかわらずの濁流は、小滝の連続でスノーブリッジの中に吸い込まれていく。その雪板の薄さ!! これがいつ崩壊するかは、神のみぞ知る、我々は、そんな危ういところを進んでいたのだ（後続がまだ乗っているのは「橋脚」の上部分で、そんなに心配はなかった）

それでも、遠くには日本海と佐渡島。よく見れば海に浮かぶ2艘の船がゆっくりと尾を引いている。この対比！下界はなんて平和なのだろう。

さあ、これからどう進むべきだろうか。また左を登り返すのだろうか。上に行くにも下に行くにも、どちらにせよかなりリスクーなのである。

ここからは下!という上野先輩の判断で、先頭を突進する。出口は遠い。80mはあろうか。視界の最奥には茶色い小滝が日に照らされている。一抹の疑問も次の瞬間には吹っ飛んでいる。もう、ここを突破するしかない、あの滝を登れるかなんていう不安を考えることすらできない。そのまま直進する。頭の中は冷静さを失っていた。

滝だ!!落差は4-5m。雪渓の下で悠長にザイルで確保して...なんてやってられるものか、こいつ

を登れっ!!左から取り付き、どこをどうやって登ったのか・・・、気づいたときは上にいた。無心に登っていた。

だが、今度は後続にザイルを垂せ、とっさの判断。確保地点を求めて雪渓左わきに開いた斜面を登るがどろどろでだめ。戻って、「橋脚」の真下で岩の上にびくともしない氷めがけてピッケルをぶちこむ。このピッケル一本に託し、ピレイをとった。

佐藤君、山野さんを確保して、あとはノーザイルで突破。(反省:ピッケルはセルフピレイにして、腰または肩がらみがよかったのでは。ピッケルが氷からはずれたら...)

ダッシュで雪渓の下から逃げる。こんな所がスノーフォール帯というのか。小ゴルジュの中に崩壊した雪の塊がごろごろ転がっている。

まもなくゴルジュ帯を抜け出し、平和な流れとなる。稜線にはガスがかかり、流れは相変わらず濁っているものの、岸辺の若草が朱色の光に照らされ、なんとも美しい。そして、上空は青空! 雲上の楽園にふさわしい光景が広がっている。17時に休憩をとり、先を偵察する。すぐそこで二俣となり、左俣からは清冽な水が落ちている。右俣の上流には雪渓があるのか、濁っている。ちょうど二俣手前で幕営できるスペースを見つけ、稜線まで達しなかったけれど長かった今日の行動を終える。標高約 1220m。

夕食はポトフ。日本海に沈む夕日、シルエットの佐渡島を眺めながらの仕度。なんて幸せなんだろう。ほっぺたをつねって夢じゃないんだというように、寒い風が生きていることを実感させる。

8/14

**発 5:20 - 6:32R6:45 - ヤブコギ - 8:24 杵差岳 9:30 - R - R - 12:00 頼母木小屋**

快晴の朝がきた。堂々と横たわる飯豊最北端の山々に、明けの明星が沈みつつある。背後の大海原が少しずつ赤みを増している。

ササ灌木の中に小滝が連続し、ぐんぐん高度を上げる。1P ほどで地形が二俣状となり、ついに水が途切れる。ここから急傾斜の始まりだ。水を汲み、待ち受けるやぶに気合を入れて突入。ササ帯と灌木帯の境目を進むと、結構楽だ。それでも稜線はまだかまだかという感じなので、ときおり、小鳥の声に耳を傾けたり、はるか下方を振り返ったりする。ようやく傾斜が緩み、1時間のやぶこぎで稜線に出た。「やったー」西朋合宿初参加の佐藤君がさけぶ。

休憩の誘惑に駆られながらも、登山道をゆっくり 15 分ほどで杵差岳の頂上に到着。大休止。

360 度の大展望に、台風に気をもんだことがうそのように思い出された。彼方北には 3 年前行った朝日連峰が連なる。南には門内、北股と続く主稜線が、優しく、雄大な山ふところを広げて

いる。そして、西には日本海の青、意外に大きな佐渡島。しかし...、海辺には原子力発電所らしき煙突群も見える。もし今あれが爆発したら...一瞬にしてここまでやられてしまうのではないか。現代文明が、いかに砂上の楼閣と紙一重であることだろう。

さて、ここからは稜線の登山道を南下し、2P 半で頼母木小屋へ。暑いのに加え、沢が終わって疲れがどっと出たせいか、つらい2時間だった。

下山する山野さん、上野先輩、高橋先輩にお礼をし、加藤先輩、佐藤君、尾崎が残る。テント張って午後は休養。T シャツを洗ったり、沢たびを洗ったり、水場の恩恵に浸りながらのんびりすごした。

8/15

発3:55 - R - R - 7:15 北股岳 7:39 - R - R - R - 12:25 御西小屋 12:44 - 13:56 大日岳 14:21 - 15:25 御西小屋

今日からは縦走に入る。4 時出発予定、気合の 2 時起きである。ヘッドランプをつけて出発。流れるガスに、背後から照らす月の光が不気味だ。やがて、空が少しずつ白み始め、進むべき稜線がシルエットで浮かぶ。そこには朝露滴る一筋の道が続いている。

地神山でようやくご来光を迎える。モルゲンロートの山々。飯豊の優しい山容が、最も美しく輝くひと時だ。こんな山は西高の夏山合宿にもってこいなのではないだろうかと話しながら進む。北股岳からはかすみの向こうに今宵の泊まり場、御西小屋を望む。遠いー。

石転び沢下山の加藤先輩と別れ、残るはいよいよ縦走の 2 人のみ。

烏帽子岳を過ぎるころから、ガスが多くなるが順調に進む。レストは結構長めにとる。左下方には檜山沢の雪渓が雄大に広がっている。沢という沢はすべて雪渓で埋まり、まるで木の葉の葉脈のようで、尾根は葉っぱのふちに思える。途中、雪渓でガスに巻かれ道を見失ったところがあったが、12 時半には御西小屋に着いた。

大日岳が飯豊の最高峰じゃなけりゃあ、わざわざ往復しないだろうな、そんなことをぶつくさ言いながら、半ば義務的に歩き出す。多くの登山者は空身で行っているようだ。が、我々はセオリーとおりにアタック背負ちゃったりするから、意外に手ごわい(そりゃ最高峰だから当然か)。最後の急登にあえぎ、コースタイム 1 時間たっぷりかけて大日岳に達する。延々と歩いてきた稜線が、雲間に見え隠れするが、さすがに疲れて座り込んでしまう。

テン場に戻って水くみ、天気図、飯づくり。プロッケンを眺めながらの夕食となった。飯豊の夏は日本アルプスの夏とはちょっと違ったやわらかな雰囲気を感じる。さあいよいよ明日は最終日。

8/16

**発** 3:40 - 4:50 **飯豊本山** 5:11 - R - R - R - 9:56 **横峰小屋跡** 10:13 - R - R - 12:48 **飯豊鉱泉**

今日で今合宿も終了だ。しかし行程は短くない。川入発のバスに間に合わせるべく、今日も 2 時起きの 3 半発だ。まだどのテントも起きていない。「さあとっとと帰ろうぜ」、なんて言ってみる。時間といい、道のりといい、お帰りモードとは言い難い。

平坦な道で月明かりに照らされて、ほとんど懐電なしで行ける。冬の星座が瞬き、雪田が淡青色の神秘的な輝きを見せる。まるで UV ランプのよう。飯豊本山頂上でご来光。今まで歩いてきた、杵差岳からの稜線が一望にできる。いよいよ、今年の夏山合宿が(夏が...)終わろうとしている。

下山にかかる。ここからは急に人も多くなり、メインコースである。草履塚、切合小屋と過ぎていくうちに、少しずつ高山の趣が薄れていく。三国小屋で飯豊連峰の展望に別れを告げ、急下降していく。「馬返し」というだけあって、急な岩稜の道だ。地図でみた感じ以上に下る。地蔵山を巻き、長坂の下りをカウントダウン。上十五里、中十五里と着実にゴールを目指す。しかし、下十五里で休んだらなかなか出発できず。御沢小屋跡ではにわか雨をいいことに、またもしばらく休憩タイムを取る。

最後の林道をがんばって、12:50、ついに飯豊鉱泉に到着。粋な若主人にもてなされ、ひなびたお風呂で汗を流す。

鉱泉でいっしょになった人たちが呼んでいたタクシーに同乗させてくれたが、喜多方まで連れて行かれ、かえってバスより高がついたのはちょっと悔しい。喜多方ラーメンで合宿の無事終了を祝う(ことができたのでまあいいか)。SL が来た。土産を買った。僕らは 18 キップで帰途に就く。郡山では、集中豪雨で乱れたダイヤが幸いして、先行するはずだった東北線にうまい具合に乗ることができた。

---

## 0011 Yosemite Valley, CA, USA / Half Dome

日程：2000.8.26 参加者：灘吉

---

夏休みを利用して、アメリカ西海岸を一人旅してきた。L.A.、サンフランシスコの都市部と、比較的近いヨセミテをまわる十日間だった。アメリカの大自然を感じにヨセミテに行ったのだが、血が騒いだのか？ハーフドーム(2695m)に登ってしまった。

ヨセミテ国立公園は、サンフランシスコからバスで四時間、シエラネバダ山脈に位置する。ハーフドームは、国立公園(三千平方キロメートルの広さ)の中のヨセミテ谷(公園のわずか0.7%の領域)にある山(岩?)の名前で、エルキャピタンと共に有名である。本当は、ホテルだけ予約して行きたかったが、一ヶ月前の段階で、すでに予約は一杯。結局、二泊三日のツアー(ヨセミテに行ける唯一の観光ツアー。実は、参加者は日本人ばかりであった)に参加することにした。時間に制約を受ける一方で、色々なミニツアーに参加できる利点もあった。二日目のヨセミテ国立公園内ツアーで、様々な場所からハーフドームを見て、どうしても登りたくなってしまった。三日目は、サンフランシスコに戻るバスが出る四時までが自由時間であった。地図を買ってみると、ハーフドーム山頂までは標高差1490m、距離30kmであった。ガイドには10~12時間とあったが、行ける所まで行こうと思い準備に入った。山に登ることなんて全く考えてもいなかったの、食料、水と一緒にライトも買った。

8/26

朝、三時起床。三時半にチェックアウトを済ませて、出発する。昼間はヨセミテ谷をシャトルバスが循環しているが、こんな時間には走っていないので、余計に歩かないと行けない。真っ暗な舗装道路を一人歩く。バス停で明るくなるのを待って、いよいよ登山開始。といっても、途中には二つの滝があり、そこまでの道はしっかりしていた。でも、まずは登頂なので、脇目もくれず急ぎ足で通り過ぎる。ハーフドームはその名の通り、ドームを半分にした形をしている。ドーム自体は目の前に見えるのだが、登山道は裏の尾根に大きく回り込むように作られていて、遠回りさせられる。ドームは大きな一枚岩なのだが、それまでは針葉樹林が続いている。乾燥した気候のため、地面は土というより砂といった感じである。その中をジグザグに登りながら高度を稼いでいく。道もしっかりしており、また朝早く涼しいので快適だ。尾根に登ると、ドームが大きく立ち上がった。高さ100mはあるうか、角度は45度くらいだが、岩はのっぺりしていてつかむ所もないみたいだ。そして山頂に向かってワイヤーが二本張ってある。今まではハイキングであったが、これはクライミングと呼んだ方が良くもしいない。ワイヤーに捕まって登っていくと、次第に傾斜が緩くなって、九時頃山頂に着いた。山頂といっても、道標も何もないすっきりした所で意外と広かった。ここからのヨセミテ谷はまた絶景で、氷河に削られてできたU字谷がよく



Half Dome を間近に見上げる



Tunnel View と呼ばれる地点からのヨセミテ谷。中央奥がハーフトーム、左手前の壁がエルキャピタン。

見えた(ハーフトーム自体は氷河に削られて半分になったわけではないそうだ)。周りは360度どこを見ても山で、しかも果てしなく続いている。帰りは、時間に余裕があったので、滝を眺めながらゆっくり下り、一時頃にバス停に戻ってきた。

相当距離を歩いたはずなのだが、乾燥した気候のためか、快適なハイキングであった(喉はすごく渴いたが...)。ヨセミテ国立公園のほんの一部を歩いたに過ぎないが、その圧倒的なスケールに終始圧倒されてしまった。時間に追われてしまったが、貴重な体験をすることができた。

(灘吉 記)



---

## 0013 奥秩父/WC: 笛吹川東沢 鶏冠谷右俣

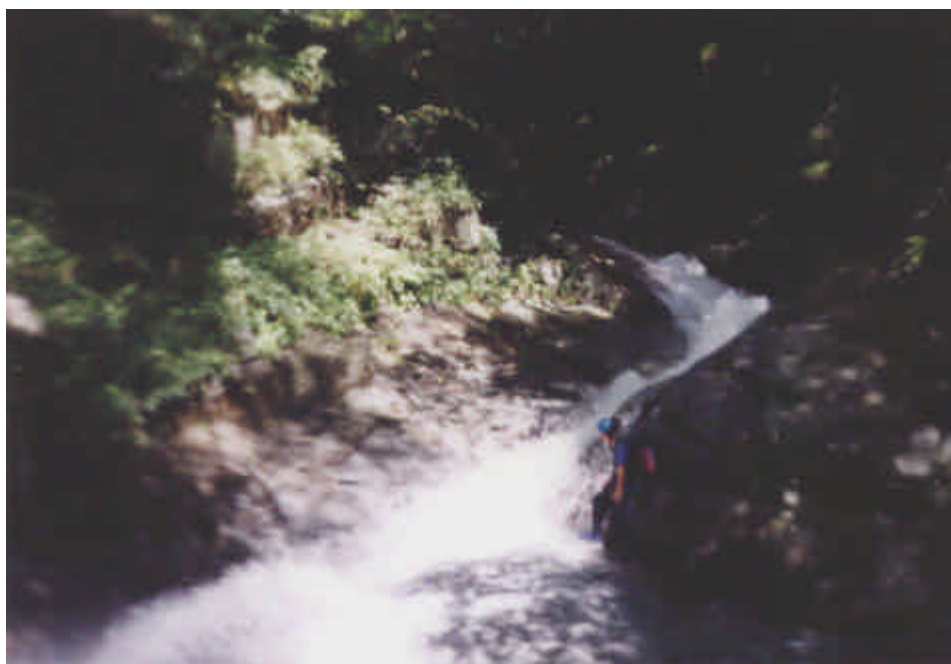
日程：2000. 9.15 参加者：高橋，尾崎，灘吉

---

朝6時頃，出発する．国立府中から中央道に乗るが，三連休の初日ということで下りが大渋滞．ある程度は予想していたものの，大誤算だった．結局，西沢溪谷に着くまで三時間もかかってしまった．

鶏冠（とさか）谷は，東沢に入って一本目の支流である．夏にも一度東沢に来たが，大雨の影響で川岸が削られ，大分雰囲気が変わっていた．また，沢の水も多めだった．そして，遡行スタート．

魚止滝を右から巻くと，少しゴーストが続くが，これが最初で最後だった．これ以降は，ゴルジュとナメが続き，僕らを飽きさせることはなかった．暑かったこともあり，腰まで浸かりながら登った．くの字の滝では，水量の多さとホールドの無さにてこずるが，確保されながら何とかクリアー．二俣では，時間が押していることもあり，右俣にルートを取り木賊山を目指す．この後は，ナメと小滝がずっと続く．全部直登でき，本当に楽しかった．そして大滝の手前から近丸新道を目指してツメる．大したヤブもなく，ほどなくして登山道にでた．最初につまづいたこともあり，下りたときには暗くなっていた．しかし，充分沢を満喫できたこともあり，足取りは軽かった．



ナメ滝を快適に行く

---

## 0014 上州武尊山 薄根川川場谷

日程：2000.10.7~8 参加者：尾崎、灘吉

---

10/7

沼田 9:20==タクシー降 9:56 - キャンプ場(入渓点)10:50 - R(8m スダレ状滝) - R(川場剣が峰沢出合下流ナメ) - 1500m 付近幕

寝坊だ!

とりあえず灘吉の携帯に連絡し、高崎まで新幹線に乗ることを伝える。パニック状態のまま出発する。忘れ物していないことを祈るばかりだ。結局、9時15分ころ、沼田駅に到着。ほとんどが尾瀬へのハイカーで、川場谷方面への相乗り客を探すのも失敗。2人でタクる。ごめんなさい。

けれど、抜群の秋晴れ、バスよりも奥まで入れてかえって時間短縮。けがの功名というか、なにはともあれ気を取り直さなくちゃ。灘吉くんには悪いけど。タクシーで川場谷出合の手前まで入ってもらい、30分ばかり歩く。

左岸(右折手前、左に近道らしきものがあるが、ダム下で行き止まり、道なりに行くべし。)右岸、左岸と車道を行くとキャンプ場につきあたる。そこから入渓してすぐに、美しいナメが現れ、期待通りである。途中工事現場まで水は濁っていたが、そこを過ぎるといよいよ本番だ。左岸から合わさる8mスダレ状の滝が秋の陽に輝いている。ここまで1時間ほど。「獅子の牢」らしきゴルジュ。兩岸覆いかぶさった漆黒を背景に、跳ね返る岩清水が虹色にきらめいて、コントラストが芸術。小滝群を次々と越し(容易)目立った支流もないので、現在地さえよくわからなくなる。大岩も多いので、『上信越の谷105ルート』の逆行図で書かれた大岩のどれなのかもわからなくなってしまうが、気にせず進む。

やがて、兩岸が開けたナメ床を、黄金色の柔らかな木漏れ日を浴びて進むようになる。黄葉したブナのは果てしなく明るい。前方には頂上付近の紅葉が、ササの緑の中にぽつぽつと浮かんでいるのが眺めらる。その光景はメルヘンそのもの。川場剣が峰沢出合も近そうだ。

左岸からさらさらとなめ小滝が合わさり、川場剣が峰沢出合いだ。これを過ぎるといよいよこの谷最大の見せ場に入る。滝を2つほど越えると、白い岩のナメが続く。スカイブルーにもみじの赤、流れる水はエメラルド。8m滝をノーザイルで左から越え、その後もほどよい間隔で4-5m程度の滝が現われる。玉すだれをかけたような美しい滝が多い。一ヶ所は左から巻いたが、他は直登できる。硫黄くさい滝もいくつかあった。

やがて、両岸に笹が茂る川原を行くようになり、今宵のテン場を探しながら進む。流れのすぐ右に整地された場所を発見。対岸には焚き火するスペースもあり、絶好の幕营地だ。少し上流を見てきたが、やはりもとの場所に決定。

たった2人だというのに、豆腐までもってきてくれて、今夜はキムチ鍋。自分が食当だったら、アイデアなく簡単に済ませてしまいそうなのに、灘吉はえらい。焚き火の日にあたりながら星空のもと飯を食うなんて、もはやこの時代、そんなに多くの人は経験できないだろう。

10/8

発 6:43 - 7:35 水涸れ 7:48 - ヤブ - 9:18 登山道 - 9:45 上州武尊山 10:35 - R - 14:43 上の原入口  
===15:40 水上

夏シュラフに朝の冷え込みは辛かった。昨日よりも雲は多めだが、今日も天気は心配ない。

歩き始めてしばらくすると、沢筋は二俣となる。ガイドに従って左俣へ入る。一時間弱来たところで、いよいよ水が涸れ、水をくみ、やぶに突っ込む。かなり濃密なやぶである。途中、左下にやぶの薄い溝があり、そちらへ移ったが、やがてはまた濃密なやぶを強引に直登するようになる。なんせ、しだ嫌いの自分には溝の中を進むのは苦難であった。

まだかまだかと思いながら、強引な登行を続ける。見た感じ稜線は遠そうではないのに、なかなか着かない。しかもけっこう急登である。ようやく登山道に出たときは、沢筋がずいぶんと下のほうだった。

頂上まで少し歩いたが、思った以上に早く着いた。日光や奥利根の山々がすぐ近くに見え、意外なアングルだ。こちらの方が谷川岳よりも高いのがわかる。南アや北アも確認できた。空いていて良い。しかし、さすがの百名山だけあって、うかうかしてるとハンターたちが来るわ来るわ。あっという間に頂上は人ごみで埋まってしまった。よく崩れないものだ。

急下降がしばらく続く。岩っばいなので注意しながら進むが、中高年の百名山ハンターたちが道を割ってきたりして、いまいちな気分だ。しかし、そんなのも手小屋沢避難小屋を過ぎればうそのように閑散としている。山奥まで林道が伸びた今日、文明の利器を使いまくるの普通らしい。近道ができて、この尾根道はもはやメインルートから外れたようである。

名倉の頭を過ぎ、沢沿いに行くようになるとやがて登山道も終わる。あとは舗装された道を景色でも眺めながら上の原入口バス停まで重力まかせに歩いていく。水上町の周遊バスが宝台樹スキー場あたりまで来るようだ。

---

## 秋川流域の沢めぐり

青谷 知己

---

2001年、この年は、秋川流域の低山によく出かけた。それは、以下のようなめぐりあわせのためである。

1996年、伊豆諸島の一つ三宅島にある三宅高校に赴任することになった。伊豆諸島の中でも三宅島は、自然が豊かでしかも活動的な火山ということで気になる存在であった。いつか島暮らしをしてみたいと思っていたので、タイミング良く空きが出て、飛びついた次第である。山とは対極にある海を中心とした生活は、少し軟弱な気がしないでもないが、それはそれで豊かさを実感するものであった。そのため、島での数年は全く山行回数が減り、年に1、2度、遠征して山スキーや低山ハイクに参加する程度だった。ただ、三宅島の雄山には、火山の調査や自然観察をかねてよく登った。

ところが予想(より早く)に違わず三宅島の火山活動が始まり、三宅島は2000年7-8月に大噴火を引き起こすことになった。専門分野でもあるので、噴火時には心の片すみに興奮を覚えていたのが正直なところだが、最終的に、全島民が島外避難を強いられるという厳しいものになった(これを書いている今まで、避難生活は3年半におよんでいる)。8月29日、急きょ決まった高校の避難先は、あきる野市にある秋川高校。わが家はとりあえず近くにある五日市の教職員住宅と相成った。当初は着の身着のままの避難生活で、山どころではなかったが、ほっと息をつけば周りは山。気分転換もかねての山めぐりが始まったというわけである。

南秋川流域の沢は、数年前に岳人が何かで地域研究され、ガイドブックにも取り上げられるようになって注目されるようになった。小規模ではあるが、忘れられた小沢に意外な発見を見いだすような新鮮さが漂う。盆堀沢の支流群は昔からよく知られている。少し地質を解説すれば、このあたりの岩石は、地質学的には、小仏層群という中生代白亜紀の砂岩や泥岩から成っていて、深海にたい積したものがプレートの運動により日本列島に付加されたものである(よって化石は乏しい)。所々で砂泥互層のきれいなしま模様を見ることがあるが、概して沢床は暗くなりがちである。地層の走向が東西方向で積み重なるので、これを横切る方向に沢が屈曲するとき、連続した滝場を形成する傾向にある。

五日市に仮住まいしたおかげで、このあたりの山々が自分の庭みたいなところになったので、めばしいものを一通り巡るべく、半日程度の行程で暇を見つけては登ってみたので、まとめてここに報告する。最近のガイドブックもさることながら、東京ガス山岳会、昭和52年再版(執筆は昭和10年代?)の、「秋川の山々」の記録がさらに興味を引き立ててくれた。

次のシリーズでは、さらにマイナーな沢筋をつぶしていきたいと思っている。

2000 . 10 . 28 南秋川 矢沢 軍刀利沢 (青谷 他2)

まともな道具は島においてあるため、わらじと厚手の靴下を調達して、久しぶりの沢登りとなる。車を出合い付近の道ばたに駐車する。最初こそ藪っばいが、しま模様の岩床がきれいである。小ゴルジュ、そして手ごろな滝の直登が続き、楽しい。

つめも藪こぎなしで、ナメコなどをみつけつつ登山道に出る。生藤山山頂を経て、明りょうな仕事道をたどれば、矢沢林道の終点に出ることができるので、すっきりと車にもどれる。このあたりでは、初心者にもおすすめの沢であろう。

---

## 0015 南八ヶ岳/VR : 石尊稜

日程 : 2000.11.18-19 参加者 : 尾崎、灘吉、佐藤

---

初日は赤岳鉱泉まで入り、取り付きの偵察。稜線はうっすらと雪がつき晩秋の様相だ。

2日目。昨日の偵察通り、中山乗越に向けて歩き、柳川南俣の源頭が横切るところで左に入る。2回沢筋を左に分けると、左側の赤茶けた尾根が石尊稜である。赤茶けた壁を登りさらに一段吸斜面を登ると、平らになり、行く手に第一岩壁が見える。ここが一番の難所だ。岩壁には灘吉トップで取り付き、途中1回切って尾崎が先行し、2Pで何とか越える。が、かなりの高度感と3人でのザイル操作になれていないせいか、かなりの技術的限界を自分は感じた。続く尾根は急なところが多く、雪がついていないためアイゼンもつけないので、かえって滑りそう。しかし途中にはほどよいテラス状の平地が2ヶ所ほどあり、幕営も可能のよう。いよいよ稜線直下、最後の岩場となるが、先ほどの限界感のためか高度感があって難しそうに思え、時間が押していることをいい理由に右へ巻いてしまう。二十三夜峰を巻く道に出て、いったん石尊峰に登り返し、あとは地藏尾根経由で下山。後々ガイドブックを見れば、第二岩壁のほうが簡単だとか書いてあるが...

赤岳鉱泉でテントを撤収し、美濃戸口に着いた時には真っ暗で、バスも終わってしまっていた。今回は天気もよかったが、それでも中途半端な登りになってしまった。入門ルートをいう言葉を甘く見ていたようだ。いずれにしろ自分の技術はその程度ななどと、何となく無念。もうちょっと余裕をもって登れるようになりたい。がんばらなくっちゃな...

---

## 0016 南大菩薩：滝子山南稜

日程：2000.3.12 参加者：尾崎

---

稜といってもただの岩っばい尾根である。修論も何とか終わったし、ちょっと日帰りの山へというにはまずまずだった。笹子駅から甲州街道を上り方面に戻る。

尾根は上中部は露岩が多い急な登りとなる。頂上手前に偽ピークがあって、そこからはくるぶし程度の雪を踏む。運動靴で来たのはちょっとなめていたか？ 幸い快晴とあってそれほど問題ではない。午後の陽に照らされた低山の連なりは、ハイキング欲?をそそる。下山は落ち葉と雪を交互に踏みながら、初狩駅へのメインルートをとった。

冬枯れの静かな山登りに心洗われ、帰りの電車での居眠りは心地よかった。

# 2001 年度

## 2001 年度役員

会長	山野 裕
チーフリーダー	上野 午良
学生リーダー	尾崎 宏和
会計	山田 裕久
記録・会報	高橋 寛和
	清野 尚史
装備	尾崎 宏和
	灘吉 聡
西高係	佐藤 正明
	田中 浩平
	松長 麻美
都岳連関係	上野 午良

## 0102 越後/VR：十字峡～本谷山～大水上山～越後駒ヶ岳

日程：2001.5.3～5 参加者：高橋，尾崎，上野(利)

GWの越後シリーズはこれで3回目か？最高だったり最悪だったりと天気に左右されがちなこの季節だが、今回は天候を期待できそうだ。

5/3 十字峡 10:15-11:35 丹後山西尾根取付 11:50-13:07 内膳落合 13:24-14:31 R 14:47-15:46 幕

十字峡でタクシーを降りると、さっそく林道は大規模なデブリの下となる。左手には三国川の激流が刃を向いているかのように激しく流れている。慎重にトラバースを続ける。丹後山登山口を過ぎると、踏み跡は続いているもののかなり心細いものとなる。雪の下に林道がある形跡は全く無い、デブリが続き、対岸にはブロック雪崩が落ちるのを見る。流れが右へ曲がるところで、高度感のある右岸(流れ外側)を、間隔をあけて怖いトラバースしていると、ブロックが我らの間を落ちて行った。これは幸運としか言いようが無いし、ザイルを使っていなくて良かった。今山行の核心は、しょっぱなのデブリ埋没林道に違いない。

内膳落合に着いて一安心。しかしここから取り付く中尾ツルネは地図で見た以上に急登だ。西側には銅倉尾根のネコブ山が茫洋たる山並みを見せる。こちらは山腹斜面をブナが覆い、尾根上をぽつぽつと松の木が生える、越後の山独特の風景。この「生態的最適」ってやつの教科書みたいな尾根を、俄かに暗くなった空を憂いながら登っていく。



三国川のデブリ帯を行く



ついに降り出してしまったが、森林限界付近まで達したので幕営する。ここから見る主稜線はあまり雪がついていないように見えるが、季節風のあたる西側だからか。

5/4 発 5:02-6:19 1380m 地点 6:36-7:40 稜線手前 8:01-8:53 本谷山 9:07-10:04 越後沢山  
10:25-13:47 兎岳

雲が多い朝で、山沿いはにわか雨の予報。下界の天気はいいらしい。登り始めて程なくして雨量計か何かの建物が現れ、さらに淡々と登っていく。小ピークを越し、雪の大斜面を登ることに日差しが出てくる。稜線手前は最近刈り払われたらしく立派過ぎる道になっている。しかし利根川信濃川の分水嶺になる稜線に到着すると、ここから先はヤブこぎか残雪期の山行の世界となる。

本谷山まではやせた稜線だが、問題なく歩ける領域。その後ヤブをいくぶんか漕いで本谷山に着く。越後沢山までは本当に春山 JOY。陽光が明るい。一度大きく下って登り返す。越後沢山は、平標以東の上越国境でつながっていない巻機 - 大水上山の中で、なんとなく惹かれる存在だった。ここを過ぎれば丹後山特有のたおやかな尾根が続くようなる。ここも残雪期の威力を発揮して順調。平が岳に続く奥利根大三角地帯の山々がどこまでも続いている。残雪をつないで丹後山まで来れば、夏道にひょっこり合流し、本当に平らな丹後山山頂そして避難小屋となる。

大水上山まで来ると再びアップダウンが始まる。利根川源流碑にザックのデポが3つ。大水上山とは単純だがいい名前だ。思い出の兎岳までの長い登り(おそらくそう感ただけ)では、歓声を上げながら3人の山スキーパーティが滑り降りてくる[後日の『岳人』によれば、童人トマの風パーティ]。ますます足取りは重くなるが、もう一分張り、一昨年に引き続いて兎岳山頂で幕営とする。

5/5 発 5:04-7:23 中の岳 7:50-12:25 越後駒ヶ岳 12:52-16:35 駒の湯 16:55・・・

快晴の下、目指す中の岳はでかい。それでも問題なく進む。中の岳山頂は北西風が強い。大きく下って延々進む。今度は暑い。根曲がりの藪がでてくる檜廊下は歩きにくい。案外長い縦走で、3ピッチかけてようやく駒ヶ岳への急登にぶつかる。南向き急斜面はすでに当然雪は無く、暑い登りに耐えることとなる。

登りきっても頂上までは少しある。ここからは雪の稜線で、右下に見える駒の小屋めがけて山ボーダーやスキーヤーが遊ぶ世界となる。さっきまであんなに人がいなかったのとは対照的だ。頂上で大休止の後、下り始めれば速い速い。小倉山の下りを慎重に行き、ぶなの新緑の尾根をとぼとぼと下っていくと、左下に駒の湯が見え、吊り橋を渡ってゴール...といきたいところだが、大湯温泉まで舗装道路を1時間強目いっぱい歩かされた。

---

## 0105 北アルプス/ST：室堂平 剣沢 タンボ沢

日程：2001.5.25-28 参加者：吉田(慎)，山野，尾崎

---

5/25

金曜夜の急行アルプスで一路信濃大町へ。登山客と通勤帰りの帰宅客で思った以上に混んでいるが、夜行列車のこの雰囲気が好きだ。

5/26

信濃大町には朝 5 時過ぎに到着し、アルペンルートという機動力を駆使して一気に室堂へ。そこは標高 2340m、5 月が終わるといこの時期でも、一面の銀世界である。

バスターミナルからいったん東へ向かい、称名川の谷沿いに雷鳥平キャンプ場へと向かう。テント設営の後、しばし周囲を見渡す。今日はけっこう雲が多く、満足な眺めはない。足慣らしに室堂乗越や雷鳥沢付近で練習する。

5/27

天気はまったくさえないが、何はともあれ雷鳥坂の急登を登り始める。2P で剣御前小屋に至る。しかし稜線の向こうはまったくの大ガス状態だ。乳白色の闇とっていい。

小屋で 1 時間ほど休んでいると、ようやく霧が薄くなり、待ちに待った滑降の開始だ。超快適な斜面がどこまでも続いている。初中級向けゲレンデくらい。しかし、本コースの決定的かつ最大の難点は、滑り終えたら登り返さねばならぬという、精神的閉塞感である。風を切ってゆく瞬間瞬間、これでいいのかという一抹の疑問が浮かんで消え、再び大きくなっては浮かび上がる。そしてそれは確実に積分されていくのである。

一気に剣平を通過する。先行するは 1 パーティのみ、夏の喧騒はどこへやら。けれども借金は膨らむばかりだ。真正面には源治郎尾根、ハッ峰の岩峰群が五月晴れの空に鋭く、明るく、聳え立っている。・・・はずだがそこまで天候は回復していない。写真でよくみる雄大なツアー風景には、そう簡単には出会えないのだろう。1992 年、高 1 の夏山合宿で、剣御前から見た巨峰剣岳には、威圧感すら覚えたが、今日はヴェールに身を隠している。見え隠れする下部岩壁が奇怪な風景である。

滑降を続ける。ときおり落石が転がっていたりして注意が必要だが、それ以外は天然のザラメ雪だ。なんてすばらしいだろう。帰りのことは忘れましょう。平蔵谷出合。この辺りから雪面が硬くなり、快適さが少しづつ失われてきた。源治郎尾根の末端を過ぎ、ひと滑りで長次郎谷出合。この辺りまで下ると雪の表面はさらにガジガジしてきている。あと少し行けば真砂沢まで下ってしまうので、そろそろ引き返すことにする。休憩の後、シールとスキーアイゼンを装着し、とぼとぼと登り始める。まったく、順番が逆だ。



剣沢から室堂に帰幕

剣御前に着いた。下方に、雷鳥沢、室堂が西日に照らされ輝いている。今日最後の滑降は、豪快な大斜面だ。テン場を真下に見ながら、ハイマツの切れ目から急雪面をすっ飛ばす。やった！いけー！こけるなー！下方へとぐんぐん吸い込まれていく。途中、せっかくの斜面を飛ばしすぎるのも勿体無く感じる。あっという間に雷鳥平へ。

大日岳はシルエットに染まり、立山はアーベントルートに輝く。残雪と青い空、そして黄金色の太陽。そこはまさに天国、雲表の楽園。みんな無理して来りゃいいのにね。

5/28

テン場から室堂バスターミナルへ歩く。なんと、今日は黒部平までいかない荷物を下ろし、ロープウェイで室堂まで戻ってきてからタンボ沢を滑るという、自分にはとうてい信じられない行動予定だ。さすがは大資本(?)を背景とした山行だ。

それにしても、ツアー客がこんなにも多いとは。立山のオーバーユースは尾瀬、上高地と並んで深刻である。溶けて薄くなった雪面を雪上車が走り回り、地面を傷めないのだろうか。夏の観光シーズンを控えて山小屋は改装真っ盛りであった。トイレの問題（垂れ流しなど処理方法）も確かに深刻だが、あんなに大きな穴を掘ってタンクを埋設するのは、どうにも気にかかる。微妙なバランスの上に成り立つ高山生態系を乱すのは明らかだと思う。

とはいえ、自分も立山を訪れ、スキーを楽しんでいる。この問題は、単に利用量を減らせというのではなく、利用の質を転換しなくては解決には至らないだろう。

今日はド快晴。暑い。剣岳も見える。一ノ越までだるい登りを1時間半ほど。この道も全面コンクリート張りで悲しい。山の向こう斜面を滑ることだけを楽しみにして、シール登高を続ける。

ようやく一ノ越に着くと、向こうには黒部源流の山並みが幾重にも重なって見えた。赤牛岳、水晶岳、鷲羽岳。吉田さんは昔、仲間が黒部上流で遭難した時、捜索のために、沢という沢、尾根という尾根を網羅し、でかいマツタケを見つけたとのことだ。奥黒部ヒュッテの裏手には、その遭難碑がある。こんなに奥深い山々を、月曜休んだとはいえ、5月の週末に味わっているのは不思議な感じだ。アルペンルートあつての今山行ではあるのだが...

ここからは東一ノ越に向け、左にトラバースしていく。ちょっとの間だけ滑るが、道端に雪がなくなり、歩く。右下には御山谷が緩やかなスロープを展開しており、タンボ沢よりもむしろ快適な下りが期待できそう。東一ノ越は、鬼岳、鷲岳が真正面に迫っており、午後の逆光が東面カール群のコントラストをますます鮮明にする。それはまさに日本離れした光景で、吉田さんは「(欧州)アルプスに行ってきました」と暑中見舞いを出すんだ...と喜びながら記念写真をとる。だが...後ろに入ってしまった日本人(山野さん)のせいで、まったく疑わしい物になってしまった。いやこれは、ひとえに撮り手(尾崎)の問題だが...(笑)。ときおり聞こえるロープウェイの発着アナウンスがなんとも残念だ。

さて、最後の滑降に入る。最初は急だがあとは快適な緩斜面が続く。しかし、である。しばらく下っていくとロープウェイの真下を滑るようになる。観光客の視線と歓声を浴びせられ、これは人間サファリ状態。何はともあれ怪我もなく、無事に黒部平に到着。これでスキーツアーは終了。松本に出て、上の天黙羅で締めくくった。

## 秋川流域の沢めぐり

青谷 知己

### 2001.7.6 盆堀川ユズリ八窪 (青谷)

まずは、あいさつ代わりにユズリ八窪へ。サルが出没する盆堀の集落をすぎて林道をしばらく進むと、最初の採石場を見る。その先に堰が見えるが、その下左岸に細々と岩はだを伝って小滝が落ちている。これがユズリ八窪である。水量の多いときはそれなりの見ばえがするが、この日は全く乏しい流れであった。採石場のほこりが舞う道ばたに車を止め、河原で仕度をする。

出合いの小滝にとりつけば、取水管などもあって変な感じだが、しばらくで沢らしくなる。数個の滝はどれも容易で、最後の方の支点にかかるシュリングをつかんで登る小滝は覚えている。越え藪に突入する前に左岸の小尾根をひと登りすると、伐採地に出て出合い付近を見下ろすこと

になる。半分藪に隠れた仕事道をジグザグに下れば、車の前に飛び出す。ほんの足慣らしの1本、これだけが目的ではもったいない。

### 2001.7.8 南秋川 小坂志川 ウルシヶ谷沢 (青谷、尾崎、山野)

詳細は山野さんの記録文参照

ザイルを出す右俣の大滝こそ面白いが、水量少なく、全体の規模は小さい。左俣も2, 3すっきりした滝をかけるが、グレードの割に物足りない印象。

### 2001.8.14 伝名沢 三郎ノ岩道窟 (青谷)

盆堀川を中流の伝名沢の支流。伝名沢橋の先の広場に車を止め、そこから続く山道に入る。しばらく進むと広い左俣を分け、右俣にはいって堰提を越えると右から細い流れが入ってくる。これがめざす沢で、水量はぐっと少ない。

しばらく進むと、沢は高い岩壁に囲まれて、右岸から直角に2.5mの大滝がちょろちょろと流れ落ちてくる。ぼこぼこした苔むした岩はだで、ザイルをつければ登れそうだが、単独では冒険するわけにもいかない。正面のルンゼをしばらく登ってから、悪いトラバースをしつつ高巻いて大滝の一つ上の小滝上に降りる。一息ついて登り始めると、まとまった連瀑帯になる。途中のつるつとした7m滝は、流心を慎重に越える。しかしそれもつかの間、沢筋は新しい伐採あとに阻まれるため、あっけなく終了となる。左岸の植林地の急斜面を登れば仕事道に出る。

余力があるので、仕事道をたどってウスキ山の山頂を目指すことにする。しばらくやせ尾根の急登をすれば登山道に出る。真夏の戸倉三山をたどる人は少ないらしく、登山道は一部藪がかかってきて、かつ雷もゴロゴロしたので、山頂は今度の機会ということで引き返した。仕事道を忠実にたどり、最後は斜面を伝名沢に降りた。

この沢はぜひ大滝を登ってみたい。

### 2001.10.2 南秋川 矢沢 熊倉沢左俣東沢 (青谷)

車を矢沢の入り口付近において、熊倉林道をたどる。

水量はほどほどにあり、楽しく水線を行く。途中の4m、3段1.5mは特に問題もなく直登できる。しばらくで奥の二俣になり、実質的に終了。あとは倒木のうるさい窟を忠実にたどっていけばよい。稜線手前で一本の巨木に出会う。少し得した気分になれる。めったに行かない熊倉山に立てるのもうれしい。

下降路は少しひねって、矢沢と熊倉沢を分ける尾根にとってみた。所々に踏み後が見られるが、地図をにらみながらの下降。動物的な勘をたよりに、尾根線をうまくたどれたときは楽しい。林道から観察して、ここが下降路になるのではないかと思っていた踏み跡にドンピシャ到達して、車の近くに降り立つことができた。

沢1本だけでは物足りない。紹介されているように、沢の登下降で継続するのがベターだろう。

## 0112 北アルプス/VR : 剣岳ハツ峰・源治郎尾根

日程 : 2001.8.10-13 参加者 : 尾崎 他 1

8/10 黒部ダム 7 : 45-10 : 20 内蔵助平 10 : 35-12 : 07 ハシゴ谷乗越 12 : 15 13 : 25 真砂沢 B.C.

夜行で信濃大町駅に降り立ち、ダムからは黒部川の左岸を下降し、内蔵助谷へと歩程を進める。黒部ダムに入る。さっきまでの賑わいはどこへ行ったのやら。内蔵助平からハシゴ谷乗越までが案外長い。内蔵助平を見下ろせば、不思議なほどに平坦な盆地だ。朝方は晴れ間が見えていたものの、天気は怪しくなってきた、真砂沢への急下降を急ぐものの、雪渓に降り立つと大雨。真砂沢まで少しの間はかなり濡れ、ロッジのトイレでしばらく雨宿りする。対岸斜面のルンゼは大滝となり、ヤルキ喪失。剣沢までの予定はあきらめて、小ぶりになったところでテントを張る。夕方、長次郎雪渓の偵察に行く。

夜は雪渓吹き降ろしの風で相当寒い。

8/11 真砂沢 B.C. 4 : 17-6 : 00 ・ のコル 6 : 12-10 : 25 ハツ峰の頭 10 : 25-11 : 50 剣岳 12 : 40-14 : 47 真砂沢 B.C.

4時に行動を開始する。昨日の偵察どおり長次郎雪渓に入り、2時間ほど登ると右手にハツ峰の5・6のコルが見えてくる。天気は完全に回復し、めざす剣は青空を背景に高い。5・6のコルまでは難なく行き、ハーネス、メットの登攀体制となる。

取り付きのルーファイに迷ったが、基本は積極的に登って降りるを繰り返す。見た目圧倒されてもやってみればそれほどではない。コル上部からザイルを出す。爽快なクライミングとピークからの懸垂下降を繰り返す。七峰付近では鋭い岩稜上をノーザイルで快適に進む。左手には長次郎雪渓、熊の岩のヤミテン場、そして剣沢のテント村が見え、頂上もどーんとでっかく迫ってくる。八峰の下りか、ハツ峰の頭手前でちょっとしたバランスを要する岩場の下りで狭いコルに降り、再びザイル登攀となるが、ここも問題なし。

剣北方稜線に出れば、越中側の小窓尾根方面が見えてくる。赤い岩場を越えて、ガラガラの岩場を進み、ピークを越え、長次郎雪渓左俣の源頭を過ぎるとバリエーションから登った待望の剣山頂だ。

下山は往路から、長次郎雪渓左俣を直接下降。ただし下り始めはかなり急なので、アイゼンをつけ、ピッケルも使用する。熊の岩付近まで下ると、雪渓が割れており、左岸の熊の岩の台地から右俣へ移り、再び延々と下る。真砂沢に帰還したときは2人とも疲れきっていた。

8/12 B.C. 4 : 07-6 : 20 剣沢 B.C. 6 : 45-7 : 27 源治郎尾根取付 7 : 35-11 : 08 峰 11 : 25-12 : 47 剣岳 13 : 10-15 : 30 B.C.

今日は源治郎尾根。しかしまずは剣沢までテントを持ち上げる。ぱっとしない天気の中、カッ

タルイだらだら登りをこなし、テント村へ着けば人の多さにがっかり。村じゃないよこりゃ。

手早く準備し同じ道を下り始める。そうこうしているうちに天候はいくぶん持ち直したか。源治郎尾根を登るのは、我々が今日の最後かも。先行パーティが取り付きでてこずっていたので、右側の窪から行くが、すぐに滝が現れザイルって感じとなり、引き返す。と、こっちは踏み跡が明瞭なものの、泥壁をハイマツに腕力でよじ登る沢の源頭系。あとは嫌というほど登る。

源治郎 1 峰手前でようやくすっきりした稜となる。しかし昨日のような岩稜ではなく、ハイマツなどがはえた土の尾根を 2 峰まで進む。2 峰の下降はザイル 2 本をつないで 30m 強の懸垂。あとは岩尾根を登っていけば直接剣頂上に達する。くだりは別山尾根の一般道。今日は 1 日中天気が安定せず、帰幕と同時に雷雨に見舞われた。

8/13 B.C.4 : 36-6 : 58 **大汝山** 7 : 13-8 : 40 **東一の越** 8 : 57-10 : 28 **黒部平** 10 : 40-11 : 53 **黒部湖**

本峰南壁をやるかとの案も、お帰りムードと朝の分厚い雲には勝てなかった。しかし立山三山を縦走しているころにはド快晴に...頑張っておけばよかったかな? まあいいか。左下に氷河の可能性があるとされる内蔵助雪溪を見下ろす。

富士の折立を過ぎ、雄山からはめっちゃ人が多くなるものの、それもわずかの間。なぜって一ノ越からは左折。右折ではないぞよ。黒部ダムへは忠実に足で下る。5 月末のスキーと同じく、またも人間サファリかと思いきや、樹木が茂って一安心。ごった返した黒部湖にて山行を終了する。



---

## 0114 和賀山塊/WC : マンダノ沢~朝日岳~朝日沢下降

日程 : 2001.8.17~19 参加者 : 山野・加藤・上野・尾崎

---

8月17日朝、角館駅に三々五々集合後、タクシーで夏瀬ダムまで入る。対岸にすぐ堀内沢の出会いがある。堀内沢沿いの右岸林道を暫く行き、広いゴー口の河原に出た所で足袋に履き替える。青空の中の遡行となり、堀内沢の流れの中、歩みを進めていく。ゴー口歩きとへつりを繰り返して朝日沢の出会いで休憩。太陽が眩しく、気分も爽快。朝日沢出会いより2ピッチほどでマンダノ沢が出会う。夜行バスで集合組はそろそろ疲れが見えてきた。6年前に来た時に1泊した蛇体淵手前の絶好の幕場を目指して頑張り、15時前にせせらぎの流れのほとりの絶好の幕場に到着した。夕飯前にソーメンを食し、焚き火を囲んだ夕食の後、遠くに蛇体淵に落ちる水流の轟音を聞きながら、酒でまどろみ深い眠りに落ちていった。

18日は朝一で蛇体淵を左岸から巻きぎみに越えて始まった。下天狗沢に入り細くなった水流の中の急登をあえぎあえぎ登っていく。朝日岳山頂は6年前と同じトンボの群れの中の静かな山頂だった。2回しか来ていないが、本当にいいロケーションの山頂である。しばしトカゲの後、朝日沢目指して踏み入っていく。下降は特段の困難もなく、沢下りの様相。ピッチも上げた下降でもあり、さすがに山野さん疲れを隠せず、堀内沢に出会う直前で幕営。今日も焚き火で、越えてきた和賀の山並みに想いを馳せた。



羽後朝日岳頂上・右奥に和賀岳

19日 出発して1時間もしないうちに堀内沢本流に出会う。2時間もかからないうちに右岸の林道に辿り着き、靴に履き替えの大休止。晴天の炎天下、気分もよく夏瀬温泉に向かった。温泉には入れたが、別棟の家族風呂みたいなところに案内された。登山客には旅館の風呂には入れてくれないようだ。(車で来ていた入浴客には旅館内の大風呂を案内していた)それでも一応さっぱりとして、タクシーで角館に向かい駅で食事後に解散。

帰途、和賀のブナ林の中の流れにもう一度身を置きたい気持ちになっていた。

(上野記)

---

## 0122 表妙義/WC：中木川小山沢～表妙義縦走

日程：2001.11.4 参加者：高橋，尾崎

---

11/4 横川 5:30-6:45 小山沢出合 7:08-8:15 12m 滝(巻き) 8:30-12:15 相馬岳 12:37-13:56 見晴  
14:07-15:20 妙義神社

暗いうちに横川駅を歩き始め、紅葉の妙義山へと分け入る。国民宿舎を過ぎたところで右岸に合わさる小山沢に入る。明るい溪相で楽しく遡行した。中流部まで来れば水はさらさらと流れ、滝場は明るい。核心のチョックストーン滝はザイルを出して挑むが、ホールドスタンスが細かく、冷たい水に手がかじかむ。水が涸れ、源頭部を横切る踏み跡を登山道とは思わずに、詰め上げれば道のない茨尾根の稜線に出た。ルーファイミスの模様だが、どうも過去にも通行があったよう。薄い踏み跡&道型をたどると正規の縦走路に出た。

下山は妙義神社まで縦走し、表妙義の岩場を楽しんだ。上州の空っ風は冬の到来を語っていた。

---

## 0125 八ヶ岳/IC：ジョウゴ沢・裏同心ルンゼ

日程：2001.12.15-16 参加者：尾崎，他3

---

前夜東京を車で発ち、美濃戸口から美濃戸へ向けて最初に坂を下った橋のたもとでテントを張る。翌日、赤岳鉱泉に入り休憩後ジョウゴ沢に向かう。じきに天気は風雪混じりとなり、寒さが募るなか、初めてのアイスクライミングとなる。

もちろんフォローで登ったわけで、最初の滝は楽勝。普通のアイゼンでもいけるもんだ。いくつか滝を越し、入門レベルのジョウゴ沢左俣から右俣に入る。少し歩くと右俣大滝が落差 15m ほどの氷瀑で立ちふさがる。ここは本郷氏のリードで越え、各自トップロープでトライするものの、私はあえなく力尽きた。風雪激しくなり、ばしばしと懸垂下降しながら赤岳鉱泉に戻る。

明けて日曜日は快晴。なかなかのアイスクライミング日和となりそうだ（初体験者がそんなこと言っちゃって）。今日はジョウゴ沢の手前の裏同心ルンゼへと向かう。すでに先行パーティは多数。F1 から快適に越えていく。氷へのバイルの効きが心地よいが、アイスは道具次第と言われるのを実感した。すると、山野井泰史がソロで颯爽と登ってきたと思うと、完全にノーザイルでわれわれを追い越し、核心の3段の滝も軽々と越えていく。核心の滝は見た目立っているが、我々にもちょうどよい難易度といったところでさほどの難はない。部分的にツルベで進む。全部の滝を快適に登り終えたところで、懸垂で往路下降とする。個人的には大同心稜に抜けてそれを降りるか、稜線まで登りたかった。

それでも全体に困難は感じず、アイスクライミングの楽しさを知ることのできた山行でした。

## 0126 冬山合宿 南アルプス/VR: 小赤石東尾根～赤石岳(中退)

日程：2001.12.30 夜行～2002.1.3 参加者：加藤，上野，高橋，尾崎

## 行動および天候概況

12/31 畑薙ダム～榎島：快晴，風強い

1/ 1 榎島～赤石小屋：早朝晴れ～午前中富士山に笠雲，高曇り～14時ころはまだ稜線が見える～15時ころから雪，暖かい夜

1/ 2 赤石小屋～ラクダの背岩場手前：早朝上空から東の空は晴れ，稜線は雪(見えない)，早朝はほとんど無風，～朝7時ころには雪，遅くなるほど風が強まる．16時放送の天気図(正午)では輪島上空付近に副低気圧があったので，朝の晴天は擬似晴天か？

1/ 3 朝は冷える，赤石小屋～畑薙ダム：雪，上空はときおり雲が切れて日が射すが稜線は完全にガス，林道では曇り時々雪

## 12/30 快晴

高幡不動 16:00 集合とのことで，大掃除真っ最中の家族に申し訳なく思いながら急ぎ足で上石神井駅に向かう．まもなく駅というところで，バシッと音がしたと思うと，ザック(マジックマウンテン，1995年購入)のショルダーベルトがぶっ壊れた．コードロックのプラスチック部分が破損してしまう。いやな感じ...実はこのザックは，旭岳東稜(2000年2月)の登山口でもぶっちぎれた．その時は反対側でまったく同じことが起きたのだ．その時は何とか急場をしのいで登ったが，五段の宮という岩場でグランドフォール．ほんの0コンマ数秒という落下時間が，5秒にも10秒にも感じたあの瞬間．落下中，視界のすべてが溶け混じって流れていったのは今でも明瞭に思い出す．急遽親父のザックを借りて出発．

## 12/31 快晴 沼平 8:50 - R 中の宿 - R - R - 14:31 榎島

快晴だ．仁田岳，茶臼岳の稜線が雪煙をあげて輝いている．「あー明日からはてんきがわるいんだー」と，みんな嘆きながら，延々と林道を進む．正月明けは今季もっとも強い寒気が流入し，山は大荒れと予想されている．進むにつれて，林道も雪に覆われはじめた．牛首峠では，三角形に天を刺す赤石岳の姿が，午後の陽に輝いているのが恨めしい．

榎島の小屋番によれば，普通年内は1-2度降る程度で，雪が積もることもないとのことだ．だが今日の積雪を見ると，今年は南アルプス南部でも比較的雪が多いようだ．16時の天気図(2001年12月31日正午)によると，問題の低気圧は黄海の山東半島沖にあり，東へ35キロで進んでいる．この調子では，明日の昼，日本海の新潟沖に達する見込みなので，南アルプス方面は午前中くらいまでは持つのではないかと予想する．

1/1 **晴れのち雪 榎島** 6:25 - 7:31 1405m **標石** 7:45 - 8:42 1700m 9:01(出発後すぐに林道跡) - 10:06 R 10:29 - 11:18 R ? - 13:31 R 13:45 - 14:10 **赤石小屋(幕)**

朝の高層天気図(2001年12月31日21時現在)によれば、中国東北部から黄海、揚子江付近にかけて上空の気圧の谷が伸びており、その後ろには氷点下35度の寒気が流れ込んできている。ただし今のところは晴れており、予想通りである。何とか明日までもってこれればいいのだが...無理な期待を抱きつつ、なんともいえない不安感とともに出発。登るにつれて赤石沢の上流方面が見えるようになる。その上空、鉛色の空の下に赤石岳が望める。白峰南嶺の向こうから、遅い御来光を拝むころには、全天が薄灰色に覆われ、天候悪化を物語っていた。

1880mの林道跡のあたりからいよいよ雪の量が増してくる。それでも、悪沢、千枚岳や、転付峠方面の展望に助けられながら急な道を登っていく。天気、大丈夫なのかも...。振り返れば富士山にはレンズ雲がかかっており、やはり悪転の兆しだ。道にはばっちりとトレースが付いているので、順調に進む。

赤石小屋では明日の停滞を覚悟していたので、冬季小屋の混雑を予想し、夏のテン場わきの樹林内にテントを設営。気温はさほど寒くない。エスパース本体のみでは解けた雪が染み込んでくるので、フライをつけた。今後の行動について、シッポ巻き論からいけいけ論に分かれて、いろいろなパターンを議論(?)する。南アルプスの天候は、冬型初期には崩れるが、北アなどと比べて早くから回復する。中庸なラインは明日停滞、悪沢への縦走は止めてあさって赤石アタックというところか。

1/2 **早朝晴れのち雪 赤石小屋** 6:55 - **富士見平** - 9:16 2769m **ピーク** 9:36 - 11:26 **ラクダの背岩場手前**(2.5万図の2950m **ピーク?**) **引き返し** 11:41 - 12:35 R 12:46 - 14:28 **赤石小屋**

今朝も気温は高めである。テントから顔を出すと、なんと上空は晴れている。アタックを決定。しかし稜線は雲に覆われており、行けたところで眺望は望めまい。昨夜来の雪でトレースは半埋まり状態だが、さほどのラッセルではないと見込んで、わかんは1つだけにする事となった。準備しているうちに単独行の人に先に行かれたが、すぐに追いついてラッセルを交代。樹林の中、狭い尾根を登高してゆく。

再び尾根が広がってきて、樹林が疎らになってくる。ここまでテントを上げておけば、今日の行程1P分を得できる。しばらくすると、夏はハイマツで覆われている富士見平に着く。行く手ラクダの背方面は雪とガスにかすみ、全貌は見渡せない。そしてここより上は危険地帯であることを諭している。ときおり雲を通して日が射すが、天気が良くなるとは思えない。

ここから一気に雪が深くなる。再び林内に入るが、忠実に尾根上をたどる。急斜面では胸ラッセル。1つ目のピークを越えたコルでは夏道に一度合わさるが、すぐに右上へ分かれる。次は2769m ピークだ。この上で休憩。天候は悪化しており、これから大きく登るルートが雪雲に見え隠れする。急下降した鞍部にも小ピークがあり(2.5万図には書かれていない)、赤石沢北沢(南側)から吹き上げる風によって小雪庇ができています。いよいよ長い大きな登りになる。ラッセルは膝上くらいまでで、わかんを1つしか持って来なかったのは判断ミスであった。2850m付近は、無木立の比較的広い尾根である。ところによっては雪崩れてもおかしくない感じだ。風向きが北寄りに変わる。南風から北風に変わったのは、前線の通過だろうか、いや、もう通過しているはずだ。地形の影響かもしれない。次々とラッセルを交代して進む。

2950m 地点の小ピークに到達。この地点の前後で尾根は右にそして左に曲がる。尾根は、降りしきる雪の間に核心の岩場へと続いているのがわかる。この岩場は、2.5万図では富士見平から4つ目の登りの地点と思われる。この時点で時刻は11:30。これ以上の前進は危険である。ここはテント設営も1-2張りならば可能の広さである。晴れさえしていれば、この場所はラクダの背の岩場を真正面に見るピークで、確実に登頂を目指すなら、ここをベースにアタックというのでもできるだろう。難点は、好天なら人通りが結構あるだろうということ、悪天なら完全の吹きさらしのピークであるということだ。

ちょっと悔しいが、不思議と満足した気分下山にかかる。この積雪のなかまですまずの天候判断で、よくやったと思う。再度書くが、わかん1つというのが大失敗ではあったが、いずれにしろ、これ以上つっこんだらほんとうに危険。

行きでつけたトレースはすでにほとんど埋まっている。ときおり後ろを振り返り、景色を確かめながら下っていく。下りといっても決して早いペースは出ない。登り返しも数ヶ所ある。2769m ピークの下りは、いちど平坦なヤセ尾根となってそれを直進するとルートはずしてしまいますので注意が必要だ。平坦になって20mほど進んだところから斜め右下へ樹林の中を強引に下ると、すぐにロープで示された夏道の小コルに着く。もしも下りが続くようならルーファイミスである。もうひとつピークを越えて富士見平へ、とりあえずは安全地帯に戻ってきたといえるだろう。赤石小屋ではテントを冬季小屋内に移して小屋テンとする。先の単独行の人がいるだけで、小屋内はがらんとしている。やはり小屋テンは楽で快適だ。

16時放送の気象通報では、新潟沖に小さな低気圧があり、今日の弱風とわずかな日差しは、擬似晴天だったのかもしれない。この低気圧がぬければ冬型はますます強まると思われ、明日の下山は確実だ。



吹雪の赤石東尾根

1/3 雪のち曇り(稜線は雪?) 赤石小屋 6:50 - 7:55 R 8:09 - 9:02 1880m 林道跡 9:10 - 10:39 牛首峠 11:02 - 11:58 赤石渡 12:10 - 13:06 中の宿 13:20 - 14:27 畑薙大吊橋 14:50 - 15:20 沼平

予想通りの天気である。昨日よりも悪い。だがしかし! 下山開始後 1 時間ほどで雲に切れ目ができ、日が射した。聖岳方面の稜線が見え隠れしつつある。あーまたいつものパターンだー、と思わされたが今回は違った。我々の天候判断が正しかった。牛首峠からも赤石は見えなかった。時おり日も射すが、稜線から舞ってくる綿が、気象に関するステップアップへのご褒美のような気持ちで、畑薙ダム目指して最後の道のりを歩いていった。来年、また来るときには笑ってくれよ...

## 0127 八ヶ岳/VR：赤岳南峰リッジ

日程：2002.1.12～14 参加者：尾崎，他4

1/12 快晴 美濃戸 13:05 - 16:01 行者小屋

美濃戸には車で昼過ぎに到着し、南沢の道を3時間ほどで行者小屋に到着。

1/13 晴 行者小屋 6:00 - 6:58 文三郎道南峰リッジ取り付き点下 - 8:28 赤岳 8:55 - 10:10 石尊峰  
10:30? - 横岳 - 11:13 硫黄小屋 11:25 - 赤岳鉱泉 - 13:40 行者小屋

暗いうちから懐電つけて文三郎道を登る。

左下方に赤岳主稜の取り付き点を見下ろした後、阿弥陀岳からの道と合流する少し前の地点からハイマツの斜面に入り、南峰リッジに取り付く。右上方、南峰リッジ末端の岩壁が立ちはだかるのを巻き、小リッジに上がる。傾斜はさほどきつくないものの、岩場がもろい上、手袋、アイゼンでの登攀に慣れない身にとっては結構つらい。しばらく行くと右へ凹角を登り、そこを抜けて再び直上する。傾斜がきつくなり、残置ハーケンも認められる。前を行く新津さんとの距離が開いてしまう。もろい岩に薄く雪と氷がかぶっており、一步一步を確実に決めないと不安だ。ダブルアックスの有効性を感じた。

急傾斜帯を抜けると左へトラバース気味に進み、ルンゼ状になる。下からの踏み跡もある。南峰リッジ中央稜からルンゼルートに入ったのだろう。ちょうど無線の交信時間だ。2-3mほどの滝が現れ、左側はホールドが乏しいものの、菅原さんはすいすいといつの間にか越えていってしまう。後続は乗越すのに少々苦戦した。目いっぱい手を伸ばし、右の凹角から越える。落石しやすい急斜面を慎重に登り、再びリッジ状となり、すぐに赤岳頂上となる。

頂上で時間が早いので横岳へ縦走することに決定。上層には薄雲が見られるものの、展望は良い。北アルプスの右手には、頸城方面の山々が、さらにその右方向に上信越国境。どれが何山かわからないこの山域がなんとなく気になる。

さて、縦走を決めたからにはそうのんびりしてはいられない。地藏尾根経由の人たちが続々と登ってくる中、慎重に下降する。日ノ岳の登りは案外長い。この南向きカーブ状の斜面は一枚岩で、雪崩事故も起きているらしい。鋒岳を巻き石尊峰で休憩。東面の日向は暑い、日陰に入ると西風を浴びて寒い。

赤岩の頭の下りは雪崩れそうで気持ち悪かった記憶があるが、弱層テストを行い、まったく問題のない状態に安心する。さて次の問題は中山峠の登り返しだ(笑)。それでも14時前には行者小屋に帰幕する。

南ア、中アはもちろん、御岳から白馬、剣まで見渡す限りの雪山風景のもと、バリエーション+縦走という贅沢な一日に満足。急いで撤収し、美濃戸へ向けて飛ばす。雪の斜面は靴で滑り降り、1時間半で美濃戸口に到着してしまう。



## 0129 南アルプス/VR：富士川源流～鋸岳 2600m 三角点ピーク

日程：2002.2.9～11 参加者：尾崎，他3

2/9：ゲート 10:25 - 11:23 小屋岩 11:35 - 12:45 悪沢出合上部 13:00 - 14:11 休憩 - 15:40 ころ  
1700M 付近(幕)

富士川の源流に向かって入れるところまで車で進み，ゲートから歩き出す．始めのころは 2 万 5 千円上で位置がわからず，落ち着かない．歩くうちに，風景からしてゲートのある地点は，まだ「甲斐駒ヶ岳」には入っていないようだった．地図にない，大きく新しい堰堤をいくつも見送り，約 2 時間半で林道終点に達する．甲斐の名将武田信玄に，「水を治める者国を治める」と言わせた(と思う)この急流釜無川は，源流地帯が砂防ダム群によってみごとに破壊されていた．斜面には伐採跡地も見られ，日本という国の，治山行政の貧困さに悲しみと怒りを感じざるを得ない．

林道終点からは，右岸，左岸と渡渉をしながら進むが，ここはある程度強引でも，左岸沿いを進むべきだった．渡渉点では踏み抜いて足を水に浸してしまう．左岸の造林小屋を見送り，いよいよ傾斜が出てくるころ，前方に横岳峠を望む．しかし完璧なもなか雪に阻まれ，われわれの行動は遅々としてはかどらない．

造林小屋から左岸沿いに，もなかラッセルを続け，1 時間くらい進む．3 時半ころになり，そろそろ時間が気になりだす．1 時間くらい歩いたので，休憩がてら先を偵察する．地図からは標高 1750m 付近と読み，すぐに沢筋は大きな二またとなっている．一段登った左俣方向には富士川源流の道標がある．ここより上は急傾斜で，幕営に適したところはなさそうだ．斜面の雪を掘って片方に積み上げるといふ，大規模な整地をして，テントを張る．入ってしまえば快適なテン場だ．明日の行動について検討し，全部背負って行けるところまで，三角点ピークを目標とする．

2/10：発 5:43 - 6:47 1880M 台地 7:00 - 8:41 横岳峠上部 9:00 - 10:25 2300M - 11:45 休憩 - 13:50  
三角点ピーク 14:00 - 15:17 横岳峠上部 - 16:15 1880M 台地(幕)

暗いうちから歩き始める．昨日のトレースをたどり，すぐに急傾斜になる．富士川源流の道標にしたがって登るがすぐに倒木などでわからなくなり，適当に尾根上を登高する．積雪はこのあたりは少ない．1 時間登ると地図で見た以上に広々とした台地に出て，休憩．この時点で鋸縦走はほぼ無理なので，帰りはここで幕営がよさそうだ．

ここから再び激しいもなか雪のラッセルとなり，5-10cm 程度の厚さで小規模表層雪崩が頻発する．横岳峠までも一苦労のラッセルだ．峠からは仙丈方面の展望はない．そのまま斜面に取り付く．地図を見れば見るほど，行く手の急で長い尾根，むしろ尾根というよりも長大な斜面の登行に嫌気がさす．それでも数回の休憩をはさみ，もくもくとラッセルして着実に高度を上げる．途中から小雪が舞いはじめ，風も強まる．12 時の前の気象情報ではこれから冬型が強まるようだ．

向こうの山稜が見え始めたピーク肩で荷を下ろし、空身になって往復とする。14:00 前に三角点ピーク着。ガスの向こうに鋸第1 高点がそびえている。けっこう悪そうである。下りの速さはいうまでもなく、一気に横岳峠上部へ。1 回休んで 1880m 台地まで下り、快適に幕営する。計画完遂はならなかったものの、このラッセルでは仕方ないと、とくに不満はなかった。

2/11 : 発 7:00 - 8:45 悪沢出合上部 9:00 - 10:28 ゲート

今日は下るだけなので、ゆっくり出発。登りのときは苦労した道も、一気に下ってゆく。初日のテン場を過ぎてから、川の渡渉を避けるため、左岸沿いを進む。林道末端からは途中の枝沢の氷で遊んだりしながら行く。あとは最終モードでピッチも上がり、休まずにゲートまで歩いた。

---

## 0133 上越/ST : 巻機山ヘリスキー

日程 : 2002.3.24 参加者 : 吉田(慎), 大石, 山野, 青谷, 尾崎

---

巻機山を頂上から滑るといのは、山スキーを経験したものなら誰でも興味のあるところだ。

地元の人からヘリスキーの話があり、歩いて登っても行こうかと思っていた矢先でもあり、参加することにしました。早速、山野会長に相談したところ、ヘリ組と若手の徒歩組とで、頂上で合流というのはどうか、という案が出たりしましたが、結局ヘリ組だけになってしまいました。

前日の 23 日(土)昼頃、越後湯沢に着くのは勿体ないから、近くの日白山へ足慣らしに行きませんかという、尾崎君の誘いに乗って、お昼に駅で待ち合わせたが、土砂降りの雨で戦意喪失し、中止となりました。東谷山・日白山は 3 時間程度の山スキーコースで半日の足慣らしにはなかなかよさそうです。夕刻には、石打のマンションに全員集合し、久しぶりの楽しい時間でした。ただ夜通しの雨で明日の天気には絶望的に感じながらの夜でした。

朝 6 時に起きると何とか雨は上がったものの、雲は厚くいやな天気でした。ヘリが飛ぶかどうか、難しいとは思いつつとにかく清水まで行ってみようと、7 時 30 分ごろ出発しました。国道沿いの仮設のヘリポートには既に大勢の人が集まっていました。みるみる雲も切れて、晴れ間も覗いてきており、ヘリも飛べそうになってきました。予定より大分遅くなりましたが、10 時ごろの便で頂上へ、わずか 8 分の飛行です。その頃には今までの天気が嘘のような、快晴・ピーカンまさに春山となりました。

頂上の雪景色は 360° 素晴らしく、あまりのあっけない頂上で降りるのが勿体なくなり、頂上

直下の滑降を楽しんで、二俣からシールで、又、頂上まで登り返しました。頂上から標高にして300m程度は、雪質も極めて良くご機嫌の山スキーでした。しかし、上であまりゆっくりしていたのが後になって苦勞することとなりました。標高1300mより下の、所謂井戸の壁は細いブナの二次林が密集していて、傾斜もきつく、とても滑りにくく危険な所です。前日来の大雨、又、急な快晴と日射によって雪はベチャ、ベチャの最悪の状態でした。3時半ごろ、標高750mのヘリポートに着いたときは、足腰がガクガクになっていました。降りるだけでこんなに疲れるのかと自信を失っていたところ、エースの尾崎君も、疲れた、足腰がガタガタですと、言っていたので安心しました。

(吉田 慎 記)



いよいよヘリコプター搭乗だ

## 2002 年度

### 2002 年度役員

会長	山野 裕
チーフリーダー	上野 午良
学生リーダー	尾崎 宏和
会計	山田 裕久
記録・会報	高橋 寛和
	清野 尚史
装備	尾崎 宏和
	灘吉 聡
西高係	佐藤 正明
	田中 浩平
	松長 麻美
ホームページ係	灘吉 聡
超OB係	林 武志
都岳連関係	上野 午良

## 0201 南八ヶ岳/VR：赤岳天狗尾根

日程：2002.4.13～14 参加者：尾崎，他1名

4/12

前夜発にて美しの森駐車場へ。八王子を0時過ぎに出て、清里で時間もかまわずコンビニを探して酒を調達したりするので遅くなる。

4/13 美しの森 8:25-10:15 出合小屋 10:35-14:21 カニのハサミ手前

稜線はまだ冬のあらしが支配しているようだ。下界の天気はいい。眠い体を強引に、いや、だましまし出発するが、本当に眠くてつらい。昨日だけでなく、日ごろの睡眠不足の蓄積が効いているようだ。反省。

1時間ほどで地獄谷の川原へ、そこから堰堤をいくつも越えていく。意外と雪が多い。木曜の晩、東京の雨はこちらでは雪だったようだ。出合小屋には思ったよりも早く到着し、水を汲んでのんびり休憩。今日は2人とも寝不足でピッチが上がらない。

すぐに左岸から赤岳沢が合わさる。この辺りは旭東稜やツルネ東稜など、いろいろなルートの取り付き点があり、ちょっとしたルーフアイが必要かも知れない。しかし、天狗尾根の取り付きは、さすがに入山者が多いのか、「赤岳沢」の道標が立っており、容易だ。赤岳沢に入り5分ほど歩くと明瞭な切れ込みが右岸に降りてくるのでこれを詰める。赤布あり。すぐに尾根上に上がり、少しの間笹藪をこぐ。ときおり平坦地や露岩の現れる尾根を登高する。一ヶ所樹林が切れて前方の展望が開け、行く手の尾根がよく見える。カニのハサミが森の上に小さく見え、その上に大天狗の岩稜帯がけっこう近く感じられる。だがよく見ると、手前の岩稜が奥の大天狗に重なって近く見えていることがわかる。

地面が凍ってその上に新雪が積もりいやらしい。大きく滑ったのでアイゼンをつける。カニのハサミ上部の1つ目の岩壁の上にある緩傾斜帯で泊まるつもりだったので、ハーネスも装着。だがこのころから風雪が強まってくる。針葉樹林帯を急登し、カニのハサミ直下で森林限界を迎える。かなり風が強く、2人とも、これ以上進むのは見合わせたほうがいいという意見で、早々と幕営態勢に入る。樹林の切れ目には、いかにもテン場跡という平地があるが、風当たりが強そうだ。カゲ沢下降点とのマーキングもある。赤岳沢側の樹林内の斜面を切り崩し、テントを張る。

外は吹雪だが、設営場所が良く、テント自体には強くは当たらなかった。天気予報によれば、今夜は一時的に寒気が入って荒れるが、明日は全国的に好天に恵まれるらしい。安心してぐっすり眠る。

4/14 発 5:40 7:15 第1 岩壁の上 7:28 10:05 大天狗・小天狗鞍部 10:17 11:20 赤岳 11:36  
15:01 牛首山 15:20 18:10 美しの森

朝起きたが相変わらず眠い。飯食った後ザックにもたれて少しだけ寝る(反則!?)。何はともあれ外に出れば、快晴の空に嬉しさと共に気が引き締まる。

カニのハサミを左から巻くが、1歩、少しバランスを要する。こんなだったけ?と前の記憶を思い起こすが思い出せない。一段登ったところから下部の岩壁が始まる。松本さんリードで進む。ピレイ点は左下の小さな木で、これは記憶にある。バンドをまっすぐ左上し、草付きになったところで右へ、そこからほとんど直上する。ピレイ点からはちょうど陰になっているが、どうも苦労しているようだ。1999年にここへ来たときは、バンドは3-4mだけ左上し、すぐに右へ入ってフェースを直上した。その時は見た目よりも簡単だったが、今回のルートはフォローで登っても難しかった。右折した後の草付き帯は途中かぶり気味で、ピッケルのピックに頼ってしまう。ピッケルが邪魔になると思うとすぐにまた欲しくなり、ハーネスのホルダーからの出し入れが煩わしい。ピッケルやパイルの出し入れは案外難しく、今後の課題だろう。終了点は太く立派な枝があり、安心できる。

この上には右手に緩斜面が広がっており、元の計画では3年前と同じくここで泊まるつもりだった。向こうには赤岳が高い。いったん休憩し、すぐに次の岩稜帯に取り付く。ここは左からも巻けるが稜線沿いも容易であり、天気さえよければこちら稜上のほうが快適だろう。さらに岩稜帯をまったく問題なく進み、小ピークを右から巻くと、目の前にいよいよ大天狗が迫ってくる。といっても基部まではまだ少しあり、ハイマツの生えた急な一段を右から登る。右側に巻き道が分かれるが、一番高いところを大天狗に向けて登る。

いよいよ大天狗の岩場真下に至る。左側は地獄谷に向けて切れ落ちている。大天狗左壁にもルートがあり、ここは3年前に、すごい高度感と冷たい岩に敗退して巻いた。今回はあらかじめよく岩を観察すると、なるほど既報のように右側から登れそうだ。その左壁のすぐ右側はかぶり気味だがその上には残置が見える。取り付いてみたが難しいのでさらに4mほど右へ。だがここもけっこうハング気味である。左上の岩角にシュリングを引っ掛けて気持ちばかりの中間とし、抜けそうなハーケンに中間+A0、そしてさらに微妙なバランスで一段上がったところ(ここまでが2段ともかぶり気味で自分のレベルでは難しい、途中で手袋を薄い軍手に変える)から容易に左上へトラバースする。真新しいハーケンに中間を取り、また次にピンク色の残置シュリングに中間。つぎに一段直上し、頂稜へ出て一気に北風を浴びる。あおられること無いよう、最後を慎重に右へ、5-6mのところまで頂上となる。支点は豊岡君の通り1つ。登った向きが左右へ蛇行してしまっただけで、ザイルの引き上げが非常に重い。下降はザイル2本をつないで懸垂する。右下のハイマツ帯までなら1本でも間に合うと思う。

大天狗を越すルートは、インターネットの記録文など見て推測するに、今回のルートのほかに、最左端(高度感抜群)、もっと右から右肩へのルート、巻道、というように、今回我々が取ったルートを含めて少なくとも4つがあるように思える。何はともあれ今回登ったルートは自分には厳しかった。

小天狗を急登しながら巻き、最後の雪稜を慎重にやり過ごし、まだかまだかと思いながら赤岳

頂上へ達する。竜頭峰直下では中岳のコルを越してきたのと、立場川を吹き上げてきたのが合流するのか、西風が非常に強い。

下山は真教寺尾根。難場を越え、明るい春の日差しに安堵しつつも、上部ではスタックで慎重に行く。左手には県界尾根が大きく、よく見るとその手前に赤岳東稜が美しい雪稜を描いている。見る限り、赤岳東稜は上部岩壁の巻きが急で難しそうだ。まるでゴールデンウィークのような陽気。午後の日差しにアイゼンダンゴが付きまくる。アイゼンをはずし、あとは淡々と下っていく。頂上がどんどん遠くなっていく。それにしても、赤岳東面を登るときは、つねに頂上小屋を見上げながらになるようで、どうしようもないにしてもそればかりは何とかならないものだろうか。

八ヶ岳の裾野は広く穏やかな斜面で、雪が消えてからも足にやさしい。充実感に浸りながら、尾根筋を忠実にたどって行く。美しの森頂上、山麓の春風がやわらかい。残照に浮かぶ山稜を振り返り、私の4月山行は幕を閉じる。

---

## 秋川流域の沢めぐり

青谷 知己

---

### 2002. 5. 2 盆堀川 千ヶ沢 石津窪 (青谷)

盆堀川シリーズのフィナーレ。1ランク上の沢で、単独だけにやや緊張して臨む。車で進んでいくと、採石場を右手に見て右にジャリ道の林道を分けるがここが入り口。最初はでこぼこで車が入れるか心配するが、中は比較的平たんで乗り入れていける。車止めより、沢筋にヤマメの姿を気にかけて林道をたどると、明りょうな踏跡が石津窪に導いてくれる。大滝までは、適度に滝場が続くが、思ったほど悪くない。大滝は25mで立派、やはり左に屈曲するときに滝がかかっている。ここも単独のため、右から高まると、このあとも滝がかかり、面白い。がほどなく、終了点。1時間強の沢筋だが、すっきりしていて盆堀川流域では、一番だと思う。

終了点からはすぐ小尾根にあがり、そのままたどれば縦走路に導かれる。市道山に無理なくつながられるのもいい。人気のない市道山でのんびりした後、千ヶ沢沿いの道を急下降する。千ヶ沢の中流を大きく巻く地点で、三ツ釜の滝を見る。手強そうだが登ってみると面白いかもしれない。

踏み後もしっかりしてきて、ほどなく林道に出る。しばらくたどれば車を止めた地点に出る。

## 0208 足尾・日光/WC: 片品川平川大岩沢

日程: 2002.7.20~21 参加者: 加藤 高橋 尾崎

## 7/20 奈良-平滝-14:10 入渓点 14:35-16:38 広川原

沼田でのタクシー拾いに失敗し、1時間のロス。しかし、奈良の先のゲートまで入ったおかげで2時間強で平滝に着く。林道とはいえ樹林の中を快調に進んだ。意外にも、旧林業飯場跡は地元人の避暑地(!?)となっている。幅広い平滝は豊富な水量を豪快に落としている。滝の上で入渓点を探すのがすぐ上流の堰堤を越すのが面倒そうなので、戻ってもう少し林道を進むことにする。

進むほどに林道は高度を増していく。この辺は林道が最近伸びたのか、ガードレールもピカピカなのが現れ、頭上を覆う樹林はない。ついにはるか下方に川原を見下ろし、前方には緑深い足尾の山々を展望するようになってしまう。少しだけ下り気味になり、横切ったガレ沢から川床へ下る。

いよいよ溯行開始である。といっても沢歩きで、ハーネスはつけない。とてもとても美しいナメがじゃんじゃんと現れる。さながら釜の沢の千丈のナメが、小刻みに延延と続いているようだ。本家 千丈のナメは黒っぽい岩なのに対し、こちらは明るい乳白色の岩床で、木々の緑がとろけ流れる。時折現れる釜とゴルジュも難なく順調に進む。湯ノ沢出合も両門のナメとトロである。

2時間ほどで広川原へ着く。ス沢出合の対岸あたりに快適で絶対安全保障つきのテン場を発見。明日の行程を考え、もう少し行こうと進むが、この先適地もなさそうなので元へ戻って幕営する。暑さのせいが行動以上に疲れ、眠いし、夕刻でも暑ので、焚き火もせずに早々に寝る。

## 7/21 発 5:50-10:48 県界尾根-11:35 ネギトのコル(宿堂坊山往復)12:40-15:30 西ノ湖入口バス停

明るくなると同時に出発する。すぐに本流は左折する。正面の支流には立派な多段幅広の30m滝が豪快だ。本流のほうはさえない雰囲気であるが、すぐに溪相は明るくなる。今日も美しいナメが断続し、全く困難の無い沢歩きである。

左からぼこぼこ多量の湧水を吐き出した滝が現れる。とにかく水が豊富で森は深い。この辺から穏やかな溪相も一変する。宿堂沢出合上の20m滝右壁を越える。念のためザイルを使用するが、中間は全く取れない。宿堂沢出合からはほどよく登れる滝が連続する。息つくまもなく滝が連続し、もう詳しいことは覚えていない。どれもがっちり直登可能だ。ついに30m大滝まで来ると、さすがに黒い岩が今までとは様相を異にして前方を阻む。インターネットの記録では左岸を苦労して大高巻きしているが、「上信越の谷105ルート」から判断するに比較的容易に登れそう。最初の冷たい水流はちょっとつらいが、それを越えれば階段状の右壁を直登できる。ノーザイルで難無い。続く4段の滝からは再び白い岩と明るい沢に戻って快適に行く。

やがてガレ気味となり兩岸からザレも押し出している。枝沢を右に分け源頭を迎える。わずかの詰めで尾根上に出る。



ここからは、思っていたより明瞭な踏み跡をたどって 30 分ほど登ると主稜線に着く。マーキングべった打ちの稜線を南東に進む。踏み跡も一部を除いて比較的しっかりしているが、右へ急下降する地点と左へ下る地点は要注意だ。後者は笹原の中でとくにわかりにくい。目標の宿堂防山がとても大きく見え、登り返しは時間がかかりそうだ。

ネギトのコルからは、空身に気を取り直して頂上へ向かう。ものの 15 分もせずに到着した。水場さえあれば幕営にとっても快適そうな頂上だ。

ネギト沢の下降はザイルも使わない。1ヶ所、左岸から巻くがあとはほとんど水流沿い。林道横断あとを過ぎ、堰堤のところから右の林道跡へ上がってそれを行く。下方には難しそうなトイ状の滝が見えた。道なりに行くと柳沢渡渉点に着き、溯下降は無事終了。林道を 30 分ばかりで西ノ湖方面からの T 字路へ合流し、左折するとシャトルバスの停留場に着く。日光に出て計画は完了した。

## 0209 南アルプス/RC : 北岳バットレス D ガリー奥壁

参加者 : 2002.7.27~28 参加者 : 尾崎, 他 3 名

## 7/27 広河原 11:10 - 13:30 白根お池

甲府 9 時のバスを逃しタクシーで広河原へ。途中のトンネルや鷲ノ住山下降点など冬山を思い出す。

ド快晴の北岳山麓は夏山シーズン真っ盛り。中高年グループが大挙して下山してくる、登っていく... 広河原といえばしとしと雨が降り、夏とはいっても寒いイメージしかなかったが、今日は、胸を張った北岳が頭上に輝いている。

樹林に入れば風は心地よく、道は急だがまずまずのペースで登っていく。トラバース道になってから水場を横切り、ほどなくして白根お池小屋に到着。鈴木恒氏、本郷氏、桑野夫妻と合流する。

7/28 発 1:50-2:55 バットレス沢-3:50 D ガリー取付 4:35-10:25 四尾根終了点-11:05 北岳  
11:23...広河原

起床はなんと午前 1 時半。月明かりに励まされ、2 時前に出発する。大樺沢二俣の次の次、水流のある沢がバットレス沢で、休憩の後、右岸のはっきりした踏み跡をたどる。しばらくはブッシュがうるさいが、やがて左右ともガレの押し出しのようになると、不気味に輝くバットレスがいよいよ立ち塞がってくる。このときばかりは岩壁が、月に照らされ悪魔の城のような黒光りを見せる。

岩壁基部を左にトラバースしていく。すぐ下には雪渓がシュルンドとなっている。ほのかに白んできたのを頼りにして、取り付き点までバンド状を慎重にトラバースすると、顕著な窪みが D ガリーである。その下で登攀準備を最終的に確認する。

ここからは、ガリー左手の小尾根に回りこみ、すぐに下部岩壁 1P 目が始まる。傾斜はさほどではないが、さすがに初めての本ちゃんであり、朝一のピッチとあって少し緊張する。私は北村さんとのペアで最後尾をツルベで登ったが、この岩壁 2P は全く難なく通過する。少し歩くとガリー内部をザイル確保で行くようになる。ほとんどザイル不要の 2P をすぎると、ガリーというよりスラブ状となって開け、これまでよりも少し難しくなる。ザイルは無くても行けそうだが、さすがにここは出すべき所。もしも落ちたらかなり下まで転げ落ちてしまいそうだ。頭上右手には 4 尾根が爽快なスカイラインを描き、マッチ箱手前を登るクライマーの姿が夏空に映える。正面にはいよいよ核心の四段ハングが迫り来る。

再びスラブ状が狭まってくると、ついに四段ハングの下に着く。正直書くと、それがまさに四段ハングとは気づかなかった。想像していたよりも小さいし、すぐ右から行けばわざわざハングを登ることもあるまいと思ってしまう自分は岩登り向きではない証拠か... とにかくここまでは

難無く来た。といってもここまではアプローチ。何はともあれ過剰な緊張もなく、池山吊尾根を眺めながら長めに休憩する。大樺沢から八本歯のコル経由の一般道は混雑しているようだ。一方、冬のメインルートである池山吊尾根は人影すら認められない。

いよいよDガリー奥壁へ突入する。中澤さん先頭に、基本的にツルベで行く。自分が最後の一人になった瞬間は、ちょっと取り残された感もあるが、上へ続く9mmダブルは心強い。1段目は、右足を大きく上げ、あとは腕力で越える。2段目は容易。3段目は高度感も出てきて案外怖かった。左に一段乗り、それを足がかりに突破する。次の4段目が 級とのことだが、快適に越していく。

次のピッチ、明瞭なクラックが右上へ走っており、それほど難しそうではない。だがクラックへうまい具合に足が入らず、思ったよりも緊張する。むしろ四段ハングよりも難しいかも知れない。ちょっと自信過剰になっていたようだ。この2Pはフリーで鍛えた北村さんがリードしたが、ここからは完全にツルベとなる。草付きを過ぎ、すぐ右はもう四尾根の枯れ木テラスに近い。城塞ハングを間近に望むスラブを快適に越え、チムニーを抜けると四尾根に合流。最後のピッチはまったく容易なボコボコ岩の上を息を切らせて歩き、無事終了点に達する。10時半。正面右には中央稜のハング帯が見渡せ、その突端が北岳山頂である。絶好の登山日和に誘われて、すでに人の姿がたくさん見える。

さて、ギア類をザックにしまい、ハアハアいいながら踏み跡をたどると、20分もせずに頂上の南側の登山道に合流。一投足で大混雑の頂上に着く。

下山は草すべり経由で白根お池に戻る。非常に快適な山行だった。

## 0210 夏山合宿 朝日連峰/WC :

## 荒川角檜沢下の沢～祝瓶山～大朝日岳～竜門山～日暮沢

日程：2002.8.15 ~8.18 参加者：山野，加藤，上野，尾崎，島田，鈴木

毎度のごとく行き先の選定には迷ったが，結局今年も東北となり，縦走できる大きめの山，しかも手ごろなレベルの沢を登ってということで，朝日連峰の角檜沢遡行となった。

8/14～8/15 上野 19:44==黒磯==福島(駅寝)

山野さんと学生連中3人は，前夜上野を出発し，黒磯の先で駅寝の予定．黒磯から先は大雨で列車が6時間以上止まっていたらしく，仙台行きが待っていた．1時間以上待たされ，夜行列車状態で福島には午前3時過ぎに到着．駅前に銀マットを広げて寝る．翌朝奥羽線，米坂線と乗り継いで行く．昼前に小国で全員合流する．

8/15 福島=米沢=小国=大石橋 13:07 14:02 角檜沢出合の川原 14:20-16:00 下の沢出合

小国駅で加藤先輩，上野先輩と落ち合う．大石橋までタクシー．そこからすぐにつり橋を渡って左岸に行く．あたりは見渡す限りのぶなの大木である．その後，いかにも朝日という感じのスリリングなワイヤー吊り橋を渡り，3回目のところで角檜沢が合流する．すぐ上には角檜小屋の屋根が見えた．

入渓点で飲んだ水はとても甘くておいしい．ふくよかなぶなの恵み．天気は霧雨が降ったりやんだり，いっこうに晴れる気配はないが，沢仕度を整え気を取り直して出発する．

最初のうちはなんでもない遡行だが，しばらくすると深い釜がじゃんじゃん出てくる．どれも高巻きできそうになく，胸くらいまで浸かってガシガシと突破していく．そのほうがずっと早いし安全だ．1ヶ所，どうにも足が届かず2-3m程度の泳ぎとなる．すぐ上が狭いので，もろに水流を受けながらもがくと対岸に足が届き無事に上がることができた．

その後も深い釜やシャワークライムがどしどしと連続する．やがて左からトイ状の4m滝を合わせ，次に右から顕著な支流を迎える．正面の本流は簡単なゴルジュとなっており，時間的にも地形的にも下の沢だろうと，皆，半信半疑ながら判断する．資料によれば，幕営可能なのはこの二俣近辺のみとのことであるが，見た目全く幕営できそうにない．しかし時間的にもそろそろ泊まりとしたいところだ．本流，下の沢ともに先を偵察するが無理そうなので，少し戻ってトイ状4m滝手前の川原とする．右岸上部には平地もあり，エスケープも可能だ．

幕営作業中に雨が降り始める．たいした大雨ではないが濡れるのでテント内で夕飯を食べている時，ふと外を見れば張り綱が水没し，かなり増水している．そんなに集水域広くないだろ！とにかく大慌てで荷物をまとめ，上部の平地に逃げ込む．そこはじゅうぶんにテント設営が可能で，初めからここにしておくべきだった．あらかじめエスケープ用としてザイルを張っておいたのは良かったが，今回は明らかに判断ミスといえよう．反省...

8/16 発6:00-R-9:04 30m ナメ滝下-11:56 R-14:00 R-16:00 終了点-祝瓶山 16:50-18:27 幕

下の沢に入ると深い釜こそ少なくなったが、相変わらず流れはあなどれない。しばらく行くとちょっとした釜を持つ狭い滝の向こうに10mの直瀑が立ち塞がる。真下まで行ってみるが登れそうにないので手前左側を探るが、けっこう傾斜のきつい岩肌だ。さらに狭い滝を降りて、右岸のヤブ斜面を登っていく。巻くべき滝はかなり右方向に離れていく感じであるが、滝上方にあるブナ(ナラ?)のテラスをめざし、同じくらいの高さになってからトラバースしていく。テラスからは懸垂なしで沢身へ下降が可能だった。

その後は少しのスリルが適度な滝登りと、ファイト一発!!の小ゴルジュ突破で、行程を稼いでいく。10m滝は下部は左壁を容易に登り、上部はへつりの後に流れを越えて左岸に移る。このへつりはザイル無しでも行けるがいちおう使った。溪相は変わらず滝と小ゴルジュが続くが、やがて沢身が開け、明るいナメが出てくるところで休憩。この前後で前方が大きく開け、正面に大きく高く稜線が見え始める。あいにく今日はガスが多く時おり小雨もぱらつくが、気になるほどではない。正面は三方ともスラブに囲まれ、なるほど昨日の増水が頷ける。その後快適な沢歩き少しで30mのナメ滝に達する。ここは念のためザイルを出して、左側を登る。難しくはないが結果的にザイルを出して正解だった。



現役・山野会長(右端)、快適に進む

両岸はいつのまにか樹林から草地となって源頭の様相である。右の 3-4m ほどの岩棚から滝が宙空に落ちてくる。正面はすぐにヤブ山肌が迫っている。ガイドブックによると、本流はこのまま進み、すぐ奥右に落ちる滝であるらしく、左の窪は水量が多いが支流で、このあたりは最も間違えやすいところとのこと。しかし正面左の窪には水流はみられず、ガレた岩に伏流しているのかもしれない。この時点で正午すぎ。天気も相変わらずであり、雲が濃くなったり薄くなったり、降りてきたりまた上っていったりしている。

本流の右に曲がる滝は登ると下手をすれば進退窮まりそうで、ガイド通り左の窪から小尾根越えの高巻きに入る。ここは先ほどの岩棚滝あたりから、左岸の巻きも可能かもしれないが、急な草付きで、ヤブのあるこちらよりいやらしいかもしれない。

小尾根を乗り越えると、U字谷の中に水流部分がV字谷を成すというか、河岸段丘状の地形となり、トラバースですこしずつ流れに戻る。源頭間近に思われたが、この後ザイルの連続使用となる。7mの滝は、左右とも巻きは厳しい草付きで、滝そのものも登攀は困難となる。ここは上野氏が苦労しながらも左の草付きをリードし、滝上のスラブ状の流れにあった唯一の窪みに荷物を投げ、空身で降りた。ザイルを肩がらみで確保してもらい、後続は滝を直登する。不安な人は空身で登り、荷物はザイルをつけてゴボウの荷揚げをする。その後もスラブ状ナメ滝が連続し、念のため確保をした登りが続く。水が消え、左手の尾根筋後方に見下ろすようになると、左にルートを取り、登山道に出る。



下ノ沢源頭のスラブをバックに

夏の夕空が急速に広がり、流れるガスの向こうにまるで幻の山のごとく、祝瓶のピークが姿を現す。もう頂上はすぐそこと思っていた我々には、正直、あれは何だ？ という困惑を覚える。しかし荷物を持たずに道を行くのは気持ちよく、日本海から飯豊山地まで見える頂上で、遡行した角檜沢を見下ろし感慨に浸る。

上野先輩と山野さんはここから大石橋まで下山し、残る加藤先輩、島田、鈴木と尾崎で縦走路を進む。少々きつかったが1時間半ほどで野川の桑住平から登ってくる道との分岐点に着き、広い平地を得る。ここで幕営とする。

8/17 発 5:53-7:11 大玉山 7:40-8:58 1469m ピーク 9:35-10:28 平岩山 10:46-12:10 大朝日岳

山の夜霧は豊富に水を含み、葉面に付いた水滴は風に揺られて常にぼたぼたと落ちる。まるで雨のようであり、実際目の当たりにしてみると案外すごい現象だ。

加藤先輩はやはり祝瓶山経由で下山するとのことで3人で縦走を開始する。振り返る祝瓶山はピラミダルでかっこいい。大玉山を過ぎるころまでは晴れていたが、徐々に曇り空となる。途中、平岩山の手前で女性2人パーティと会うが、他は誰もいない。大朝日岳のテン場は金玉水わきは廃止されており、せっかく行ったのに戻るはめとなる。対岸の斜面にはのびやかな草原が広がり、夕日のプロッケンが見られるあの最高の幕営地はもう、立ち入り禁止なのだ。とはいえ、お花畑への踏み込みや排水の問題など、自然を蝕んでいたことも事実で、改めて、山登りと自然保護がある一側面において、矛盾するものであると感じさせられた。

8/18 発 4:38-5:56 西朝日岳 6:22-7:05 竜門山 7:22-8:23 清太岩山 9:11-10:11 R 10:25-11:15 日暮沢

快晴の朝を迎える。さすがの百名山だけあって人も多い。西朝日岳、竜門山と朝日連峰のスケールを感じながら縦走し、日暮沢に下降する。時間はじゅうぶんになり、途中長く休みながらいく。日暮沢からは、あらかじめ予約しておいた村営バスで月山銘水館という道の駅みたいな施設へ行き、風呂へ。鈴木君、島田君の参加で意味のあった今合宿もついに幕を迎えることとなる。

---

## 0216 奥秩父/WC：笛吹川東沢鶏冠谷左俣本谷

日程：2001. 9.22 参加者：尾崎，他1

---

北鎌尾根のプレ山行。登攀要素の強い沢ということで奥秩父東沢の鶏冠谷左俣本谷を選定。前夜発で西沢溪谷入り口まで。翌朝早朝歩き始めるが、通り慣れたこの道が思った以上に長く感じられる。

鶏冠谷に入ればすべての滝を直登。逆くの字滝も3度目。卒なくこなして右俣出合に至る。ここからいよいよ核心部である。とはいえ左俣も一の沢までは再訪だ。一の沢出合右上に掛かる3段15m滝は圧倒的雰囲気を持ち、通常は右手前から巻くらしい。だが、今回はすべての滝の直登がコンセプト。空はあいにく厚い雲に覆われ、水しぶきが霧雨のごとく落ちる、寒々とした滝壺から左壁に取り付く。最初以外はそれほどでもなく、スケール負けさえしなければ巻くこともないレベルだろう。左壁から左上し樹林でピッチを切る。続いてはトラバース状に落ち口へと抜ける。その後もなかなか登りごたえのある溪相で、あえて水流を登ればそこそそ難しい滝が続く。

われわれは最後の支流、四ノ沢に入ったのか、それとも四ノ沢自体は右から合わさるのか、よくわからぬまま左の階段状涸滝を右バンドから登った(「東京周辺の沢」の記録は、「奥秩父両神の谷100ルート」で示す四ノ沢へ入っている。インターネットのあるHPでは四ノ沢は右から合わさるとの記述)。

踏み跡をたどって鶏冠尾根に出れば、あとは一度の懸垂を交え下るのみ。鶏冠尾根といえど雨。今回もまた降られてしまったよ。



---

## 0217 北アルプス/VR：槍ヶ岳北鎌尾根

日程：2002.10.11 夜行～10.14 参加者：尾崎，他1名

---

### 行動概要

12日(土)6:10 中房温泉発，8:10 合戦小屋，9:05 燕山荘，12:20 大天井ヒュッテ，12:45 貧乏沢下り口，14:40 天上沢合流点，15:00 北鎌沢出合(幕)，18:00 就寝

13日(日)3:20 起床，4:50 出発，5:05 北鎌沢右俣左俣分岐，6:45 北鎌沢のコル，8:10 独標基部，9:30 独標，12:35 北鎌平，13:50 槍頂上，14:40 槍岳山荘，17:00 槍沢天場(幕)，20:30 就寝

14日(月)4:30 起床，6:15 出発，6:35 槍沢ロッジ，8:20 徳沢，9:35 上高地

### 10/11

急行アルプスの席を取るべく，早々と22時半頃新宿駅に向かうが，すでに人が多い。座席の確保はみごとに失敗し，満員で出発した。

### 10/12：快晴

穂高駅には4:50ごろ着く。バスに乗り継ぎ中房温泉へ。ロータリーが出来ていて，昔と少し雰囲気違って変な感じだ。夜行で非常に眠く，ところどころ居眠りしながら行くが，燕山荘までは3時間で登り，大天井ヒュッテまではさらに2時間強で行く。

貧乏沢の下りは分岐の指導標があるものの，はじめ少しだけヤブっぽい。右から顕著な窟を合わせると，ちょろちょろ水が流れ始める。所々，ガラガラの岩を落とさないよう慎重に行く必要がある。しかし基本的に靴を濡らすことなく，容易な下降だ。川原沿いに行きづまったら左岸1段上に踏み跡がある。貧乏沢下部と天上沢・貧乏沢合流点には水流が豊富だったが，北鎌沢出合の幕営地に水流は無い。15時着。

北鎌沢出合の右岸は，槍の穂先が北鎌支稜の上にちょうど見えて，なかなかいいロケーション。槍の穂先から斜め上へ，空を区切る光幕が大自然の不可思議を感じさせ，明日への期待を膨らませる。夕ネを明かせば残照によるチンダル現象にすぎないが。北鎌沢の偵察に行く。同ルートで槍へ抜ける2人パーティは左岸にテントを張っている。

### 10/13：快晴

4:50 発。北鎌のコルまで2時間を一気に登る。天上沢から北鎌沢左俣右俣の出会いまではすぐで，10分もかからないのではないかと？右俣はとても小さいので，暗いと見落としそう。左俣が緩やかに左カーブを描くが右俣はまっすぐである。しかし，自然に行くと左俣に入ってしまう。前日の明るいうちに偵察をしておいたほうがよい。出合い地点には小さなケルンと赤ペンキ，靴が

残置されていた。北鎌沢右俣に入ると、少し行くと水が出ている。北鎌のコルまで忠実に沢筋を詰める。上部ほど急になり、無木立になってからが思ったより長い。正面の白樺を目指して登る。北鎌のコルは狭いが、1張り分ほどの狭いテン場がある。ここからも急登だが、踏み跡は明瞭で、天狗の腰掛までは案外近い。むしろこのあたりの方が幕営しやすそうだ。

肝心の独標は、直登すると時間を食いそうなので巻きルートを取る。しかし西面は日陰で、雪もついており、凍っていそう。アイゼンとバイル使用で慎重に行く。出発前、アイゼン、バイルは不要かとも思ったが持ってきて良かった、というか、この時期の山なら持っていくべき。右へトラバースするとやがて水平から登りトラバースとなり、さらに高度感のある狭いバンドを伝う。その後踏み跡が不明瞭になるので、直上ルートを取ったが、岩が不安定で落石を頻発させてしまう。結局独標のほとんど頂上付近の稜線に登ってしまったようだ。ここで後からきた昨日の2人パーティは、そのままトラバースを続けたらしく、支稜から我々を抜かしていった。この支稜も見た目必ずしもベストとは言い難いようである。また、巻きルートに入ってから側壁に残置が見られたが、独標を直登するなら、真正面から取り付くのが一番良いように思われた。

碧空を背景に、新雪をまとった岩々が誇らしげに輝く。中腹は草紅葉の斜面に黄色や赤に染まった木々が続き、もっと下には針葉樹の黒い森が広がる。まさに三段染め。谷川が深く轟き、動と静の対比をみせる。地球はこんなに美しいんだ、なーんて...自然が人間をはるか超越した存在であることをあらためて実感する。

基本的に、独標と北鎌平手前(P15 だと思う)以外、すべて稜線沿いの行動。技術面での不安は無い。岩質が安定したところと不安定なところのギャップが激しい。P12かP13での懸垂下降(支点あり、ザイル使用はこの一回だけ)時に、支点のシュリングを残置のみに頼らず持参の物を足すべきだった。懸垂はこの支点が壊れたらおしまいなので、大いに、非常に、反省している。いたるところに赤ペンキ印つけられている。場所によってはルーファイしやすく有難いとも感じるが、全く不要のところのほうが圧倒的に多い。確かにひどい。犯人は北岳バットレスや谷川のペンキ犯と同一犯らしいと、大天井ヒュッテの親父がかなり怒っていたことを思い出す。

P15を右から巻くと、一張りほどの整地スペースがあり、尾根も少し広がってくる。北鎌平かと思われたが、その先の本当の北鎌平は想像以上に広く、逆光の大槍が黒々と聳えている。12時40分着。この先の登りがとても長く急な壁に見え、どうなることか。時間も天気も余裕なので長めに休憩しルートを観察する。ごみの散乱が気になるが、極限状態で脱出した先人の足跡と感じてしまう。

どこでも歩いて行ける広い尾根となって傾斜が増していくが、やがて収斂されていく。槍の登りは部分的に3級上くらいだが、それほどの困難は無い。基本的に左寄りにルートを選定していく。有名な2ヶ所のチムニーは上の1ヶ所を通ったが、下のは別ルートを通ったようである。上のチムニーを越し(3級上くらい)、左に木の杭を見、そのまま直上すると、左に巻き込む様にかぶりぎみの岩場となる。ここがもっとも難しいが、いずれにしろ3級上くらいか。杭に向かって左へ巻いたほうが容易かもしれない。全体として見た目ほどの困難はなく、北鎌平から50分で

頂上に達する(13時50分)。

槍ヶ岳山荘に着いたのは14時半過ぎなので槍沢のテン場まで下山。U字谷のモレーン地形は黄葉に染まり、新雪をまとった大喰岳が高い。なんて風光明媚なのだろう。

#### 10/14：快晴

平和な朝を迎える。テン場はゆっくりと6時過ぎに出発したが、歩き始めればガンガン下る。屏風岩を眺める...徳沢のみ休憩する。

この道を歩くのは4年ぶりだ。奥俣白出合い～横尾間の梓川川原に造成された作業自動車道は、1998年からそのまま、使用が続いているのか。立石などの名勝がつぶされており、このところが国立公園だ。このところが天下の上高地だ。無残な姿に心が痛むし、非常に腹立たしい。砂防工事など含め、河床が固定されればケシヨウヤナギは絶滅してしまう。よく見ると、対岸には奥俣白谷の砂防ダムも見える。

9時半過ぎにバスターミナルに到着し、北鎌山行は無事終了する。何より天候に恵まれた。次は湯俣から行ってみたいものだ。

最後に、今山行の実施にあたり常に適切な助言を下さり、同行いただいた「ぶなの会」の松本さんに感謝いたします。カメラをやめたのは悔やまれます。

---

## 0218 南アルプス/VR：悪沢岳北尾根[偵察]

日程：2002.11.1 夜行～11.4 参加者：尾崎 他 1

---

### 1～2日(快晴):

**田代第一発電所 7:32 - 11:04 転付峠 12:15 - 13:05 二軒小屋 - 15:51 新蛇抜沢出合**

大学研究室の新歓コンパでへろへろになるが、そのままハシゴで新宿へ出る。おれは新入生じゃないぞって。そして今はなき急行アルプスで甲府へ。ちゃんと起きて降りられた。飯田線、タクシーを乗り継ぐ。

転付峠越えは比較的歩きやすいが長かった。峠の日向で1時間ほど昼寝する。二軒小屋から大井川西俣へ入ると、すぐ、発電施設のところで早くも林道は寸断されている。発電所を過ぎて1つ目のガレ沢のところで道は崩落しており、非常に崩れやすい横断となる。そこからは、歩くことは可能であるが、至る所でガレの押し出し、水流による浸食、枝沢の渡渉などがある。地図とは異なり、完全に川沿いの道である。西俣右岸に合わさる顕著な沢の2本目、蛇抜沢の渡渉は要注意。茶色い岩がとても滑りやすく、コケが生えているわけでもないが足を置いただけで滑る。10mほど上流の幅が狭まったところに石を投げ入れて何とか通過する。結氷などの可能性を考えれば、アイゼンの使用が考えられる。3本目の新蛇抜沢を渡った(こちらは容易に渡渉)ところで幕営。

**3日(晴れのち吹雪のち雪): 発 6:30-7:05 小西俣出合-9:45 2400m ジャンクション 引き返し-12:30 帰幕 12:56-14:45 二軒小屋**

30分ほどで西小石尾根の末端である小西俣と北俣出合に着く。取水口を過ぎ、栈橋上を行ける所まで進む。川原には降りずに、急斜面を攀じ登る(正月はアイゼン使用かも)その後は赤布を付けながら、ひたすら樹林内を直登していく。1900m地点に平地があり、そのすぐ上で右から青いスズランテープのマーキングが上がってくる。それはエアリアマップ掲載の廃道とほぼ一致している。そのまま2400mのジャンクションまで登る。悪場は無く、目途がついた。下降はとくに1900mより下部が迷いやすいが、勘と赤布を頼りに元通りに下りる。最後の急斜面は懸垂45mほどとなる。二軒小屋まで移動。

**4日(小雪): 発 6:28-7:51 転付峠 8:00-9:00 保利沢小屋 9:14-10:40 登山口**

転付峠越え。最後に林道を歩いていると、通りかかったドライブ中のご夫婦が、七面山登山口まで送ってくださった。

---

## 0219 上州：武尊山

日程：2002.12.7～8 参加者：山野(19)尾崎(47)石塚(54)島田(53)

---

医療裁判の現場でも人間の記憶ほど曖昧なものはないという(see. 白い巨塔)。山行時のメモを探したが見つからない。一年以上も昔の山行についてたよりない記憶を辿っていると、ひどく自己中心的な内容が断片的に出現する。

...初日、普段の山行であまり行動食を食わないのにシャリばてて歌舞伎揚げをバリバリ食っていた。確か先頭を歩かせてもらっており、わかんもつけたが雪も膝くらいでラッセルらしいところはなかったと思う。粗末な避難小屋のあるあたりではろくに動いているわけではないのにすぐに心臓がバクバクいってしまい、エネルギー不足時における人間の体の働きをリアルにみた気がした。尾崎先輩は言うに及ばず若い石塚も全然余裕そうだったし、僕よりも山野さんの方がずっと楽そうに登っていたに違いない。普段の運動不足を冬山に持ち込んではいけないとつくづく思った。が実はその後の冬山山行でもバテ気味になるということはあったので成長していないのだなあ。あらためて反省しよう。

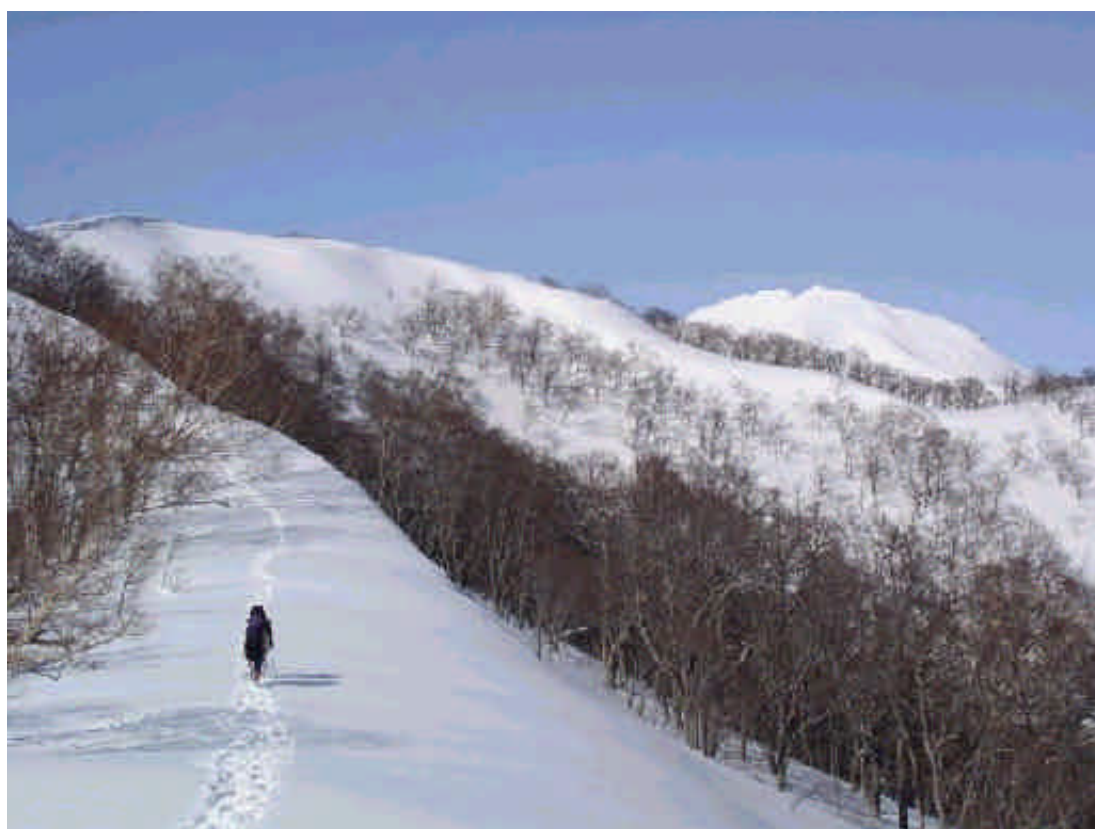
斜面がかなり急になり雪壁みたいのができているところでラッセルに手こずっていると尾崎先輩に「何やってるの？」的な事を言われてしまい(ごめんなさい:尾崎より)そのままものすごい勢いで上段をかき落とし足場を作って突破していった。さすがである。やがて平らになりテン場にする。雪が舞い始める中、雪崩事故にたいする初動捜索訓練として宝探しふうをやった。ひとりにビーコンを入れた袋を埋めてもらい、他の者がサーチモードにしたビーコンを持って走りまわり数字を小さくしていった最後にゾンデでつづいて掘り出すというものである。近づいて数字が減ってくると電子音の間隔が短くなり緊迫感があって良いのだが、無方針に走っていてもなかなか減らない。ゾンデでつづく人間の感触というのも確かめた。そこでは西高から持ってきた「赤い木製の棒のついたスコップ」が実に使いにくかったので、最近僕は密かに「赤い軽量かつ丈夫なスコップ」を購入したのであった。

翌日、鎖場も雪を取り除けばなんでもなくわりとあっけなく山頂に達した。上部は風が強く視界も良くはなかった。夏道を少しはずして、一箇所念のためザイルをだして20m程ゴボウにてキックステップで下った。この山行では練習も意図していたはずだが結局アイゼンを使用しなかった。尾根が広がってどっちに行こうか地図を見て少し考えるようなところで休憩し、ブルーベリーチーズケーキ(雪印)を配る。高一のとき11月新雪の会津駒山頂で尾崎先輩にもらってかなりうまかったので。こういうところには経験を生かしているのだからなあ。風も弱くなって青空も一部でてきた。単調に下っていき、戸を開けて中を見て快適そうだった三角屋根の小屋にてテルモスを。その後ものすごく平坦になってきた樹林帯をとばしていく。遠方の視界が開けると、天気の良いような暗い雲の下に上越と足尾の山々があった。冬らしい雲。石塚曰く皇海は足尾の霊峰らしい。いい加減わかんてひたすら歩くのに飽きてきた頃、シーズン前のスキー場斜面で滑落停止

しながら高度を下げるのを試みるが新雪のためどうやっても滑らなかった、というのは面白空しい経験であった。

2年ぶりの冬山としては強い印象こそないが、曇～天～のもとなかなか渋い山行だった。

(島田 記)



0223 俎崑山稜  
はるか谷川岳(右上)をめざす

## 0221 八ヶ岳/VR：権現岳～赤岳，阿弥陀北稜

日程：2003.1.11～13 参加者：尾崎，島田，石塚，上野(阿弥陀北稜のみ)

1/11 小淵沢 6:40-小荒間口 7:00-R-R-11:00 ヘリポート 11:15-R-13:53 三つ頭手前 14:10-三つ頭鞍部上部 14:35

夜行ムーンライト信州で小淵沢入りすると，そこにはアルパインガイド山田哲也氏のパーティが駅寝していた。山田氏はお姉さんが西朋 20 期くらいとのことで，山野さん初め西朋のことを良くご存知であった。西朋って歴史あるんだなあって，驚きだ。観音平からギボシ，権現岳の道は途中雪崩そうとの情報を頂き，明け方のタクシーに同乗させてもらって三つ頭からの同ルートを取らせてもらう。

八ヶ岳横断道路でタクシーを降り，我々が先行した。途中こちらはルートを間違えたが，しばらく上部までラッセルを続け，途中のヘリポート付近からは一緒になってラッセル。雪は例年並の量との事。快晴のもと行く手，権現編笠の展望がすばらしいが，上部は傾斜もきつくなり，きついラッセルとなる。頭数にものを言わせ，どんどん交替して前進する。三つ頭からは赤岳がどでかく，一大岩塊となって聳えている。あんなの登れるのか!?

緩やかに下って樹林内に入ればそこは絶好の幕営地。山田氏一行は鞍部に設営し，宴が始まる模様だが，我々は初日に権現まで行く予定でもあったのもう少しがんばることにする。しかし，3 人とも疲れてきて，西陽に染まる権現の岩峰が，目の前に異様に手強く見えてくる。樹林が疎らになって眺めがいいところで斜面を切り崩し，整地して幕営とする。

1/12 発 6:50-7:28 権現岳 7:38-R-10:29 天狗尾根分岐-R-12:47 赤岳 13:15-14:05 行者小屋

翌朝は山田氏パーティに先行されたが，我々もしっかりと足取りを進める。権現手前の頂上岩峰は左にトラバースして巻き，無事登りきる。小屋の分岐で休憩し，いよいよ核心部に突入となる。先行とレースがあるとはいえ，細い稜線を慎重に行くとすぐに源次ハシゴという長い梯子のくだりとなる。折りしも怪しいガスに巻かれ，西風が強く吹き上がり，念のためザイルで確保しながらの下りとなる。ここを過ぎても傾斜は強く，キレットまでは気が抜けない。1ヶ所，西に派生する枝尾根に入りそうになる。が，旭岳の下りは結果的にザイルも出ず，慎重に歩を進めるのみとなる。

キレットからは辛抱強く登っていくと，やがて赤岳のガラガラの登りにぶつかる。右手上方には大天狗，小天狗といった天狗尾根の岩峰群が冬の碧空に聳える。ルートは岩溝状の急角度となっている。いよいよ八ヶ岳の盟主赤岳に取り付いているのである。唯一気がかりだった，新雪雪崩の起きそうな斜面も雪はほとんど無く，足早に登りきれば，頂上まで体力勝負の世界となる。天狗尾根を合わせれば，標高差は一段落。だがここからの距離は案外と手強い。それを知っているながらの登高であれど，やはり長い。島田，石塚二人もつらかったことだろう。真教寺尾根を合

わせ、そして文三郎道を合わせれば、いよいよ頂上だ。13時。今回は後輩2人を連れてきたという事で、いつもとは少し違う、それなりの感慨を味わう。

後は最も安全な、文三郎道から、午後の陽に輝く赤岳西壁を眺めつつ、14時過ぎには行者小屋に到着する。程なく上野先輩が合流。

1/13 発6:15-8:10 第2岩峰-9:21 阿弥陀岳-10:28 行者小屋 11:10-12:45 美濃戸口

暗いうちにテントを出て、阿弥陀北稜ジャンクションピークへの完全完璧トレースをぐいぐいと登る。先行2パーティを追い抜いて、ジャンクションに登り着く。北稜第一岩峰は急で高度感があり、アイゼンの前詰とピッケルで慎重に登る。だがそれほどの困難なく、第二岩峰の取り付きへ。朝日が赤岳の右斜面から射し、遙か北アルプスまでがモルゲンロートに染まる。99年秋の鋸岳以来の、オールスター全員集合となる。岩峰群も快適にザイルを伸ばし、2Pの登攀で核心を終了。慎重に頂上まで足を運び、権現からたどった今回のルートを俯瞰する。自分にとってここは2度目であり、今回はトレースがばっちりと付いていたので余裕だったが、島田君や石塚君は感慨だろう。

下りは中岳のコルで弱層テストし、まだ陽のあたらない中岳沢を走り下る。行者小屋では28期松本さんに出会う。美濃戸口までゆっくり下って終了する。



阿弥陀岳頂上にて



## 0223 上越/VR：俎嵯山稜～谷川岳～茂倉岳

日程：2003.3.21～23 参加者：岡田，尾崎，灘吉

3/21：水上=仏岩峠下 10:30 - 14:55 阿能川岳 - 16:10 幕営

初日は3人三様水上駅に集合し、タクシーで仏岩トンネル手前へ入る。先行パーティのトレースをありがたたくたどって尾根上へ。日が濃く暑い。そのおかげで雪も緩むがワカンをつければ潜らず快調。

尾根歩きが続き、三岩山前ではやせ尾根になって一ヶ所ルンゼ状の下りでザイルを出す(ゴボウ)。この辺から国境稜線がダイナミックな景観を見せ始める。

阿能川岳～小出俣山間の尾根に一気に下ると先行パーティが幕営準備をしていた。彼らは我々に気づいている様子。そろそろテン場探しという時間だが手前で張ったら本当にラッセル泥棒になってしまう、ということで行くしかない。もう少し進んだ地点で、旧雪庇の雪堤の下、尾根左側の風が避けられるところで幕営する、16時過ぎ。無風快晴で暖かく、小出俣山も見えて気持ちよい。岡田さん持参のウイスキーをちびちびやりながら、春の夜は更けていった。



阿能川岳より俎嵯山稜

3/22 発 5:28 - 6:10 小出俣山の肩(小出俣山往復)6:50-9:20 川棚の頭 9:40-11:15 オジカ沢の頭  
-12:49 谷川岳避難小屋

2日目は高曇り。5時半前に出発。小出俣の肩手前は急登になり、肩から空身で頂上を往復する(30分ほどで往復)。肩からは緩やかに下り小ピークを越えて平になったところで右へ疎林を下

る。雪質や時間によっては雪崩に注意すべきだろうが今回はあまり考えなかった、反省。

下りきると右に雪庇が出ており、尾根左側の灌木内をラッセルしながら登る。小ピークを越えると森林限界となり、なおも登ると急で雪も硬くなる。そろそろアイゼンが欲しくなる。キックステップを決めてピーク上に上がり、アイゼンに代える。前方には川棚の頭と手前のピークがとも急で難しそうに見える。行ってみれば困難なく、確かに急だがザイルも出ずに川棚の頭へ。次の最高ピークを経て国境稜線手前までは右に雪庇が出ており、左、赤谷川は急傾斜でルート取りに神経を使う。休憩は風を避けられる小平地を見つけて1時間おきにとることができた。

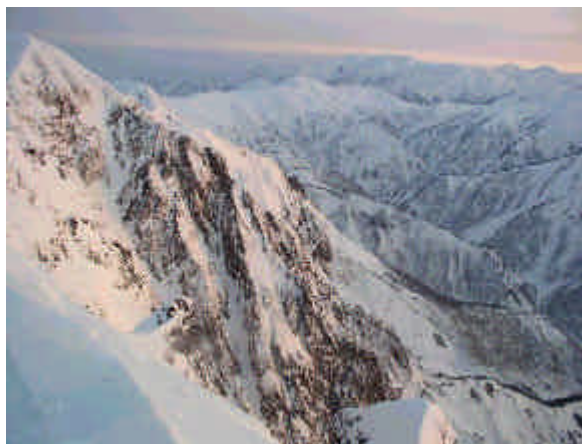
オジカ沢の頭へと広い斜面をラッセルし、主稜線を合わせれば避難小屋(雪で封鎖され使えない)の前を通り、ピークへと立つ。谷川岳が案外遠くに見えるが、徐々にガスに包まれる。ここからはやせた稜線を慎重に下る。オジカ沢の頭からはトレースがあったのでやせ尾根でもそれほど苦労はない。

谷川岳の登りは案外長かった。今日、俎崑山稜で我々の後を来た別パーティは鞍部から先行したが、彼らは小屋よりもしばらく下方で天神尾根へとトラバースして下山した。我々は尾根上を直上したが、完全にガスられ、先ほどまで見えていた小屋がまったく視界に入らなくなる。いつもそうなんだ、この辺りは。コンパスを出して登高した。数m行くと見る見るうちに小屋が見えてきて、狐につままれたような気持ちになる。

せっかく小屋に到着したが雪に閉ざされ入れない。ガスも濃いので今日はここに泊まろうということで、1時間半ほどかけて深さ数mの掘り出し作業をし、小屋テンする。今宵も快適。またもウイスキーで談笑し、楽しい夜であった。

3/23 発 5:28- オキの耳 5:49-6:52 茂倉岳  
7:30-10:50 土樽駅

3日目。朝から快晴である。西黒尾根案の迷いもなく北上。今日も朝5時半に出る。オキの耳を過ぎたところで御来光を拝む。谷川岳東尾根や一ノ倉沢を登ってきた踏み跡がいくつかある。すごいものだ。近いうちに谷川岳東尾根は行きたい。強い北西風に吹かれながら一ノ倉岳へのトレースをたどり、頂上では雪の亀裂に入って休む。茂倉岳に登り返してからは、茂倉新道を一気に土樽へ下る。対岸には国境稜線越しに俎崑山稜が美しかった。茂倉避難小屋は雪の下に埋まって確認できなかった。



一ノ倉沢を見下ろす

## 2003 年度

### 2003 年度役員

会長	山野 裕
チーフリーダー	上野 午良
学生リーダー	尾崎 宏和
会計	山田 裕久
記録・会報	高橋 寛和
	清野 尚史
	灘吉 聡
装備	尾崎 宏和
	灘吉 聡
	島田 悠彦
西高係	島田 悠彦
	鈴木 智広
	石塚 龍樹
ホームページ係	灘吉 聡
超OB係	林 武志
都岳連関係	上野 午良

## 0301 海谷山塊/VR：取水口高地～阿弥陀山～吉尾平，昼闇山

日程：2003. 4.26～29 参加者：上野(27日午後吉尾平にて合流)，尾崎，灘吉

4/25-26

上野 23:33=(急行能登)=糸魚川=(タクシー)=御前山集落 9:00-山境峠-10:46 海川渡渉地点  
10:57-11:16 水汲みレスト-12:10 取水口高地 12:26-13:25R13:37-14:20 ごろ阿弥陀山の肩(幕)

上野発の夜行急行能登に乗れば山行への気分が増してくる。今回、いよいよ海谷への山行が実現する。

気がつけば糸魚川はとっくに通過していたが、寝過ごしたのも気にもせず、取って返して糸魚川に無事(?)到着。それでも天気がさえないと、待合室で1時間ほど過ごしてからタクシーに乗り込む。幸い天気も回復してきた。御前山集落から歩いてすぐに海川第一発電所に着き、雪道となる。頸城駒とその左手には、異様で威圧的な大岩壁大スラブが広がる。地元の人はこの毎日見ているのかと思うと、胃に悪そう...程なく山境峠に着けば、その大スラブは越後の上高地こと海谷溪谷対岸の千丈ヶ岳南西壁であった。海谷溪谷を臨めば、写真で見たヨセミテを思い起こさせる風景で、側壁には雪解け水の直瀑が無数に見える。

ここから取水口高地めがけてトラバースして行くわけだが、さっそくルートがわからなくなる。結局我々は夏道を外してしまったようで、高度を下げることなく、コンクリート構造物を追って徐々に登りながら、進んでしまった。登山体系によれば、これは灌漑用の導水管であるらしいと後日判明する。駒ヶ岳に大きく切れ込む沢筋に突き当たり、ここから雪崩を警戒しつつ沢沿いに大きく高度を下げ、正しい登山道へ入る。海川本流は、所によってスノーブリッジがずたずたに割れ、大濁流となって轟音をとどろかせている。渡渉地点は、幸いしっかりとしたブリッジがかかっている。だが、次の一歩でも崩れたら命は無いぞと、怖い思いで渡りきる。

対岸は沢沿いに進むのは厳しそうであり、また河岸段丘状の平地が一段上にあることから、そこまで登る。途中、澄んだ流れを見つけて水を汲み、1時間弱で取水口高地(732高地)へ着く。水芭蕉が咲き始めている。山境峠から距離のわりには時間を要した。思った以上に神経を使った反動か、ここは快適なテン場だなどと考えてしまう。海川本流は相変わらず濁流。渡渉はほぼ不可能な状態で、駒ヶ岳はじめ西海谷山稜へは取水口の堰堤をわたることになるのか？

ここから阿弥陀沢は明瞭である。左俣と右俣はほとんどこの沖積平野の中で分かれており、千丈ヶ岳から続く旗振山東壁からのブロック雪崩に注意しながら登る。見た目左俣から稜線までは近く、「今日はあの鞍部まで、余裕だな」と考えていた。徐々に傾斜がきつくなり、またガス

にも包まれて、最後はとても長く感じた。鞍部に出れば雪のついた稜線は狭く、両側とも急だった。風は向こう側から吹き上げるので、こちら側に数 m 下った木の下を切り崩し、幕営する。その後夜は雨がけっこう降った。

4/27

**発** 6:00-[ザイル 5P]-8:41 **阿弥陀山北峰** 9:16-10:23 **阿弥陀山南峰** 10:46-[懸垂 6-7P]-13:27 **早川乗越手前** 13:40-14:53 **昼闇谷出合(幕)**

今日は行程も長くないはずで、6 時発とする。上空は薄雲がたなびくが、やがて天気予報どおり晴れ渡り、対岸には西海谷の奇妙な山容が、行く手は残雪が尾根に切れ切れに引っかかっているのが望める。そして背後には、春の日本海が間近に広がっている。

最初っから急峻な雪稜を慎重にステップを切って登下降していく。高度感があり、落ちたらおしまい。ヤブを掻き分けると再びすっぱり切れた急な雪稜となる。出発早々出鼻をくじかれた感のある我々は、そこからアイゼン+アンザイレン体制をとった。結局大部分はザイル無しでも行けそうな、ボーダーレベルかそれ未満の部分も多い。だが、所々クレバス状もあり、雪稜ザイルに慣れることも目的として、ツルベ 5p で頂上直下の密ヤブに至る。

ここからは、とにかく気合だけがものを言う世界となる。前方で、冬眠から覚めたカモシカが侵入者の我々を警戒していたが、やがて岩場の向こうに消える。遠目には立った岩場もザイル無しで行けたが、数歩は高度感があってちと怖く、こちらは彼ほど軽やかには進めない。

というわけで、短い距離にまたも長時間を要し、石仏の立つ阿弥陀北峰に到達。一息入れるものの、阿弥陀南峰へも一筋縄ではなさそうだ。急なヤブ尾根から急な雪の斜面へ進み、植生わきの枝を頼りに下る。鞍部に達すると、北峰から見えた雪壁直下をトラバースし、雪壁右側のヤブから雪壁へと適当に縫い進み、最後は密ヤブジャングルジム状態を腕力登攀の末、阿弥陀南峰に到達。またまた短距離に 1 時間以上を要したが、北峰を振りかえれば遠く高く聳えて見えた。

残るは懸垂 1p 程度と思いきや、先は長かった。主稜線は左へ一気に落ち込んでおり、右(南西)に出る顕著な枝尾根へ入る。少し行くとヤブ壁となり、岩も脆いのでプルーシックで支点を残置し懸垂(10m ほど)。降りたところはちょっとしたテラスになっているが、この先降りる左方向は急な岩壁の下に、シュルンドを開けた雪壁。とりあえずさー、ザイルだなー、,, などとごまかしながら次は太い木を支点に懸垂 25m いっぱい、雪の切れ目をめざす。降り立った岩壁基部は灌木が下向きに生え、それに再びプルーシックを取り、懸垂 20m。この 3p 目から、スラブ状と雪壁の境目を下降していく。次の 4p 目は、ちょうど根っこだけが出ているのを見つけ、25m フル。所々にちょうどうまく生えた灌木に支点を取り、5p 目は 25m 弱(これがあつたか記憶があいまい)、6p 目も 25m 満杯の懸垂で、最後 7p 目はクライムダウンも可能かも知れないが、雪渓が切れて水が流

れ、滑りそうな岩場なので念のため。

単なる懸垂下降の連続で、余裕はじゅうぶんあったとはいえ、7回(6回?)連続はやはりこたえる。それにしても、うまい具合に支点にできる木や根っこがあって良かった。余裕は失わなかったが、3p目下降中、この先どうなることやと感じたのは確かだった。

ようやく降り立った雪渓は鉢沢の源頭で、スキーをしたくなるような斜面だ。トラバース気味に下って早川乗越への主稜線に戻り、再度ヤブをこぐと程なく尾根は広がる。『岳人』などによれば、阿弥陀南峰へのルートは鉢沢源頭を詰め、15mのザイル登攀の後、キレットに下り最後は藪を腕力登攀で頂上とのことで、今回のルートとは少し異なるようだ。もっと簡単に降りることができたのかもしれないが、どれが正解ということもないはずだ。



阿弥陀山からの懸垂下降

早川乗越手前からは、一気に吉尾平に下り、あらかじめ沢の右岸に渡って昼間谷出合を目指す。2人とも結構疲れを覚え始める。目の前で合流する支流の沢を昼間谷と思い込む。しかし前方に上野氏を発見。無事合流し、これがただの枝沢であることを知る。沢を渡り少し進み、樹木の一部がようやく遅い春を迎えつつある昼間谷左岸(アケビ平対岸)、絶好の平坦地に幕営する。昼間谷は少々濁っているものの、飲み水を汲むことができた。

4/28 発 6:25-昼闇山北東尾根-7:36 R 7:54-9:24 R 9:41-10:45 昼闇山 11:51-13:45 帰幕

スノーブリッジを渡ってアケビ平へ上がる。今日はスキーの先行トレースがある。少し進んで左ヘトレースをはずれ、昼闇山北東尾根へ取り付く。意外に急な登りをこなしていくと、昨日の阿弥陀山とほぼ同じ高さとなり、左手には焼山とその北面台地が見渡せるようになる。尾根に乗ってしまえば急登はほとんどないが、左右は少々切れている。ところどころで雪が無く、少々のヤブをこぐが、微妙な踏み跡が続いている。途中、行者ニンニクを見つけ、今夜のおかずにと採取に勤しむ。昼闇谷のカールを大きく見下ろすようになると、頂上も遠くない。一ヶ所、亀裂の入った急な雪壁をそのつなぎ目から正面突破し泥壁をよじ登るところがあったものの、困難なく北東尾根の頭(仮称)に着く。ここは海谷山塊と頸城主稜線をつなぐ尾根とのジャンクションだ。焼山火打山方面へつながる山稜は、真っ白い毛布がしわを打つようだ。

ここから昼闇山頂は指呼の間である。昼闇という山名は何かそそるものを持つ。頂上からは雨飾山や西海谷山稜はもちろん、後立山連峰まで望める。後立山は北東から斜めに見ることとなり、いつもとアングルが違うせいか、勝手が違う。白馬乗鞍が八方尾根のように見えた。鉢山は低く見え、下に見える山はわざわざ登ろうという気は薄れる。上野先輩持参のビールを飲み、1時間以上ものんびり過ごす。

下山は東海谷の主稜線を北へ。大きく下降し、二重山稜となった後の広いピークから吉尾平へ出る尾根を下降する。シリセード混じりで楽に下降し、テン場に着いたらのんびり過ごした。

4/29 幕営地前の斜面でスキーをして遊ぶ 発 9:30-10:30 焼山温泉

今日も明るくなってから起きる。朝食の後、上野先輩持参のスキーをお借りし、テン場前の斜面で3人入れ替わり滑って遊ぶ。最初に書いておくべきだったが、烏帽子東稜は完全に雪を落とし、ぼろぼろの岩稜となっている。なので早々とパスを決めた。しかも烏帽子岳のルンゼでは、時おり大規模なブロック雪崩が発生し、吉尾平中(?)に轟音を響かせていた。そして、9時半ごろ、ようやく下山を開始する。

容赦なく日焼けした肌にはつらい「焼山」温泉だったが、充実した後の風呂は最高であった。

補足：タオルを忘れても、焼山温泉には背中洗い用の長いスポンジたわしが用意されているので大丈夫!?



---

## 0304 北アルプス/ST：白馬大雪渓

日程：2003. 5.25 参加者：尾崎

---

夜行と朝一番のバスを乗り継ぎ猿倉へ。夏の喧騒は面影すらなくひっそりしている。曇っているがやがて晴れるという天気予報を信じるしかない。6時半に歩き始め、1時間も歩かずに雪が出てくる。白馬尻では小屋の掘り出し作業が始まったようだ。ここから大雪渓はシールをつけて登高開始。青空が急に広がってくる。前方には杓子、白馬岳と白馬主稜が見える。時おり落ちてくる側壁からの落石に注意。白馬尻から2時間弱登ると非常に急な斜面となり、スキーを外してつば足登高する。その後も頂上までスキーはつけなかった。雪は稜線まで続いているが、風が強く、日が影ると部分的に雪面がクラスト状になる。村営小屋を過ぎたところから上には雪は無い。頂上まで往復するが、頭が痛く、深呼吸すると胸も少し痛い。急激な高度上昇で高山病気味か。頂上では白馬主稜最後の雪壁を見下ろす。

滑りに入れば、頭痛も吹っ飛びとても快適である。日差しでいくぶん緩んでいるとはいえ、雪の状態はこの上なく良い。急斜面地帯に緊張して突入するが、思い切ってターン。とにもかくにも、転ぶことなく突破して、再び緩斜面を快適に行く。落石がたくさん転がっているところもある。一瞬にして白馬尻が間近になり、雪の続く限りは滑りつづける。途中で信州大を卒業した及川さんと出会う(大学の関係で知り合ったが、及川さんは博多氏の友人とのことで、不思議な縁である)。1時間の滑降で猿倉より少し上の林道まで行く。今年はいくぶん雪が多いらしい。時間が許せばバス道路を歩いてもと思ったが、猿倉バス停に着くとちょうど午後のバスの時間だった。



---

## 0309 奥多摩/WC：日原川 犬麦谷

日程：2003.7.27 参加者：尾崎，他3

---

前夜，東日原のバス停近くの駐車場でテント。

東日原 7:00 発

8:07 大栗窪出合付近

9:00 犬麦谷出合（林道ターンの下の出合）9:22

11:00 林道ヘアピン上の林道

13:20 縦走路 13:41

14:38 一杯水避難小屋 14:55

16:28 東日原

東日原バス停から林道を歩いて2時間弱，部分的に落石などがある．林道が犬麦谷に1回目に出会うところから遡行開始とするが，雨が降り始めてさえない気分になる．水量が多く，林道がヘアピンして戻ってくるところまで，ザイルを出したりして結構時間がかかってしまう．タツマの滝（その下の15M滝とともに），F4 15Mは右から巻く．とくにF4は高度感もありそうで，ハングしているところへ激流を受ける形になりそう．モリの瀑流帯の他の滝は楽しく，天気のことまで忘れて登る．しかし7月下旬とは思えない寒さ．稜線に出てからは平らな道をのどかに歩いて東日原に下る．時折日も射してくる．沢は水量が多く下山が遅くなるかとも思ったが，結果的にそんなこともなく，よかった．

## 0311 夏山合宿 和賀山塊/WC : 和賀岳~マンダの沢~羽後朝日岳

日程 : 8/9~12 参加者 : 山野, 青谷, 松本, 加藤, 上野, 尾崎, 島田

本来は、8/9 朝に集合し、和賀川中流から大鷲倉沢遡行、和賀岳登頂の予定だった。ところが台風10号が直撃し、集合は半日遅れ。合宿は気をもみながらの幕開けとなった。北上駅に9日午後集合、結局この日は湯田で宿泊する。この時点で和賀川中流からの入渓はなし。夜に台風は通過した。それほど大雨ではなかったのですが、一般道の和賀川渡渉点で沢に入るか判断するとして、わずかな可能性に望みをつなく。

8/10 5:10===林道 6:10-6:30 登山口 6:38-7:31 高下分岐 7:42-8:15 和賀川渡渉点 8:34  
-11:03 和賀岳 11:45-13:48 下降点-16:00 マンダノ沢-16:45 上天狗・下天狗沢 二俣

朝一でタクシーに乗り、和賀岳登山口へ。途中で見た和賀川は濁流である。天気も相変わらずであり、これで沢の可能性はほぼ消えた。林道を20分ほど歩き、登山道を1時間半ほどで和賀川渡渉点。平水時の3-4倍の川幅だが、膝までの深さで渡るのは簡単だった。しかし、水温は非常に冷たい。ここから下流部はゴルジュをなしており、やはり大鷲倉沢はパスすることになる。全行程参加ができない山野さんと上野先輩とも、いっしょに登れるということになったので、それはそれでまあよしとする。

難なく3時間ほどで山頂。山頂付近は道も笹に覆われている。大鷲倉沢源頭を見下ろすことが出来た。雪渓が見えた。天候はいくぶん回復気味かもしれないが、いまだ本回復とはいかず、風も強いので寒い。

山野、上野両氏と分かれ、本隊は羽後朝日岳を目指して北上開始。かすかな踏み跡もすぐに無くなるが、ヤブ自体もそれほど深くはない。幸運にも、この頃から晴れ間がのぞき、行く手の山々も見渡せるようになる。先方に黒茶色のザックが置いてあるように見えた、よく見ると白い斑紋、ツキノワグマである。20-30mくらいか。じっと睨んでいると、ほどなくして下方へ消えた。すぐ後に、足元で何かうごめいたかと思うと、灰色のウサギが飛び出した。辰巳俣沢源頭の草原は楽園のようなところだが、主脈よりも枝尾根が顕著であり、ルーファイ要注意である。幸い見通しがきくうちに右の主脈に移り、しばらく休憩。羽後朝日も雲間から姿を現しつつある。見渡す山容は北海道の日高山脈を彷彿とさせる。

何ヶ所かの二重山稜状を過ぎ、治作峠手前?の草原で再び休憩。先ほどの辰巳俣沢源頭地形が正面に見える。ここからマンダの沢の支流を下降する。ザイルは使わなかったが、長引く梅雨とここ数日の大雨のせいか、増水著しく、いやらしい下降を強いられる。とにかく滑る。水流内は水圧が強く、水際はコケが生えている。草やコケが水没しており平水時の水量がうかがえる。

16時、マンダの沢の降りつく。驚くほどの水量で、2年前に訪れた時の面影はまったく無い。

この先テン場が確保できるか少し心配だが、快晴の空に助けられ前進する。滑床はことごとく水流に埋まり、ちょっとしたところでも余計な巻きが現れたりする。上天狗、下天狗の二俣左岸にすばらしいテン場を見つけ、ここで泊まりとする。

8/11 発 6:10 12:48 羽後朝日岳 13:10 17:30 幕営

6時に歩き始める。下天狗沢はしばらくゴーストであるが左岸に支流を合わせる頃から滝が現れ始める。数ヶ所、釜の深い滝があり、短い泳ぎやへつりによって突破していく。長く深そうな釜を持つ5mのトイ状の滝は厳しそうであるため左から巻く。ザイル使用だが困難は無い。その後も必要に応じて2ヶ所ほどザイルを出す。急な登りとなってやがて沢はスラブ状を成す。下天狗は上天狗よりも1ランク上であるようだ。2級程度の登りをこなし、浅くヤブをこぐ。左の尾根に上がるとほどなく羽後朝日岳の頂上へ出た。ガスに覆われ展望は無いが、これで和賀岳とつながることが出来た。

下降は明瞭な踏み跡を部名垂沢へ。最初のはっきりしないピークを右へ曲がる途中でガスが切れて展望が開け、しばらく景色を眺めた。沢の下降自体は必要箇所にはロープが張ってあり、ザイルは使わなかった。15時半ごろから本格的に雨が降り始めるが幕営適地も無く、延々と下る。長い。17時半過ぎにようやく標高500mほどのゴースト地帯に到着し、右岸に幕営する。雨の中でも焚き火をし、ようやく安堵のひとつきを過ごす。

8/12 発 7:41 - 9:31 堀内沢入口 9:50 - 10:31 夏瀬温泉 11:00 - 12:13 バス停

相変わらず雨はすごい。前室で寝た松本さんには申し訳なかった。撤収は、濡れないようになどとは思わない開き直り状態。歩き始めるとすぐ林道となるが、ちょっとした峠越えがあったりで長い林道だった。夏瀬温泉に着けば休業中で、街までさらに1時間半ほど歩くこととなる。

角館駅近くの「温泉ゆぼぼ」に寄って解散となる。今回は幕開けから波乱含みだったが、それはそれで楽しい合宿となった。

## 0312 奥多摩/WC：丹波川小常木谷

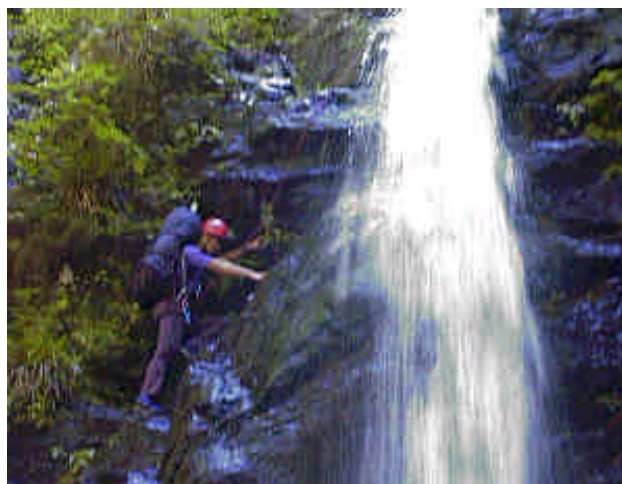
日程：2003.8.23 参加者：加藤，尾崎，灘吉，島田

8/23 余慶橋 7:35 - 9:20 兆子の滝 - 12:30 18m 大滝 - 16:24 源頭 - 17:26 岩岳尾根 - 19:45 余慶橋

小常木沢はいいトレーニングになった。前夜、加藤先輩の車で入渓点の余慶橋へ。やはり水量が多く、丹波川の渡渉はできず。余慶橋から左岸を歩く。

置き草履の悪場、最初の「兆子の滝」はすごい水流を耳の穴に浴びながら右壁を登る。「逆くの字滝」のツルツルは案外難しく、A0 してしまう。20m 大滝は最初飛沫を浴びながら、左壁に取り付く。垂直&高度感を気合で突破。多くの残置に助けられる。最後の「ねじれの滝」はさすがに無理そうなので巻き。これさえ登れば登れる滝は完登だったが、あとこれだけ登れば全部だなどと無理すれば、事故りそうないやな感じがしたので巻く。

余慶橋に戻ったのが 20 時ごろになってしまい反省。西朋祭には 21 時に合流。本当に山の仲間がいいものです。



F1：兆子ノ滝（島田）



無事下山．ただし真っ暗です．

---

## 0316 北アルプス：唐松岳八方尾根

日程：2003.11.23～24 参加者：松本(28)・島田(53)・石塚(54)

---

天気に恵まれた。曰く、石塚雪山史上でも最高だったらしい。使い捨てカメラで撮った鹿島槍の写真、自分では実際に見たときの鮮烈さに比べてぼやけているなあとやや落胆したが、彼によって04年年賀状には見事にトリミングして採用されていて感心した。やはりあのような場面にはなかなか巡りあわない。

ゴンドラを乗り継ぎ歩き始めて1時間の八方山を南側からトラバースするあたりで、今までかかっていたなんだか複雑な様相の雲が晴れていって、紫外線飛び交う濃く蒼い空を背景に真白い五竜鹿島槍の北面が立派に見えはじめたときには歓声があがる。53・54期の夏山で行った不帰の峰々は間近に迫っていた。雲海の遠くには雨飾火打妙高四阿八ヶ岳(1月には阿弥陀からこちらを見ていたはず)富士山南ア中アも。雪はリフト終着点からあったが、その辺だとだいたいくるぶしぐらいまでという少なさ。そこでその日中に八方池にデポして、軽いザックでだいたい唐松岳を往復とした。だいたい夏山のコースタイムで進む。雪訓は下山中、下ノ樺尾根の少し手前にあった斜面で、滑落停止とコンテの練習をした。そこら辺りだと膝ぐらいまでであったが、かなり新雪じみっていてピッケルを刺すにもなんだか手応えがなくてまいった。コンテはピッケルを輪に通すのがえらく難しい。確かにやることはやってしまったのでテントでは松本さんの焼酎を中心とした大量の酒を遠慮なくいただいてもよい身分になっているいろの話が聴くことができた。このときだったろうか、ビーコンの動作を試したりして「携帯にビーコン機能を持たせれば繁華街での待ち合わせなどに使えてヒットするだろう」という技術屋の発想を聴くことができ感嘆したものである。

翌日下山後温泉にはいってノンアルコールビールで乾杯。帰路そばを食って長い道のりを東京へ。

(島田 記)

---

## 0317 天子山塊：毛無山～本栖湖

日程：2003.12.23 参加者：尾崎

---

12/13 下部温泉 6:30 - 8:26 登山口 - 10:16 地蔵峠 10:35 - 11:40 毛無山 12:20  
- 15:00 竜ヶ岳 - 16:21 本栖湖

6時半、ちょうど明るくなったころ下部の駅に着き、歩き始め。武田ゆかりの史跡が多い。1時間で湯の奥集落、さらに1時間強林道が続く。途中何台もダンプに抜かされたりしてこの林道は冗長の感あり。登山口までは大きなヘアピンもある。

登山口からはそれほど急な登りも無く2時間で地蔵峠に着くと、正面にどどーんとでっかい富士山とふもとの平和な風景が広がる。さすがにサティアンもあるまい上九一色村である。毛無山頂上は中高年登山者が多かった。みんな富士山を見ているが南アルプスの展望も抜群。帰宅後地図を見たら、下部温泉が標高200m、毛無山頂上は1946m。けっこうな高度差だった。ふつうは河口湖からバスに乗ってくるんだろうな、、久々の山としてはOKだ...しばらく日向でまどろんだ。

出発して北面に入ると雪を踏む。カヤトの気持ちいい稜線を北上して、雨ヶ岳からはどんどんくんだり、竜ヶ岳に急登すると本栖湖は近かった。

## 0320 南アルプス：三伏峠～塩見岳

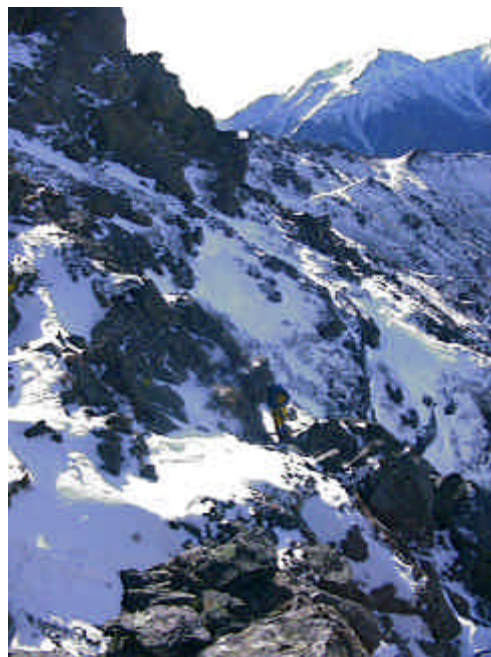
日程：2003.12.28～30 参加者：加藤，尾崎，灘吉，島田

塩川小屋、川沿いに尾根取り付きまで行くと三伏峠までは結構急な道を登る。この山行中トレースはぱっちりついていて苦労はなかった。途中（取付 2, 3P?）加藤先輩が足を痛めてしまい、パーティーをわけることや道脇のテン場を探すことなど少し検討した。急坂とはいえよく探すと整地次第でテン場になりそうな場所はないこともない。だが結局、三伏峠まで行って様子を見ることにした。最後の 1P は比較的平らに尾根に巻き付くが、ちょうど夕暮れになり北側の山々が染まりつつあって美しかった。暗紫の空のもとでテント設営。

翌日、どうやら先輩の足の状態も回復し皆で往復することに。印象として塩見は実に深くて大きな山だった。いくつも小ピークを抱えていて稜が長い。僕は体を冷やしすぎたためか体調を崩したのでゆっくり行ってもらう。塩見小屋からの最後の急斜面は灘吉先輩トップで。それほど岩場という感じでもなく雪もあまりついていなかったため、アイゼンを効かせていけば不安はなかった。むしろ高度感があって快い。山頂で東峰に往復している間に、ザックビレイ用に雪面に指しておいたはずの加藤先輩のピッケルがなくなるというトラブルがあった。ピッケルを持っていなかった別パーティーに盗られたのではないかという推測。塩見小屋まで慎重に下ったあと先輩は追っかけるために少し先を急ぐが、結局でてこなかった。災難である。

最終日は峠からあっという間に下り、塩湯なる温泉に入り車にて東京へ。

八方尾根にひき続き天気穏やか、トレース完備（おまけに車だしていただき交通費ただ！）で雪山の厳しい側面を忘れつつある。（島田 記）



## 0321 南八ヶ岳連峰/VR：赤岳東稜

日程：2004.1.30～2.1 参加者：尾崎、他3

1/30

CRUX アルパインクラブの中澤、糸野夫妻3氏との山行。尾崎と中澤は、最終の小淵沢行きで、松本在住の糸野夫妻に車で車へ拾ってもらい、サンメドウスキー場(旧県営スキー場)へ。

1/31 発 7:45-8:24 県界尾根分岐 8:45-9:36 R 9:46-11:30 二俣上部-14:30 R-16:30 ごろ 第1岩峰手前(幕)

真教寺尾根からの予定を変更し、大門沢を詰める。県界尾根への分岐を過ぎるとラッセルとなるが、足首上程度。林道が終わってほどなくすると関西の3人パーティが追いつく。そこからは7人で相前後してラッセルすることになるので助かる。

東稜取り付きの大門沢二俣はどちらもゴルジュ状で明瞭だ。右俣へ入って傾斜が緩んだところで休憩。その上流部で尾根にとりつく。急傾斜のラッセルに耐え、14時半ごろ平坦地に着くが、時間が早いのもう1時間程度は頑張ろうと再び登高を開始する。そこからもなかなか深いラッセルを強いられた。16時半過ぎに、第1岩峰手前の尾根合流地点に到達。傾斜もいくらか緩やかであり、見晴らしもなかなか。赤富士が美しい。超空腹だったが、がんばって雪の斜面を切り崩して幕営した。関西パーティーはもう少し上で幕営した。

2/1 発 6:20-9:45 R ?16:10 稜線-17:45 行者小屋 18:29-20:00 美濃戸-21:00 美濃戸口

6:20 発。出発準備中の関西パーティーを追い越し、ラッセルして第1岩峰に取り付く。見た目やさしい草付雪壁も、取り付いてみると案外悪く、変なところからザイルを出す羽目になる。草付凹部を右上し、雪壁となったところから左上する。雪稜に乗り上がってコメツガの木でピレイ。ここからは容易。赤岳東壁を望みながら、ノーザイルで爽快な雪稜を行く。先行者のいないリッジは登高の喜びそのものだったが、陽光に照らされた雪面はやがて腐り、激しいモナカ雪ラッセルとなる。

第2岩峰直下には9:45到着。左からの巻きも急傾斜であり、モナカ雪でおぼれそうである。ここは正面突破をやってみようということで、ダブルロープで登ることとする。正面左の草付から岩壁(+~-)へ。1ヶ所、微妙な体勢で左手向こうの割れ目にハーケンを打ち、完璧に決めてヌンチャク。あとは岩角などでこまめに中間を取り、小さなテラスへ。ここから左上はかぶっており厳しいとみて、右の垂雪壁にルートを取る。雪壁を崩しながら灌木を掘り出し、手がかりと支点を得るが逆に壁はますます高くなる。一度落ちかけ、無理しなくてもいいんじゃない、と言う自分と、冷静に、ここは登れるという自分がいるのに気がついた。



アイゼンの爪と執念で乗り上げ、キノコ雪を崩せばあおられる雪粉を顔面にもろにかぶり、急峻で高度感いっぱいのリッジへ出る。雪を崩し落としながら進み、アクロバットな灌木ピレイでピッチを切る(約35m)。

中澤さんはユマーリング、糸野夫妻は引き上げ。直接姿は見えなくても、大門沢に落ちる影で登ってくる姿を確認できる。目線をはるか下方へ転じれば、白馬主稜を彷彿とさせる雪稜上に続く我らのトレースは爽快そのもの。関西パーティが第1岩峰上の雪稜で休憩しているのが見下ろせる。

続く岩峰は左側のいやらしい草付急壁を中澤さんトップで越える(30m)。ここもシビアである(+~-)。基本的にアイゼンやバイルで大地を傷つける登り方はしたくないが…その後さらに45mほどのやさしい雪稜を登ると真教寺尾根に合流し、16:10稜線着。

すでに陽は西に大きく傾く。暗くなるのは時間の問題。頂上はカットしすぐさま文三郎道を下降する。エネルギー切れを感じつつ行者小屋に17:46着。この時点で本日中の帰京はあきらめるが、ようやくの安全地帯に安堵した。ピーナツチョコレートで元気を取り戻し、美濃戸口には21時ちょうどに帰還する。

その夜は松本の糸野さん宅にお世話になり、翌朝一番のあずさで東京へと帰還して、尾崎は直接大学へ向かう(セーフ)。

さて、幕営地点の選定や荷物の軽量コンパクト化、ロープの要、不要の判断など、反省すればいろいろあるし、悪天候では撤退しただろうとも思う。天候やメンバーに恵まれ、今年度トップクラスの山行ができ、その余韻は1週間がたった今も克明に残っている。

---

## 0323 上越/VR：足拍子岳南尾根

日程：2004.3.14 参加者：尾崎、他2

---

3/14 土樽 7:00 - 9:10 ジャンクション - 11:40 足拍子岳 - 14:30 土樽

CRUXの中澤、畠中両氏との山行。3人都合のあわせられる土曜夜から日曜日に、日帰りのお手軽バリエーション?となった。

土樽駅に前夜入り、宴をして寝る。天気予報に反して翌朝は雪。谷川周辺の山じゃ仕方ない。駅前から橋を渡ってすぐに取り付く。初めは沢沿いに進み、軽めのラッセルをこなしていくと雪庇を2回越えて雪稜となる。緩急繰り返し、1147mジャンクションは左上方に足拍子(じつはダミーだった!) 南方には茂倉岳方面が見え隠れする広い台地になっている。

日帰りでこんな山にいけるのかと思うほどの爽快&豪快な雪稜に行く。雪壁も弱層はなく問題なし。1ヶ所、馬の背状に岩にまたがり乗り越すところでザイル使用。快適にピークに登りついたが、、本当の頂上はまだ向こうにあった!

傾斜は緩いが雪庇状で微妙な部分を懸垂し、再度急峻な稜をつめると本当の頂上に達する。荒沢山への稜線は時間がかかりそうだ。旭原からクロガネの頭方面より登ったパーティに出会う。

下りは懸垂をまじえつつ、2時間で土樽駅へ着く。帰りの電車では3人でここちよく酩酊しながら帰京した。

---

## 0324 上越：タカマタギ

日程：2004.3.20~21 参加者：島田、他

---

大学のサークルのほうで、土日で土樽のタカマタギに雪訓に行ってきました。内容はカタチだけという感じもしないのですが弱層テスト、雪層観察、二点ゾンデ法など。天気はまあまあで一時的にしまり雪であつという間に山頂でした。日曜の午前中には尾崎先輩の行かれていた荒沢~足拍子の他、茂倉岳、巻機~白髪門、国境稜線の山々が見えることもありました。

(島田 記)

## 0326 上越/ST：宝川温泉～雨ヶ立

日程：2004.3.21 参加者：青谷・尾崎

3/21 宝川温泉 8:10-9:16 初沢出合 9:30-13:15 雨ヶ立 13:50-15:00 初沢出合-15:30 宝川温泉

「雪少ねー」なんて言いつつ宝川温泉へ来れば、終点より奥は大丈夫。安心して8時、スキーをつけて歩きだす。とはいえ斜面は向きによって雪があったり無かったり、あっても急すぎたりで、結局初沢出合の緩斜面から取り付き、右の枝尾根へ上がる。まったくの無風快晴で、とても暑い。登るにつれ朝日岳方面、谷川岳、そして雨ヶ立山頂が目に入ってくる。雨ヶ立までは、見たところ距離がありそうだ。

見晴らしの良い尾根を徐々に高度を上げる。所々現れるいくらか急な斜面も、シール登高への支障はない。

13:15 山頂。上越・奥利根・越後・南会津と、見渡す限りの雪世界。その中で八海山と刃物ヶ崎山だけが黒々としている。宝川温泉周辺や、利根川上流の右岸域の山は、山スキーエリアとして潜在性がとても高そうだ。青谷さん持参の白ワインで登頂を祝福、無事滑降を祈願する。

下りは往路の尾根途中から右下へ滑り込む。雪も硬すぎず、やわらかすぎず、ブナの疎林は最高下部のスギ植林帯を除けば非常によい。登って5時間、だがシールを外せば1時間ちょいで下の林道まで。もう少しスケールがあってもよかったが、非常に楽しいスキーツアーだった。



雨ヶ立頂上より上越国境・朝日岳方面

## 都立西高WV部活動報告

## 2000 年度

山行名	日程	山域	OB 参加者
新入生歓迎山行	4/30	奥多摩：御前山	林武(4), 山野(19), 他
5 月月例山行	5/27-28	大菩薩：小金沢連嶺	佐藤(52)
6 月月例山行	6/24-25	日光：女峰山	佐藤(52)
個人山行	7/12-13	八ヶ岳：権現岳	
夏山合宿	7/21-25	北アルプス：後立山連峰	
春山偵察	8/18-21	南アルプス：早川尾根	小倉(51)
沢登り	9/30-10/1	丹沢：勘七ノ沢	尾崎(47), 星野(47)
10 月山行	10/28-29	北八ヶ岳：天狗岳	佐藤(52)
11 月山行	11/25-26	南会津：会津駒ヶ岳	灘吉(48), 佐藤(52)
スキー合宿	12/26-29	上越：水上宝台樹スキー場	上遠野(17), 細田(49), 天野(50)
2 月山行	2/24-25	北八ヶ岳：天狗岳	灘吉(48), 佐藤(52)
春山合宿	3/29-30	南アルプス：鳳凰三山	尾崎(47), 灘吉(48)

## 2001 年度

山行名	日程	山域	OB 参加者
新入生歓迎山行	4/30	奥多摩：棒ノ折山	
5 月月例山行	5/27-28	大菩薩	清水(50), 松長(53)
6 月月例山行	6/24-25	奥多摩：雲取山	林(6), 田中(52), 松長(53)
夏山合宿	7/21-25	南アルプス：北岳～塩見岳	林(6), 帆苺(50), 天野(50)
春山偵察	8/18-21	八ヶ岳：硫黄岳～天狗岳	林(6), 田中(52)
沢登り	9/7-8	奥秩父：笛吹川東沢釜ノ沢	尾崎(47), 星野(47), 灘吉(48)
10 月山行	10/28-29	日光：女峰山	栃谷(50), 松長(53)
スキー合宿	12/26-29	上越：水上宝台樹スキー場	上遠野(17), 天野(50), 松長(53)
1 月山行	1/22-23	八ヶ岳：編笠山	吉田慎(18), 山野(19), 栃谷(50)
2 月山行	2/15-16	奥秩父：金峰山	山野(19), 上野利(48)
春山合宿	3/29-30	八ヶ岳：硫黄岳～天狗岳	佐藤(52), 田中(52)

## 2002 年度

山行名	日程	山域	OB 参加者	
新入生歓迎山行	4/29	奥多摩：棒ノ折山	指導引率は顧問教諭の元で行う とのスタンスから、OB の参加は 基本的に中止となりました。	
5 月月例山行	5/18-19	大菩薩		
6 月月例山行	6/22-23	日光：奥白根山		
7 月月例山行	7/13	奥多摩：御岳山～日の出山		
夏山合宿	8/7-10	北アルプス：常念岳～燕岳		
沢登り	8/24	奥多摩：川苔谷逆川		山野(19), 尾崎(47), 灘吉(48)
10 月山行	10/13-15	尾瀬：燧ヶ岳・至仏山		
11 月山行	11/23	奥多摩：大岳山		
スキー合宿	1/18-19	上越：水上宝台樹スキー場		上遠野(17)
3 月山行	3/2	高尾：陣馬山		
春山合宿	3/15-16	上越：水上宝台樹スキー場	上遠野(17)	

## 2003 年度

山行名	日程	山域	OB 参加者
新入生歓迎山行	4/29	丹沢：鍋割山	上遠野(17), 青谷(28)
5 月月例山行	5/31-6/1	奥秩父：両神山(台風中止)	
7 月月例山行	7/5-6	奥秩父：雲取山	
夏山合宿	8/3-7	北アルプス：白馬岳～朝日岳 ～蓮華温泉	
11 月山行	11/22-23	奥秩父：両神山	
スキー合宿	12/27-28	上越：水上宝台樹スキー場	
3 月山行	3/20	奥多摩：日の出山	

## 西朋登高会 会則

1986年9月1日制定

2001年4月23日改定

## 第1章 名称・目的

第1条 本会は「西朋登高会」と称する。

第2条 本会はスポーツ精神を遵守し、会員相互の登山活動を協力して実践すると共に、西高ワンダーフォーゲル部の指導にあたる。

第3条 本会の事務局は、毎年、総会において定める。

## 第2章 組織・会員

第4条 本会の会員は、西高ワンダーフォーゲル部に在籍したもの、または有志で、総会で承認を受けたものにより構成する。

第5条 本会は次の役員をおく。

1. 会長.....会を代表し、事務局をおく。
2. チーフリーダー.....山行全体を掌握する。
3. 学生リーダー.....学生を中心とした山行を掌握する。
4. 会計.....財政を管理する。
5. 装備.....共同装備を管理する。
6. 記録.....山行記録をまとめ、会報および西朋通信を発行する。
7. 西高係.....西高ワンダーフォーゲル部を指導する。
8. ホームページ係.....西朋登高会ホームページを管理する。
9. 超OB係.....現役を引退したベテラン会員対象の山行を企画実施する。

第6条 前条の役員のうち、会長は総会にて選出し、他の役員は会長が指名する。

第7条 本会は4月に、会長が召集して総会を開く。

第8条 総会では、次のことを議事とする。

1. 前年度活動報告
2. 前年度会計報告
3. 新年度役員選出
4. 新年度活動計画
5. 新年度予算案
6. 新会員承認
7. 会の運営に必要な事項

第9条 本会は原則として毎月1会、チーフリーダーが召集して例会を開く。

- 第10条 例会では、次のことを議事とする。
1. 山行報告
  2. 山行計画
  3. 会の運営に必要な事項
- 第11条 本会は年1回、会員相互の親睦を図るため、西朋祭を行う。
- 第12条 本会には次の会員を置く。
1. 特別会員...西高ワンダーフォーゲル部の顧問を務め、本会に大いに言献した先生。
  2. 一般会員（現役会員）...会の活動に関心を持ち、合宿山行や総会、例会及び西朋祭などに参加する会員。  
(会報、西朋通信などを事務局より送付する)
  3. OB会員...現在は会の活動から遠ざかっているが、総会や西朋祭に参加でき得る会員。  
(総会などの連絡・会報・西朋通信のみ事務局より送付する)
  4. 超OB会員...現在は会の活動から遠ざかっているが、総会や西朋祭に参加できる会員。  
(総会などの連絡・会報・西朋通信等、連絡不要の会員)
- 第13条 前条のOB会員及び超OB会員について、次の場合一般会員（現役会員）より移行する。
1. 本人の希望による。
  2. 5年以上連絡がない人は、総会での協議により、OB会員とする。後に本人の希望により、一般会員に戻ることができる。

### 第3章 会費・会計

- 第14条 本会の運営のため、次のとおり会費を徴収する。
1. 一般会員（現役会員） : 年額 4000 円
  2. OB会員 : 年額 1000 円（数年分前納できる）
  3. 特別会員・超OB会員 : 会費なし
- 第15条 一般会員のうち、合宿山行などに積極的に参加する会員からは、装備費を別途徴収する。
- 第16条 会計年度は、4月から翌年3月までとする。
- 第17条 会計は、普通会計と特別会計に分ける。
- 第18条 普通会計は、会費収入をあて、装備・会報発行・通信事務などに使う。
- 第19条 特別会計は、西高ワンダーフォーゲル部指導謝礼金および会費収入よりの積立

金および寄付金をあて、遭難対策基金とする。

#### 第4章 山行

第20条 本会は、次の合宿山行を持つ。

1. 新人合宿
2. 夏山合宿
3. 冬山合宿

第21条 会員は合宿山行の他に、各人の目的に応じて、個人山行を行う。

第22条 山行に前もって、計画をチーフリーダーに知らせる。

第23条 山行計画には、次のことを明記する。

1. 行程
2. 同行者
3. 最終下山予定日
4. 緊急連絡先
5. その他

第24条 山行後、山行報告を記録係に提出する。

#### 第5章 西高ワンダーフォーゲル部の指導

第25条 本会は、西高ワンダーフォーゲル部が安全かつ意欲的な活動を実践できるよう、部の顧問教諭と協力して指導にあたる。

第26条 西高係は、顧問教諭およびワンダーフォーゲル部員と密接な連絡をとる。

#### 第6章 装備

第27条 本会は共同装備を持ち、会員はこれを利用できる。

第28条 装備係は共同装備を管理する。

第29条 個人装備は各個人が負担する。

#### 第7章 遭難対策



第30条 会員が遭難したときには、一致協力して救助に努力する。

第31条 積極的に山行している会員は、山岳保険に加入する。

第32条 山岳保険金の使途に関する権限は、本会が有する。

第33条 遭難が起きたときには、会に遭難対策本部を設置し、会長は必要な係を任命する。

第34条 遭難救助に要した経費は、山岳保険金をあて、不足分は当事者が負担する。

第35条 会の遭難救助基金は、当座必要な費用の立替に使う。

## 第8章 会則の修正・改正

第36条 この会則の修正や改正は、総会で議決する。

## 第9章 施行

第37条 この会則は、2002年度の総会后より施行する。

## 編集後記

山登りという創造的活動は、私たちが魅了して止みません。一方で、生命の危険を常に伴っています。皆さん、山では絶対に命を落とすことのないよう気をつけましょう。

しかし、それだからこそ、山登りの魅力は、生きることに常に執着すること、ここに尽きるのではないかと感じます。なぜなら生物が、生きること、生きようとすることに快感を感じないわけがありませんから．．．所詮わたしたちは、地球に住む一生物にすぎないということを、山は教えてくれました。

「西朋 27」に続き、節目の 50 周年記念号、「西朋 28」の原稿執筆、作成に協力していただいた多くの先生方、先輩方、誠にありがとうございました。21 世紀の西朋が、ますます発展することを祈りつつ、次号、「西朋 29」へ！

2004 年 4 月 24 日 47 期 尾崎 宏和

### 西朋 28

2004 年 4 月 24 日発行

発行者 西朋登高会（会長 山野 裕）

発行所 横浜市青葉区桂台 1-10-2

山野 裕 付 西朋登高会

編集者 尾崎 宏和

PDF 版 <http://seihou.cside.com>